

覺心、普門、紹明等の諸高僧を請じたまうた、辨圓禪師以後是等の諸高僧があつて、京都の禪風は支持せられてゐた、辨圓禪師の門下は益榮へて、高僧が雲の様に群出し、覺心、普門は共に元榮朝禪師の下で、辨圓の同學であつたが、辨圓が宋から歸へり京都に上つた後、相尋て宋に渡つて諸高僧を歴訊し、東歸の後は共に京都に上り、辨圓禪師が禪宗興隆の事業を受けて、一方ならぬ心力を盡した、就中普門は辨圓の學徳に服し、師資の禮を執り其法を嗣ぐこととなつたが、辨圓禪師が寂して後、龜山上皇の御歸依で、南禪寺を開いた、此事は正應三年である、覺心、普門の京都に聞ゆる時に、南浦紹明禪師が一方に興つたが、禪師は第二の辨圓禪師の様で、大に京都の禪風を擧揚した、初は建長寺の道隆の門下に學んだが、後宋に渡り九年の間の留學の功を畢へ、徑山の虛堂智愚禪師の法を嗣いで東歸し、京都に上りて伏見上皇の御歸依で、宮中に禪を談じ、勅願により嘉元禪院を開いた、鎌倉から北條貞時に強請せられ、建長寺に住したともある、一時京、鎌倉に往來して朝野の尊仰を、一身にあつめてゐた様である、門下に鏡圓、妙超の二傑が出て益京都の禪風の大勢力となつた、その事實は次下に説明するはづである、

曹洞の禪風は如何であつたかと云ふに、北國に本據を占めて懷辨、義价等の諸高僧が居られたが、共に京都に上らうとはしなかつた、西國に義尹禪師が居つて、遙かに東西相呼應してゐる状況にあつた、義尹は當時比類ない大徳で、二度まで宋に渡り、學徳並に高く譽へてあるが、弘安六年に肥後に大慈寺を開いて留住した、龜山上皇の御歸依を受け、特に紫の僧伽梨を賜ふたと云ふが、亦京都に上つて其門口を構へ様とはしなかつた、是等は皆道元禪師の遺風であらうが、かゝる次第で、曹洞は未だはなほしい大勢力を成しておらぬ、

第四、京都中心の時代

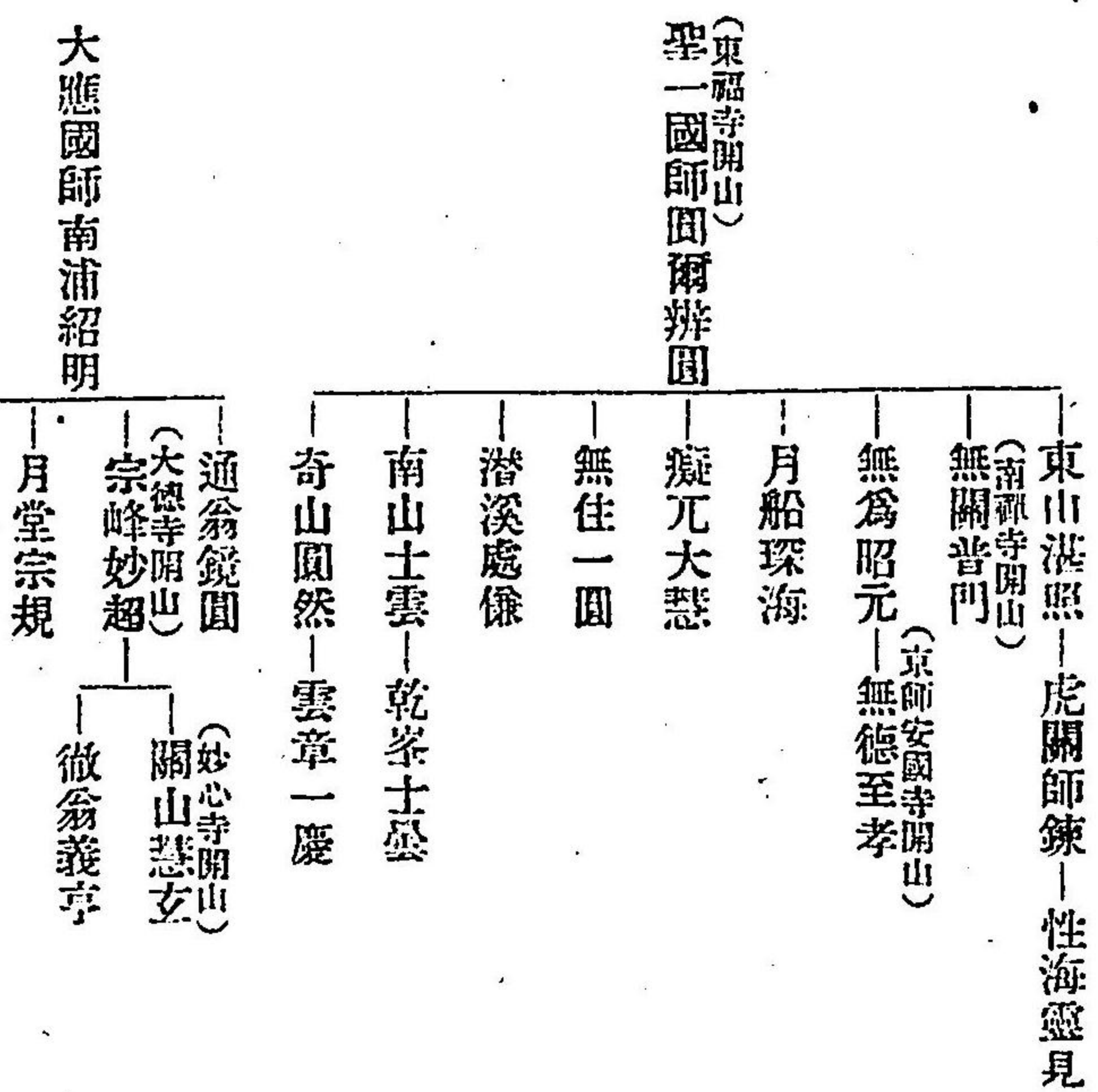
これより、進んで京都中心の時代を話さう、京都中心の時代は、臨濟曹洞が對立して極盛の域に至つた時代であつて、禪宗史の黄金時代と謂はるゝ時代であらう、後醍醐天皇の朝の初から、南北朝を貫いて、稱光天皇の朝の應仁の末まで一百餘年の間である、此間に臨濟曹洞の對立して極盛の域に至つたが、二宗の風は大に異つてゐる、前に話した様に、開祖の初から異つてゐる次第であるが、宗風が異つて且つ傳播の領域が異つてゐる、臨濟は鎌倉から京都へ中心が遷つて、京都の五山が榮へたが、所謂興禪護國の主意で、政治上の權力に附隨して勢力を張つた、曹洞は北國が中心で、漸次に諸國に傳播して大いに勢力を張つたが、然しド、ユまでも内的勢力を積まうとした者である、個様の次第であるから、臨濟の状況は如何にも目立つて華々敷いが、曹洞は然うでない、全く宗風が異なるからである、それで今京都中心の時代と云ふは、重もに後醍醐天皇の御歸依で同天皇以來、臨濟の京都に興つた形勢から謂ふわけであるが、後醍醐天皇の御歸依で、曹洞が興つたことも事實である、二宗が對立して極盛の域に至つた、然しその宗風が異り領域が異うから、一方は目立て華々敷く、他の一方は然うでない、禪宗史の上から觀れば、個様の相異は自然の妙配合である、第三期の末幕府が衰微した際、政治上の權力に附隨してゐた臨濟は、大に衰微したが、曹洞は益諸國に傳播興

隆した、始終二宗の形勢が異つてゐるは自然の妙配合であらう、仔細に観察すれば大に興味があるのである。

前に申した通りに、禪宗は東西相對して興つたが、其主なる勢力は東にあつた、鎌倉にあつた支那の歸化僧が本陣を構へてゐる建長圓覺等の隆盛は言ふまでもない、京都の諸禪刹は常に鎌倉から住持を招聘してゐた、然るに鎌倉の勢力は、漸次に西遷して京都に上つて、遂に京都中心の時代が開かるゝことになる、第二期に於ける京都の禪宗は、畢竟第三期の前置である、第二期の末から漸次に勢力が西遷した、第三期は其結果である、鎌倉の禪宗の勢力が京都に上つて、京都で興隆したものである、第二期以來鎌倉禪、京都禪の二様の風があつて、鎌倉禪は支那禪で、京都禪は日本禪である、日本禪と云ふは國家佛教の思想を受けてゐる意義である、然るに鎌倉の禪宗の勢力が西遷して京都に上り、京都で興隆する様になつて、自ら二様の禪風は合同した様である、鎌倉の禪宗の勢力が西遷してから、第三期京都中心の時代が開かれたは事實であるが、京都は鎌倉禪である支那禪の弊害を受けなかつたであらうか、支那禪の弊害と云ふは誤解するともあらう、支那禪に附帶してゐる支那思想は、政治社會の上に影響を與へた様である、南北兩朝の分立は公武の對立であらうが、前に鎌倉幕府の一部を感化した支那思想は、室町幕府を感化した様である、南北兩朝の時に、北朝が常に禪宗を重じた様であるが、是等の事實は大に研究せねばならぬ、要するに鎌倉の禪宗の勢力が西遷して京都に上り、其結果京都中心の時代が開かれたは事實で、京都の宗教、政治、社會の上に大なる影響を與へたも亦事實である、

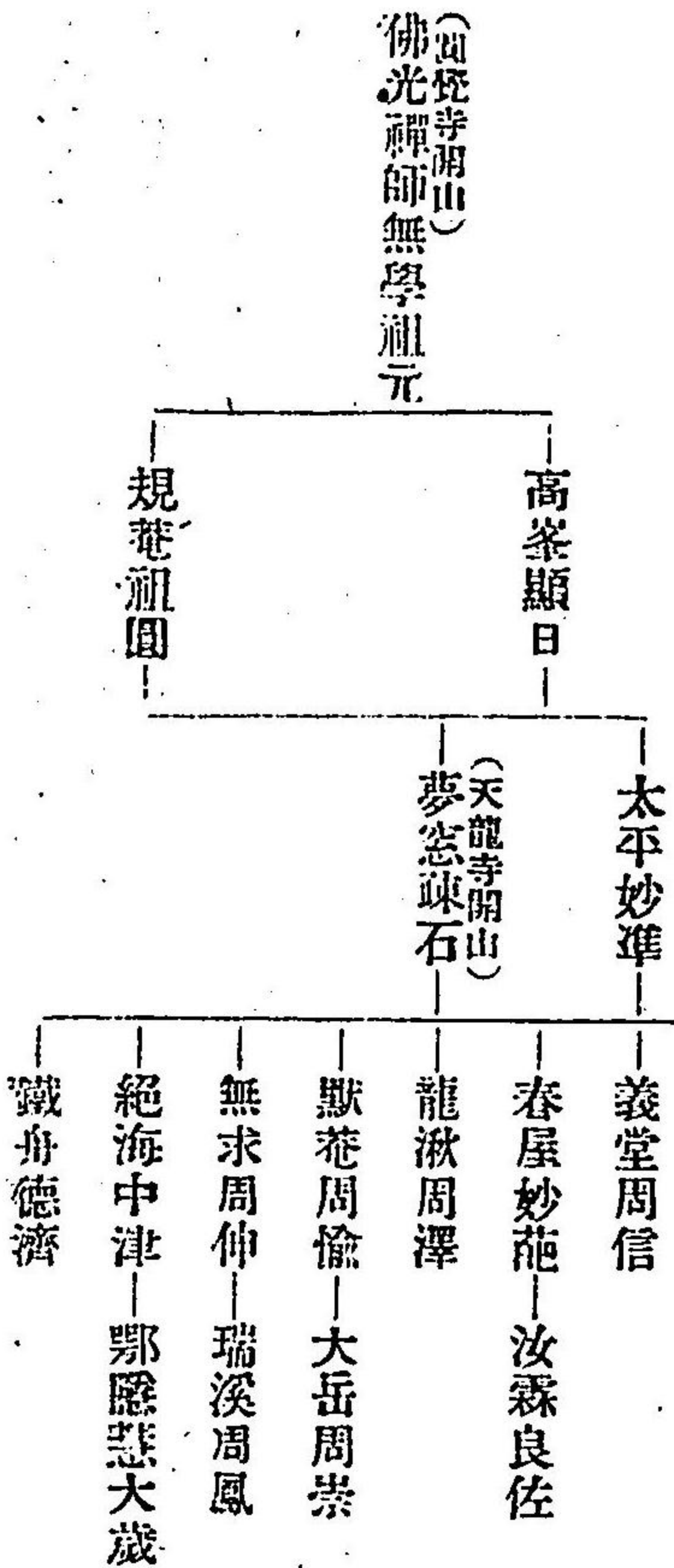
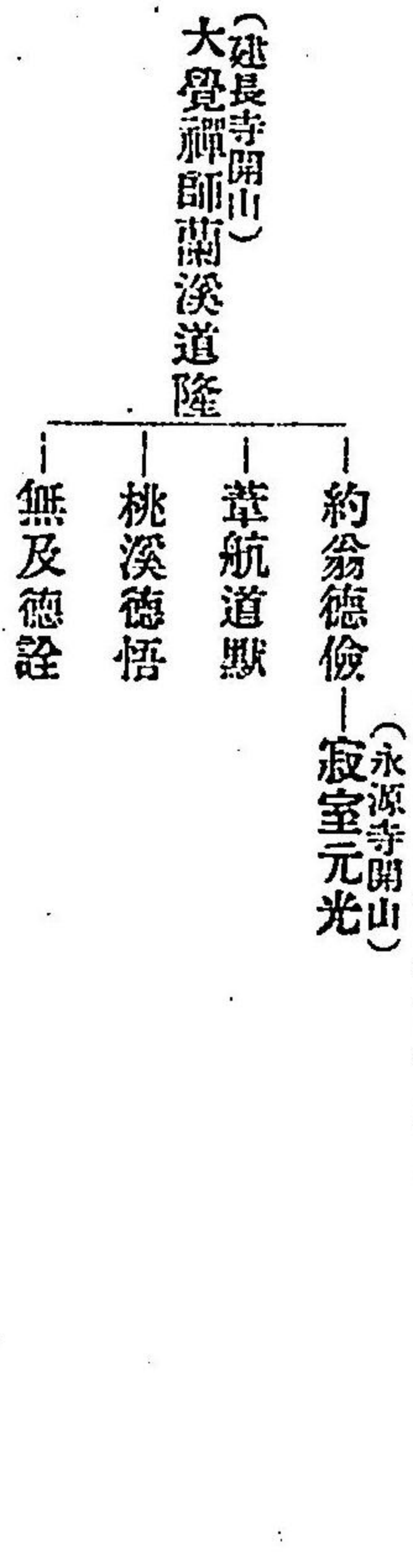
それで順序を追うてその大畧を話す積りである、

京都の方で辨圓、紹明の二禪師の門下が榮へてゐる、二禪師の門下に、大徳が輩出して、京都の禪風を舉揚してゐる其状況を一目して解る様にすれば次の如くである、



滅宗宗興

鎌倉の方では如何であるかと云ふに道隆、祖元の二禪師の門下が大に榮へてゐる、就中祖元の門下から大徳
か出て、京都に上り東西の關係が成立つた次第である、



當時舊宗、新宗の衝突は續いてゐた、京都では天台、眞言が常に禪宗を壓抑し、妨害するに力を用ゐたが天
台、眞言には大徳高僧か出てゐない、禪宗には盛に出て禪宗は益興隆した、しかも此の京都中心時代に入り
益興隆した、これは自然の勢であつた、

後醍醐天皇は、大に禪宗に御意を傾けたまひ、常に禪宗の高僧大徳を宮中に勅召したまうて、禪宗の法門を
談したまうたが天皇の問答書は傳つてゐる、その御熱心であつたことは、問答書等て明に分る、個様の次第
で益京都に禪宗の僧侶が尊重を受くる様になり、天台、眞言の僧侶は大に惡意を挾んでゐたが、遂に破裂し
て元亨の宗論になつた、

平安朝に天台宗が興つた時に、法相宗が對抗して一大宗論があつた、所謂我國四度の大宗論の一で、應和の宗
論と云ふ、此時天台宗の良源即ち慈惠僧正が勝つて、天台宗が興隆したわけである、然るに元亨の宗論は天台、
眞言、法相等が合同して禪宗に對抗したものである、これを元亨の宗論と云ふが、元亨四年に改元して正中
となつたから、實は正中元年正月に宮中に於て開かれたものである、天台眞言には誰れが出たかと云ふに、
天台では玄慧、眞言では虎聖と云ふが傳はつてゐる、玄慧は末の新註を講したと云ふ學僧である、禪宗には
鏡圓、妙超の二禪師が出て就中鏡圓が一人で引受けて辯論した様である、其宗論の模様は傳はつてゐるが、
大に興味がある、天台、眞言の方から問を發すれば、禪宗の方から答へてゐるが、其答は禪宗の問答風の答
であるから、天台、眞言の方では薩張り要領を得なかつた様である、玄慧が、禪宗に所謂教外別傳と云ふは

如何様の義であるかと問うた、鏡圓が侍者に命じて答へさせた、侍者は大聲で、八角の磨盤空裡に走ると叫んだ、虎聖が、禪宗の禪とは如何なるものであるかと問うたが、鏡圓は靜に、白雲萬里と答へた、始終個様の風であるから、天台、眞言の方では薩張り要領を得ないで閉口した、それで終に禪宗の方の勝と云ふことになつた、此宗論が終つて退散の途中で鏡圓は寂したと傳はつてある、後ち妙超は大に朝野の尊重を受けた、殊に赤松圓心の本願で紫野の大徳寺を開いた、これが京都に於て武家の本願で寺を建立した初めてある、妙超の門下に慧玄、義亨の二大徳がある、共に後醍醐天皇の歸依を受け、慧玄は妙心寺を開いた、宗論の後是等の盛舉のあつたは鏡圓妙超の力である、

然るに當時更に重大なる出來事がある、それは此際に疎石禪師が勅を拜して京都に上つたのである、疎石禪師とは言ふまでもないことで、七朝の帝師と仰がる、夢窓正覺心宗普濟國師のことである、こゝで此國師の事業を話さねばならぬ、

夢窓國師は一山、顯日の二禪師に師事して禪を究めたものである、顯日禪師の事は未だ話さなかつたが、後嵯峨天皇の皇子で祖元禪師の法嗣である、夢窓は顯日の法嗣で祖元禪師の法孫である、常に世間に顯はるゝことを嫌うて幽棲しておられたが、正中二年に勅命を辭することが出來ないで、上總の退耕庵を出て京都に上つた、これは南禪寺の法席を繼ぐためである、南禪寺の法席は一山、徳儉が相續したが、元應三年に徳儉禪師が寂して、其後を繼ぐ大徳がなかつたから、勅命で夢窓を請することになつた次第である、其時夢窓國

師の詩がある、世路悠悠懶往還、一庵甘分卜殘山去々々、これが國師の眞意であつた様である、然るに再三の勅命で辭することが出來ないで、徳儉の後を繼ぐことになつたが、京都に上つてからは、大に天皇の御飯依を受けて、常に宮中に入つて法門を説いた、勅命で臨川寺を開て住するとになり、鎌倉から數々請待せられても再び下らなかつたが、所謂建武中興の後益御飯依を受くることになつて、京都で大に禪宗を擧揚したが、鎌倉の禪宗勢力の西遷は、全く國師の力に由つた次第であるとは明瞭な事實である、國師の年譜建武元年の條に次の様のが見えるが、當時の事情が察せらるゝ様である、

始關東亡時、人皆謂禪苑其不興也、最明寺殿平公護禪宗、子孫相繼欽奉其法、天下化而奉之、今平氏已滅、惟禪宗誰爲護乎、至是詔降召師、禪徒歡呼之聲隘乎山林、而徹乎街衢、師亦自惟斯乃護法善神、不忘先佛記、薪故使然也、由是心倍勇健、以救法爲自責也、云々、

南北兩朝が分立する様になり、室町幕府が開かれて全く政治上の権力が、鎌倉から京都に遷つた同時に、禪宗の勢力が京都に遷つて京都が中心になつたが、其中心の中心は夢窓國師であつた様である、室町幕府の歸依は尋常の事でない、尊氏、直義等は師資の禮を執つて事へてゐた様である、勅命で天龍寺を開いたが、實は尊氏の方で建立の工事が出來上つたものである、其後京都で夢窓國師の勢力は、如何にも驚くばかりのものである、

さて京都で禪宗が盛になれば其盛になるにしたがうて、天台、眞言等は益壓抑し妨害しやうとする、彼等は

南禪寺、天龍寺の繁榮を見て大不平である、就中比叡山の僧徒は暴力で南禪寺、天龍寺等を破壊しやうとするに至つた、其顯著なるは康永應安二度の嗷訴である、其始末は委く説くことも出来ないが、彼等が暴力で騒立てる際に、夢窓國師等の態度のは如何であつたか、これは國師の傳記語録等で見ればはゞ分るが、國師は弟子共を誡めて、彼等の暴力に對抗しやうとは志さないで、至極平穩に装ほひ、沈着に構へてゐた様である、その頃何人かの警句がある、靈龜背上天龍睡、三千群狙叫不驚、至極滑稽であるが實際の狀況を示してゐる様である、個様の工合で着々國師の事業は成立つたものである、

夢窓國師が如何様に禪宗を説いたかと云ふとは、ほゞ其著作で判る、國師の著作は語録もある、詩歌もある、然し一番國師が禪宗を説いた様子の判るものは、夢中間答である、一部の書で世間に行はれてゐるが、其問答の中には鎌倉、京都の二様の禪風を調和合同してゐる様に見えるところがある、こゝで是等の事を委しく話すこともできないが、當時の禪宗の形勢を察するに付ては、大切の書で必ず讀まねばならぬ、畢竟するに、當時一種の國家的佛教の形骸が完成した様である、京都に公家、武家の二勢力が對立する様になつて、二勢力に伴うて公家佛教、武家佛教が對立した、詳に言へば共に國家的佛教であるが、公家の勢力に依つてゐる天台、真言と、武家の勢力に依つてゐる禪宗とが對立した、然るに武家の勢力の益強大なると共に、武家佛教である禪宗に高僧大徳が輩出し、所謂内外相助けて武家佛教が旺盛を極むるになつた次第である、それで室町幕府以來禪宗は、第二の平安朝佛教になつてしまふた、平安朝の天台真言が、國家安穩

の祈禱を盛に行ふた様に、禪宗が同様の祈禱を盛に行ふこととなつた、要する所禪宗が極盛の域に至つた時、禪宗の眞面目は大半没してしまふたものと謂うてよからう、

五山を定めたと、諸國に安國寺を置いたなどと話さねばならぬが、五山の事は前に一口話したから略して置かう、安國寺は同じく幕府の力で、京都並に諸國に置いたもので、丁度奈良朝の國分寺の様なものである、國分寺の制に倣ふたもので、敗類してゐる國分寺を再興して安國寺と寺號を附したのもあつた様である、幕府の力で所謂興禪護國が事實になつたものと見てよからう、然し國分寺の様に普く諸國に置くことは出来なかつた様で、ほゞ其故跡は分かつてゐる、

南朝の延平六年、北朝の觀應二年に夢窓國師は遷せられたが、其遷化せられたとは、禪宗の勢力を挫く様のことではなかつた、門下に大徳が雲の如く出てゐる、南禪、天龍等の諸禪刹は皆門下の支配するところであつて、幕府の關係は益深くなつた、尊氏、義詮を経て義滿に至り、禪宗の大徳を尊重した事は尋常でない、妙葩、周信等は師事してゐた、妙葩は義滿の本願で相國寺を開くとになり、天下の僧録司に任せらるゝとなつた、北朝の康暦二年の事である、幕府は僧録司を置いて天下の釋僧を監督したが、始めて妙葩が任せられたのである、

義滿は數々五山の位次條例等を定め、五山の上に南禪寺を置いた、これは南禪寺に何等の關係があるわけがない、義堂、周信が同寺の法席に坐つたからである、義滿が周信を尊重してゐたとはこれでも判る、常に政

治向の事柄にも教を受けてゐた様である。周信の空華日工集と云ふがある、是等の事實を知るには、必ず讀まねばならぬものである。

當時禪宗の關係してゐる事柄は極めておほい、政治、外交、文學、美術等が皆直接か間接か關係してゐる、是等の事柄に關係してゐる状況を話さうなら、大に興味もありませんやう、然しこれも専門の研究を要することありますから、一切畧しておきます。

これから五山文學に就いて、述べたいが、それは私の舊稿「五山文學小話」と云ふのがあから、それを今はこゝに掲げて、參考に供しませう。

◎五山文學小話

(上)

◎宋に教の五山、禪の五山と云ふがあつて、我國の五山は、宋にあるものに摸したものであるが、京鎌倉の兩地にあつて、京の五山、鎌倉の五山と云ふた、その起源沿革等に關しては、大に議論もあるが、こゝにはそれらの複雑なる議論は一切措き、普通に所謂五山で、室町時代に京都に榮へた天龍相國建仁東福萬壽の諸禪刹を指すのである、當時に於けるこれら諸禪刹は、學術技藝の中心であるから、諸種の方面から研究せられねばならぬものである。

◎然るにこゝには單に五山文學の事について、一ツ二ツ話すつもりである、五山文學は五山の禪僧の手に興つた支那文學である、その範圍は極めて狭いが、實は當時の文學の全體であつて、これが徳川幕府三百年間の支那文學の淵源である。

◎我國に於ける支那文學興隆には、前後三期ある、一期は平安朝の支那文學で、當時國文學支那文學は兩々對立并行して興つた寧ろ、國文學は女子文學で、支那文學は男子文學であつた、大學では一に支那文學を教授したが、歴史は訓詁を主としたから思想の發達はしなかつた、詩文は盛に作られたが、其形體思想共に幼稚である、就中詩は一に白樂天を摸した弊害で、自然に卑俗に流れてゐる、鎌倉の初に至り、國文學支那文學は一致結合して、一種の文學が興た、即ち所謂鎌倉文學なるものが興た、然るに室町幕府の初めから、再び支那文學が別立した、即ち五山文學はその別立したもので、それが我國支那文學興隆の第二期である。

◎平安朝の支那文學は大學が中心であるから、おもに公卿の手にあつた、僧侶には最澄空海の文、蓮禪の詩があるが、その餘にも見らゝるものはない、室町幕府の詩の支那文學は、所謂五山文學で、五山の禪刹が中心であるから、全然禪宗の僧侶の手にあるが、彼等禪僧の伎倆が、はるかに平安朝の公卿の上に出てるは言ふまでもない。

◎古來五山文學に目をつけたものは頼山陽江村北海等二三の學者にとゞまるやうである、山陽は五利詩鈔の後に次の様に云うてゐる

國朝詩運兩開兩壞、猶文章一也、初壞於長慶、後壞於萬曆、中間爭亂、不暇爲中晚宋元一也、五山僧侶頗

爲_二瘦硬絕句_一、其中巨擘有_二若_二義堂絕海_一、頗雄奇、有_二辜閻儒紳不_レ及處_一、當時王霸盛衰渠輩冷眼傍視頗形_二之吟詠_一、合_二有_二譏諷_一、又非_二近時士君子徒鏤_二刻風月_一爲_二無_二益詩_一比_レ也

五利詩鈔と云ふ書は今傳つてゐない様であるが、山陽のこの文は遺つてゐる、其五山の僧侶を揚げて當時の文人を罵詈するところ、大に興味があるてないか、義堂絶海を擧げて、一言も雪村虎關寂室におよばないは何故であらうか、

◎山陽の論詩絶句廿七首の中に一首絶海を推獎してゐる詩がある

衣中廿八顆明珠、風雅終然墮_二筍疏_一出類故當_二推_二絶海_一、指_二揮如意_一掣_二鯨魚_一、

此推獎は當を得てゐるが廿八字の七言絶句ばかりを評價して律詩におよばない意が知れない、絶海が律詩の風格は明の空室禪師の衣鉢を傳持してゐるもので、前後に相並ぶものもなからう、

◎南山古梁禪師が五山の僧侶の詩集に關して、次の様に云うてゐる、

日本の僧の詩集は蕉堅稿、南遊東歸集、東海一瀛集、高園集等いづれも入唐ありて語は和習を脱し嚴然たる中土の音なり依用すべし、濟北集空華集の如きは波瀾浩渺として提唱痛快なりといへども、多き中には自ら和習もあるべければ寧ろ約に學ぶを可とす云云、

さすがに禪師詩眼があつてその言はは、當つてゐる、然かし絶海は古今一人で、蕉堅稿に並ぶ詩集はなからう、別源の南遊東歸集、中巖の東海一瀛集は今散佚した様であるが、その詩は一二の書にも見ゆるが、とて

も絶海に並ぶものでない、中巖は日本記を撰し、後醍醐天皇一見してその書を燒棄したまひたりと云ふ事から著名であるが、實は詩よりも學問の方が得意であつたのであらう、平素好んで揚子法言を讀んでゐたと云ふから、ほとその人柄も推知せらるゝでないか、

◎雪村の岷峨集、汝霖の高園集等は如何にも嚴然たる中土の音といふべきものであらう、汝霖は絶海同時に明にあつて詩名を争ふたと云ふから、其高園集はたしかに一家をなしてゐるものであらうが、今は散佚して傳はらない様である、高僧傳の援引書目に、高園集の名を列ねてゐるが、汝霖の傳中に詩の傳はらないとあるは、前後撞着してゐる、要する援引書目に列ねてゐるが師蠻は見なかつたものであらうが、道熙の高僧詩選にも、汝霖の詩が一首も掲げてないは何故であらうか、いよく解せられない、然るに古梁が高園集を擧げて評してゐるを見れば、當時は傳はつてゐるたは明白であるが、今は散佚して傳はらない様である傳中に吞海樓の一律が録してあるが、あの一首の伎倆で推測すれば、未だ絶海に敵對するとはできないであらう、

◎虎關の濟北集義堂の空華集を評しては波瀾浩渺として提唱痛快なりとは大に妙である、虎關の博覽多識なるは、前後に比ふものもない、濟北集はこの一事で諸家の集を壓倒してゐる、虎關は古詩吟の長篇を作つたが、當時古詩を縦横に作つたものはない、虎關一人である、且つ詩話を作つたが、これが我國の學者で詩話を作つた始めである皆傳ふべき事があらう、

◎五山文學に就いて、五山の三傑と云ふものを選ばうなら、學には虎關、詩には絶海、文には義堂であらう、

義堂の文は千言萬言滾滾として流れて盡きない状がある、嚴然一家を成してゐるは言ふまでもない、

(下)

◎支那文學興隆の第二期は、全く禪僧の支配するところて、其初は榮西道元である、臨濟禪を傳へた榮西、曹洞禪を傳へた道元は、いつれも其宗の開祖であるはかりてなく、支那文學興隆の第二期の開祖である、就中道元禪師の詩文は、早くも一種の風格を備へてゐる、當時の支那文學の一方面から觀て、禪師の廣録八卷に匹敵するものはないであらう、曹洞宗に其後水月庵大智が詩文で著はれてゐるが、こゝには姑く要かないから言はぬ、

◎鎌倉幕府の初に、臨濟禪を顯揚した諸大徳、即ち圓爾、約翁、南浦、靜照、等は、皆詩文にも意を用ひたが、其作にはまゝ傳へらるべきものがある、建武貞和の頃から、天岸、雪村、虎關、別源、寂室、夢窓、古劍、龍泉、等相尋て出た、所謂第二期は先づ彼等によりて開かれた、其の後、夢巖、中巖、天境、雲溪、性海、伯英、汝霖、義堂、絶海の出づるに至つて、隆盛を極めた、天岸以下の諸師は、いつれも別行の集がある、その中、天岸の東歸集、別源の南遊東歸集、古劍の了幻集、龍泉の松山集、中巖の東海一瀝集、天境の無規矩、雲溪の賸隱集、西巖集、性海の石屏集、伯英の萬松集、汝霖の高園集は散佚して傳はないやうであるが、雪村の岷峨集、虎關の濟北集、寂室の寂室録、夢巖の早霖集、義堂の空華集、絶海の蕉堅稿は、傳はつてゐるが、これらの集は、いつれも我國文學史上の寶玉である、

◎支那文學興隆の第二期は、其初め榮西道元から端を開いて、漸次に興隆し、義堂絶海に至つて其極に達したもので、絶海は應永十二年四月に寂したが、絶海の後を繼紹する作家は一も出ない、實際應永の末に至つて、風氣が一變してゐる様で、絶海の前線で判然區別せられてゐるは一奇である、然し此に注意せねばならぬ事からは、應永の末から、天下騷亂の間に、所謂五山の禪僧が學問を勵たのである、絶海の後を繼紹する作家は出ないが、學者は出た、即ち漸く盛に唐宋の詩を註釋した、彼等は詩を作らないで、詩を説いた、◎日本詩史に江村北海が、五山の禪僧の詩を評し、絶海義堂の二人を推獎してゐるが、其の言は皆公平である、然るに二人に次で、太白、仲芳、惟忠、謙岩、得巖、鄂隱、西胤、玉腕、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村菴の十六人の名を列舉してゐるが、これは北海が思ひ當るに任せて列舉したものであらう、この十六人の中には、作家といふほどでない人がある、要するに、數百人の中より、この十六人を列舉したのは其取捨宜を得ない様に思はる、

◎應永の中頃に、觀中、天祥、愚中、東漸、岐陽、鄂隱、得巖、鐵舟、等か聞へてゐるが、觀中の青嶂集、天祥の龍涎集、東漸の龍石集、岐陽の不二遺稿、鄂隱の南遊稿、得巖の東海瓊華集は散佚して傳らなむ様であるが、其時は諸書に遺つてゐるから見ることもできるが、いつれも絶海に稍後れて寂したくらゐるから、尙ほ大に傳へらるべきものがある、然し愚中の卯餘集、鎮舟の閻浮集は共に傳はつてゐるが、其作は頗る拙である、五山の盛時に一世の大宗匠と云はれながら、其詩文の拙なるは愚中策彦の二人であらう、愚

中の作はちほく傳はつてあるが、一首も見らるゝものがない様である。

◎策彦は明に使したとで著はれてゐるが、其入唐記、初渡集、再渡集等で示されてゐる様に、數次明に航しおほくの名匠にも交はつてゐなから、其作は極めて拙であるは、如何にも解せられないとの様である、然しその數のおほいには驚かねばならぬ、別行の三千句九千句は坊間にも傳てあるが、實際六千首以上有してゐるとのである、策彦同時に天龍寺の江心は策彦に競うて五千句作つたと云ふがその詩は傳はらないやうである。

◎應永以後に著はれてゐるは誰れてあらうか、瑞巖、惟忠、心田、江西、東沼、天隱、桂菴、一休、嵩山、信仲、景全、慧風、常菴、瑞溪、雪嶺、天章、天興、彦龍、月舟、竺雲、南江、萬里、湖月、祖溪、太白、横川、正宗、蘭坡、三益、中恕、大清等は、いつれもその集を刻してゐるから、一家を成してゐるものと見ねばならぬ、然るに是等諸家の集で、現存してゐる者は僅少である、惟忠の雲壑猿吟、心田の聽雨集、江西の續翠集、天隱の嘿雲稿、桂菴の烏陰漁唱、一休の狂雲集、續狂雲集、景全の宜竹殘稿、慧風の竹居清事、常菴の角虎集、瑞溪の臥雲稿、雪嶺の梅溪集、彦龍の半陶稿、月舟の幻雲稿、萬里の梅花無盡藏、三益の三益集、中恕の碧雲集等である、瑞巖の蟬閣外稿惟忠の春耕集、東沼の流水集、天隱の翠竹真如集、嵩山の少林西信仲の宗鏡集、景全の翰林胡蘆集、天章の梅樹集、天興の萬里集、竺雲の鑿雲菴南江の鷗巢集、萬里の棘門集、湖月の湖鏡集、祖溪の水拙文集、太白の鴉臭集、横川の京華集、蘭門集、東遊集、正宗の秃尾長柄

帚蘭坡の雪樵獨唱集、大清の紙襖集等其集は數へきれないが是等は今日存してゐるか否か未だ譯らない、

◎應永の頃から、五山に學問が興つた、其魁は岐陽得巖桂菴等であらう、岐陽は盛に四書の朱熹註を講し、古來傳習の謬を正し、得巖は始めて莊子口義を講したが、其後桂菴、雲章、慧風等相尋て出て漸次盛に朱熹集註を講したが、皆一方に從へた學匠である、正平の頃、玄惠が始めて宋の新註を用ゐたことは何人も熟知してゐることであるが、玄惠の後ち四書を講し新註を用ゐるものもなかつた様である、岐陽得巖桂菴に至り大に推奨したが、其功は没せられないのである、五山の經學が是等の人から興つたは事實である、岐陽の門下雲章は始めて周易傳義を講して益盛に新註を推奨した、

◎當時五山に於て、經史詩文並に研究せられたもので、月舟、仲芳、桂林、桃源、竺雲等はいつれも博覽洽聞で知られてゐるが、彼等は史記漢書等を講し、また諸家の詩を註した、桂林の史記提要鈔、古文真寶註、桃源の史記鈔、竺雲の古文真寶鈔、四河入海等はいつれも一時流行したもの、様である、就中宋詩は盛に愛誦したものと見え、東坡山谷の詩を註したものは極めておほい、竺雲、萬里、瑞溪、江西、等皆東坡の詩鈔を編した、即ち四河入海もその一である、唐詩は三昧詩を愛誦したもので桂林萬里の註がある、然し萬里は自ら一代の作家を以て任してゐたやうであるが、其詩は極めて拙である、決して唐詩の妙所を領會するとはできなかつたであらう、心華は杜甫の詩を註し、心華臆斷を撰したが、其書は傳らない、天隱は錦繡段を、月舟は續錦繡段を、月舟の弟子絶天は續錦繡段鈔を編した是等の書は後世までも流行したが、個様の事は一

々言ふまでもなからう、

◎要するに、支那文學興隆の第二期である五山文學は、應永の末で前後兩半し、前半は詩文の時代で、後半は學解の時代であるは事實である、それで所謂第三期である徳川幕府三百年間の支那文學は、其初め第二期とある五山文學の後半に負ふところが著しいのである、其間に一種の聯絡のあることは、惺窩羅山關齋等の傳を見れば明瞭である、彼等は皆最初京都の禪僧から學業を受けたものである、

曹洞宗の形勢は如何であらうか、これは諸君の方がよく御承知の事であらうが、順序であるから話さねばならぬ、然し極簡短に話して置く積りである、

臨濟宗の形勢は、大に目立って花々敷いが、曹洞宗は華々敷くない、然し實際の勢力は益強大であるが、一宗の繁榮は、次の圖で察せらるゝことであらう、次の圖は主として圓明國師の門下の明峯、峩山二禪師の門下を示したるものである、右肩に記したるは、其開創にかゝる寺院である、

○永陽大師道元

孤雲懷辨 (京師藤原氏)

加賀大乗寺 (越前藤原氏)

徹通義价

惣持寺

圓明國師—峩山紹瑾

越中光禪寺 (加賀富樫氏)

明峯素哲

肥後大慈寺 寒巖義尹 (今姑く洞上聯灯録に依る)

(越前藤原氏)

能登光恩寺 (加賀某氏)

松岸旨淵

無涯智洪 (加賀某氏)

峩山紹碩 (能登源氏)

越中紹光寺

龍庵至簡 (加賀藤原氏)

越中信光寺

珍山源照 (加賀某氏)

默譜祖忍 (能登某氏)

加賀祇陀寺 肥後聖護寺 同慶福寺 祖繼太智 (肥後某氏)

珠巖道珍 (未詳)

能登圓興寺

月鑑虛焯 (未詳)

美濃靜泰寺

館開僧生 (能登德田氏)

加賀永平寺

玄路統玄 (未詳)

加賀放生寺

龍松素溪 (未詳)

能登永禪寺

月菴院映 (未詳)

加賀寶應寺

明照尼 (越前某氏)

奥州正法寺

無底良韶 (能登藤原氏)

加賀佛陀寺

太源宗眞 (加賀某氏)

越中自得寺

無際純證 (能登某氏)

日向皇徳寺

無外圓照 (藤原某氏)

丹波永澤寺 越前龍泉寺

通玄寂顯 (豐後藤原氏)

越中光禪寺

無等慧崇 (未詳)

月泉良印 (能登藤原氏)

- 越前祥園寺
- 無端祖懷(能登某氏)
- 奥州永徳寺同高禪寺
- 道更道愛(出羽平氏)
- 伯耆退休寺下野泉溪寺奥州慶徳寺同示現寺
- 源翁心昭(越後源氏)
- 越中立川寺
- 大徹宗令(肥前某氏)
- 大方韶勤(未詳)
- 能登定光寺備中永祥寺
- 寶峯良秀(能登某氏)
- 竺源超西(未詳)
- 加賀聖興寺
- 太山如元(筑紫某氏)
- 竺蕪了源(越前某氏)

太祖圓明國師瑩山紹瑾が、大に宗風を擧揚せられた、國師は比類ない大徳であつて、其門下に多くの亦大徳が出られたから、益興隆する事になつたは事實である、

國師は越前の産である、曹洞宗の中心地とも云はる、土地に生れたが、幼にして永平寺第二世孤雲懷辨の下に投じ、懷辨禪師遷化の後、第三世徹通義价の下で參究し、後京都の地方に出て寶覺、慧曉、覺心等の諸禪師をも歴問せられた、是等の諸禪師は、いつれも臨濟宗の大徳である、越前に歸りて寂圓及び義价に師事し、遂に義价禪師の法を嗣がれ其附屬を受けて、曹洞の宗風を擧揚する事を以て自ら任しておられた、加賀、能

登の地方に歴遊して道場を開立せられたが、噴々たる盛譽は京都にまで傳はり、元亨の初めてある、後醍醐天皇の勅召を被られた様である、然し京都には上らないで、勅問十個條を奉答せられた、それで北國に潜める國師の盛譽は、朝野を動かしした様である、

諸嶽山總持寺を開かれたは、同寺の定賢禪師と云ふか延請せらるゝに任せて、道場とせられたもの、様であるが、これが後に永平、總持二大本山と云はるゝ様になつた、國師の勢力は驚くばかりである、

正中二年即ち臨濟の夢應國師が、勅請を拜して京都に上る年である、國師は此國で遷化せられた、然し其後國師の門下は盛に榮へた、門下に大に顯はれてゐるは明峯素哲、峩山紹碩の二禪師である、二禪師の下から二大法派が出でたる様であるが、峩山派と云ふ方は、益榮へて門下五派相競ふて榮へる様になる、

曹洞宗の大徳は皆開祖の遺風を受け、顯貴に近附くことを避けられた、寒巖義尹禪師は皇胤であるが、數々勅請を被りながら固辭して京都に上られなかつた、明峯素哲禪師も、數々勅請を被りながら固辭せられた様である、これか曹洞宗の眞面目のあるところであらう、

後醍醐天皇は禪宗に御意を傾けたまひ、臨濟、曹洞の別を問ひたまふやうの筈がない、數々勅請があつたら、曹洞宗の大徳が京都に上る機會はあつた、然し一人も京都に上らうとはせられなかつた様である、京都で臨濟、曹洞相並で興隆すれば、大に壯觀であつたであらうが、共に盛になつたものは、共に衰へねばならぬ筈である、室町幕府の中等以後、京都の臨濟は大に衰へた、然し諸國の曹洞は大に盛になつたは事實であ

る、畢竟當時曹洞宗の大徳が京都に上らなかつたは、曹洞宗の眞面目を保つたばかりでない、禪宗の眞面目を保つことが出来た様である、それは後の事實に判る、

峩山紹瑾の門下の大徳は、四方の諸國に奔りて傳導せられた良紹道愛は奥州地方に入り、寂靈心照は山陰地方に、良秀は山陽の備中地方に、圓照は九州の日向、薩摩地方に入りて道場を開かれた、是等地方の勢力は決して等閑に附してはならぬ、

以上臨濟、曹洞二宗の形勢を對照すれば大に相果してゐるが、單に曹洞宗の上に就いて熟察すれば、稍圓明國師の門下の益盛なるに付て稍宗風が變遷してゐる様にあるが、これは畢竟時勢の強迫である、

○第五地方傳播の時代

第五に地方傳播の時代と云ふは、後花園天皇の永享の初から、後陽成天皇の朝まで大凡百六十年ばかりの間である、此年間の禪宗の形勢により、假に稱したるものである、

さて鎌倉中心の時代と云ひ、京都中心の時代と云ふは、共に主として臨濟宗の形勢から附けたものである今は、主として曹洞宗の形勢から附けたる者で、期間に諸國の地方に傳播して勢力を得たものが、大半曹洞宗である、

前に掲げた様に、圓明國師の門下は大に繁榮したが、就中明峯素哲、峩山紹碩の二禪師の門下が繁榮した様である、然し明峯素哲の門下は、重に北國に繁榮した、唯詩偈で聞へてゐる大智禪師が、西海に一門を構へ

たばかりの様である、峩山紹碩の門下の龍象は四方の諸國に奔つて其家風を舉揚した様である、是等の事實を總合して、當時の曹洞宗の形勢を觀察せねばならぬ、

室町幕府は幕府と云ふも、實際諸國の諸大名を統一してゐるのでない、諸國の諸大名は、孰れも獨立の態度であつた、幕府が衰ふれば衰ふるだけ諸大名が強くなる、諸國の諸大名は、銘々腕次第で土地に割據して、自由に其土地を治めてゐた、是等の事實は、今悉く説くまでもないが、禪宗が諸國の地方に傳播するには、大に關係があつた次第である、諸國の大名の割據するに付て、禪宗の諸大徳が亦自ら割據の狀をなした様であるが、これは大に研究せねばならぬ事であらうと思ひます、

武家佛教と云はる、禪宗は、實際武家の思想に投合し易いものであるから、武家の歸依信仰する様になり、諸國の諸大名は相競うて、禪宗の高僧大徳を請待して尊敬したが、これが禪宗の大なる勢力になつた様である、

武家佛教と云はる、禪宗は、臨濟、曹洞共に同様であるが、自然の形勢で二様に分れ、臨濟の高僧大徳は皆幕府の尊敬を受けたが、曹洞の高僧大徳は、皆諸國の諸大名の尊敬を受くることになつた、幕府が衰へて諸國の諸大名が強くなるにしたがうて、曹洞の高僧大徳は勢力を得る様になり、諸國の地方に曹洞の宗風を舉揚する様になつたもので、即ち今所謂、地方傳播の時代と云ふが開かる、次第であるか、地方に傳播するは主として曹洞宗である、

る、畢竟當時曹洞宗の大徳が京都に上らなかつたは、曹洞宗の眞面目を保つたばかりでない、禪宗の眞面目を保つとが出来た様である、それは後の事實に判る、

峩山紹瑾の門下の大徳は、四方の諸國に奔りて傳導せられた其詔道愛は奥州地方に入り、寂靈心照は山陰地方に、其秀は山陽の備中地方に、圓照は九州の日向、薩摩地方に入りて道場を開かれた、是等地方の勢力は決して等閑に附してはならぬ、

以上臨濟、曹洞二宗の形勢を對照すれば大に相采してゐるが、單に曹洞宗の上に就いて熟察すれば、稍圓明國師の門下の益盛なるに付て稍宗風が變遷してゐる様にあるが、これは畢竟時勢の強迫である、

○第五地方傳播の時代

第五に地方傳播の時代と云ふは、後花園天皇の永享の初から、後陽成天皇の朝まで大凡百六十年ばかりの間である、此年間の禪宗の形勢により、假に稱したるものである、

さて鎌倉中心の時代と云ひ、京都中心の時代と云ふは、共に主として臨濟宗の形勢から附けたものである今は、主として曹洞宗の形勢から附けたる者で、期間に諸國の地方に傳播して勢力を得たものが、大半曹洞宗である、

前に掲げた様に、圓明國師の門下は大に繁榮したが、就中明峯素哲、峩山紹碩の二禪師の門下が繁榮した様である、然し明峯素哲の門下は、重に北國に繁榮した、唯詩偈で聞へてゐる大智禪師が、西海に一門を構へ

たばかりの様である、峩山紹碩の門下の龍象は四方の諸國に奔つて其家風を擧揚した様である、是等の事實を總合して、當時の曹洞宗の形勢を觀察せねばならぬ、

室町幕府は幕府と云ふも、實際諸國の諸大名を統一してゐるのでない、諸國の諸大名は、孰れも獨立の態度であつた、幕府が衰ふれば衰ふるだけ諸大名が強くなる、諸國の諸大名は、銘々腕次第で土地に割據して、自由に其土地を治めてゐた、是等の事實は、今悉く説くまでもないが、禪宗が諸國の地方に傳播するには、大に關係があつた次第である、諸國の大名の割據するに付て、禪宗の諸大徳が亦自ら割據の狀をなした様であるが、これは大に研究せねばならぬ事であらうと思ひます、

武家佛教と云はる、禪宗は、實際武家の思想に投合し易いものであるから、武家の歸依信仰する様になり、諸國の諸大名は相競うて、禪宗の高僧大徳を請待して尊敬したが、これが禪宗の大なる勢力になつた様である、

武家佛教と云はる、禪宗は、臨濟、曹洞共に同様であるが、自然の形勢で二様に分れ、臨濟の高僧大徳は皆幕府の尊敬を受けたが、曹洞の高僧大徳は、皆諸國の諸大名の尊敬を受けることとなつた、幕府が衰へて諸國の諸大名が強くなるにしたがうて、曹洞の高僧大徳は勢力を得る様になり、諸國の地方に曹洞の宗風を擧揚する様になつたもので、即ち今所謂、地方傳播の時代と云ふが開かる、次第であるか、地方に傳播するは主として曹洞宗である、

禪宗史の上から観れば、地方傳播の時代は大に大切な時代であるから、一一其事實を研究せねばならぬが、今話をするには目立つ華々敷事實でないから、一向興味がない次第であるから、出来るだけ略しておく積りである。

叡山紹碩禪師の門下の龍象は、四方の諸國に奔つて宗風を擧揚してゐるが、是等の門下から亦龍象が盛に出て、各其事業を繼いで、益興隆してゐる狀況は驚くばかりである。

北陸諸國は、佛教に因縁が深いものであらうが、これには種々の理由もあることであらうが、常に佛教が盛に行はるゝ様である、鎌倉時代の新佛教と云はるゝ宗門は、大半北陸を根據地にして興隆した様である、曹洞宗、眞宗、日蓮宗の一部は全く然である、就中曹洞宗は著しいものであらう、北陸で北陸諸國の人の手で興隆した様である、圓明國師を首とし其門下の高僧大徳は、皆北陸の出生で加、能、越の三國に限りてゐる様である、即ち國師が越前の出生で其門下の明峯、無涯、壺菴、珍山が加賀、叡山、黙譜か能登の出生である、是等諸禪師の門下が亦大半は、北陸諸國の出生である様に見える。

然れば、北陸は、佛教の根據地を取り分け曹洞宗の根據地であるが、此根據地から四方の諸國に傳播したもので、其の主なる功勞は北陸諸國の人に歸する次第である、換言すれば曹洞宗の興隆傳播は、北陸人の精神的事業の成立したものと見ては如何であらう、固より地理上より下す一分の觀察であるが、實際の事實は、かゝる結論を得るに至るであらうと思ふ。

北陸は根據地中心地である、越前の永平寺、加賀の大乗寺、能登の總持寺等が大叢林となつて益繁榮したが、是等の大叢林から出で四方の諸國に奔り、眞宗風を擧揚した次第を話さう。

古くから京都に曹洞禪はある、宋僧東明慧日禪師があられたから、其下に別源、圓旨等の大徳が出られた、然し是等は、臨濟禪に雜つてゐた臨濟宗の建仁寺等に化せられた、それ故道元禪師の主唱せらるゝものとは大に形勢が異つてゐる、共に曹洞禪ではあるが我國の曹洞宗は、道元禪師の一門を謂ふことは論の無いことである、京都から山陰の地方へ、曹洞宗を傳播した草分は通幻寂靈、源翁心昭の二禪師である様である、二禪師は京都に上り幕府の歸依を受けられたが、京都で宗風を擧揚しやうとはせられないで、寂靈は丹波に入られた、これは細川頼之の歸依で、その領地である丹波に道場を開かるゝとなつたが、その盛徳は京都に聞へ渡り、後圓融天皇の勅のとである、特に勅があつて天下の僧録司に任せられた、これが曹洞の僧録司の始めである、寂靈の門下の龍象相尋て山陰の地方に入られた、即ち善教、自性、祖祐、曇貞等は皆丹波に入りて宗風を擧揚せられた、祖祐、曇貞の二禪師は京都に入り足利義滿の尊敬を受けられたが、京都に留らうとはせられなかつた様である、寂靈が丹波に入られて稍後であらうか、源翁心昭禪師は、京都から伯耆に入つて道場を開かれ、其門下玄奘が後を繼いで、山陰地方の一甘露門を目せられた様である。

山陽地方より、西海諸國に傳播した狀況は如何であるかと云ふに、此地方で先づ曹洞の宗風を擧揚したのは、實峰良秀禪師の門下の常喜、性宗等の諸禪師であらう、是等二禪師が毛利氏、赤松氏の請待を受けて道場を

開いた、明峰素哲の法孫である定紹、通幻寂靈の法孫である、正猷等が相尋て其興隆事業に盡くされた様である、正猷は竹居禪師の事である、石屋眞梁禪師の法嗣であるが、大内氏の請待を擧げて大に宗風を擧揚した其法弟である、永宗、殊禪、永本等の諸禪師が皆前後に大内氏の請待を受くることになつたが、當時大内氏は防、長、豊、筑、四州の太守であるから、同氏の歸依では等の地方に大いに曹洞宗が傳播した様である、九州は早くから肥後に寒巖義尹禪師が一門を構へられたから、永くその徳澤が遺つてゐたが、無外圓照及ひ寂靈の門下石屋眞梁と云ふが其地方から出られて、大に曹洞の宗風を擧揚せられたが、無外圓照禪師は薩摩の人で、肥後に入つて曹洞禪を開き、後峩山紹嶺禪師に師事して其法嗣となられた大徳であるが、日向、薩摩地方を巡化して島津氏の請待を受け、其地方に道場を開かれた、眞梁禪師は亦薩摩の人で島津氏である、京都に上つて臨濟宗の諸高德に歴事志、後通幻寂靈の法嗣となられて薩摩に歸り、島津氏の請待を受けて大道場を開かれた、當時島津氏は薩摩、大隅、日向三州の太守であるから、同氏の歸依では等の地方に曹洞宗が興隆傳播したのは事實である、それで山陽道から、九州地方へかけては良秀、眞梁二禪師の下から榮へた様で、就中所謂通幻下が繁榮した、大内氏、島津氏等が外護の力を盡した様である、更に轉じて奥州地方に傳播した状況を見るに、矢張り峩山門下の龍象が、先鞭を着けて居らるゝ様で、無底良詔、道叟道愛、源翁心昭、月泉良印、の諸禪師が巡化して諸國守の請待を受けられたが、源翁心昭と云ふは、那須野の殺生石濟度の傳説で著名な和尚で、下野地方に徳澤を敷かれた様である、月泉良印の門下の諸

禪師は、相競うて奥州地方に道場を開かれたが、孰れも大叢林をなした様である、それは是等諸禪師の行實記で明である、

東海道諸國に傳播の状況を見るに、此の地方も亦峩山門下の宗眞、寂靈の二禪師の下から榮へてゐる様である、寂靈禪師の下で東西の二甘露門と云はれたは、薩摩の眞梁禪師、相摸の慧明禪師である、慧明禪師といふは最上寺の開山了菴で聞へてゐるが、相摸の産で初め鎌倉で臨濟禪を受けられたが、後寂靈禪師の法嗣となられて相摸に歸り、小田原で所謂東海禪林を開かれたが今の最上寺である、當時鎌倉の諸禪刹に對立して、一大道場となつた様である、稍後の事であらうが宗眞の法孫、天闍禪師が遠江に巡化せられたが、飯田城主山内氏の請待を受けて、其地に道場を開からるゝことになつたが、禪師の門下は大に其地方に繁榮して、遂に可睡齋が開かるゝこととなり、東海道諸國の中心となつた次第で、所謂太原下が此の地方に繁榮したるものである、

以上、諸國の地方に傳播の状況は、至極簡略の話で愚當り次第に、諸禪師の事業を擧げたものであるから、大切なる事實を漏してゐるともあらうと思ふが、委しく話せば話すほど複雑に陥り興味のない様であるから、至極簡略で蕪雜であるが、これで止めておきましよう、

次に臨濟宗の形勢は如何であるかと云ふに、京都の諸禪刹は諸禪師が群がつてゐるが、其禪風は漸く衰頹してゐる、所謂幕府佛教が幕府の運命に伴ふは、必然の道理であつて、應永以後幕府の勢力は、漸く下り坂に

なつてゐるからであらう、然し何分にも諸禪師の内には學問もあり、識見もある高僧大徳があるから、是等の高僧大徳は、幕府が内政外交の顧問となつておられ様である、それで代々の將軍が歸依尊敬は、變らなかつた様である、

畢竟室町幕府の半面は、臨濟宗の禪僧で保もたれてゐた様である、禪僧は内外の政治向の事柄に關係してゐた、義滿は義堂周信、大岳周崇の教をうけてゐたが、義持は嚴中、周噩、義教は得嚴、惟尙の教を受けてゐた、義政は傲慢な男であつたが禪僧には頭を下げてゐた、瑞溪周鳳、横川景三、性海靈見等に師事してゐた様で、自ら靈見禪師の履を把つたとは、喧く傳はつてゐる事實である、周風景三は數々外交上の文書を草してゐる様であるが、是等の事實は珍くないことである、當時禪僧が、外交上の文書を草してゐるばかりでない、數々幕府の使命で支那へ渡つてゐる、

南朝の興國三年、北朝の曆應四年の頃である、幕府の使命で至本と云ふ禪師が元に渡つて、天龍寺建立の寄附金募集をしたが、其後續々元明に渡つてゐる、其使命で渡つたもので聞へてゐるは、祖阿、元澄、永嵩、等堅、正龍等である、是等の事實は委しく話す邊もないから略して置かう、

個様な次第で京都の諸禪刹に、學問、詩文、書畫に通達した禪僧はあつた、然し禪の眞面目はなかつた様である、即ち禪のぬけ殻である、學問詩文書畫が盛であつて、これが臨濟宗の全軀であつた様に見える、それで今臨濟宗の形勢と云ふ上から見れば、實に落莫である、滔々たる諸禪師は皆大事を忘却して、末技未能に

つてゐた様である、

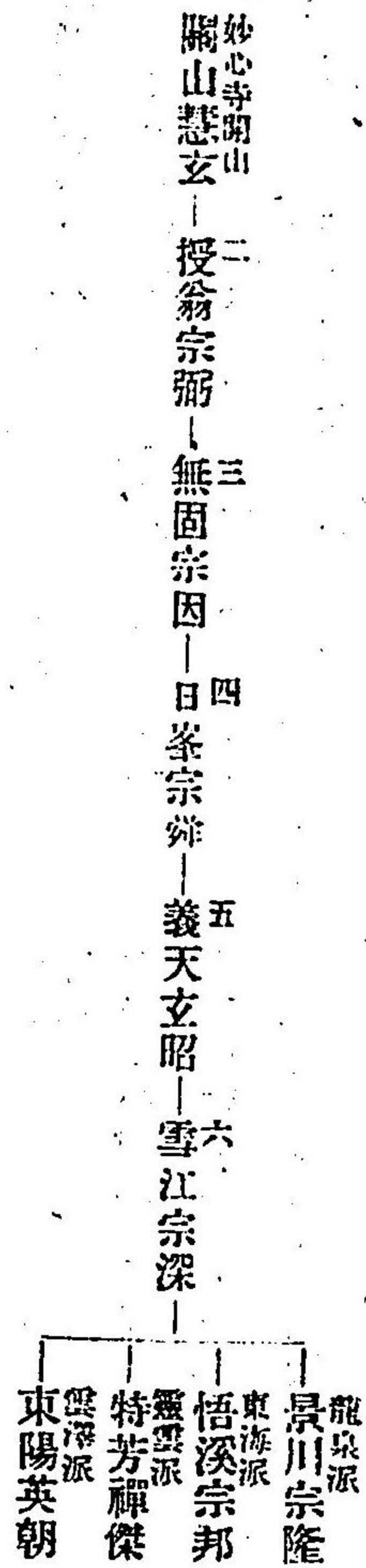
室町幕府の時代の第一の學者と云はるゝ、一條兼良が口を極めて僧侶を罵つてゐるが大に面白い、即ち尺素往來に次の様に言うてゐるは、實際の状況であつたであらう、

近來問叢林出世之僧者、閑閑法門鼻孔手段、偏嗜僧家之文字言句、將亦稱知識之族者、不持戒律、不剃鬚髮、執付無量之雜具、引率數多之僧尼、莫定其所居、遊行於都鄙、或入鄙屋、或占辻堂、妄說狂語以號談義、癡喝噴舉以名攝禪、籍之有起、情見之者、有生、患心之者、全皆不足、信仰、併是末法之故歟、

更らに一事の話さねはならぬ次第がある、それは宗峰妙超禪師の法系の状況である、禪師の法系は二派に分れてゐる、一に關山慧玄の下で妙心寺に傳はり、二は徹翁義亨の下で大徳寺に傳はつてゐるが、それで妙心寺大徳寺が如何なる状況であるかと云ふに、全く五山派とは別様の位置にあつて、幕府に關係がなかつた様である、殊に妙心寺は朝廷の御歸依を受けたと云ふ次第で、幕府は至極冷遇した様である、殊に妙心寺第二代授翁宗彌禪師は、南朝の忠臣藤原藤房の出家したものであると傳へてゐる、妙心寺六祖傳に明言してゐる、然しこれは事實でない、幕府の繁榮してゐる際、藤房が妙心寺で安然禪床に憑つて、如意を揮つて居らるゝ筈がない、然し常に朝廷の方に附いてゐたは事實である、幕府は兎角冷遇してゐた、義持が妙心寺の莊田を沒收した事でも判る、それで此法系の無文、元選、一休、宗純等は京都を出て諸國に巡化せられたが、是等の事實には深い理由がある、然し永享の初に至り日峯、宗舜等の苦心經營で、妙心寺の莊田を復せらるゝこと

になつて、再興の氣運が向いた、其後五山派が漸次に衰頹するに反し興隆する様になり、雪江宗深禪師の下から、四派が分れて競興するとなつた、江戸幕府の初五山派には一人の大徳もないが、妙心寺、大徳寺には愚堂、東空、澤庵、宗彭等の大徳が一方に聳へてゐるが、恰も大厦の覆らんとするを、一木で支へてゐる状況である、

次の黄檗開立の時代を開くものは、實に、妙心寺一派の大徳が力を盡せされたからである、それは隠元隆琦禪師の事業の下で話しましやう、



第六黄檗開立の時代

第六黄檗開立の時代は、後陽成天皇の慶長の初めから、東山天皇の未まで大凡百餘年の間を稱するのである、室町幕府の末禪宗の勢力は、諸國に散漫して統一してゐなかつたが、江戸幕府が開かれて政治の中心が江戸に遷る様になつて、漸く江戸の方へ禪宗の勢力が集つて、統一せらるゝ様になつた、然し初めは東西對立

の状況であつたが、實は京都の臨濟宗は、慣習力て一方の勢力を維持してゐたものであるから、漸次に江戸が中心になる様になつた、

當時以心崇傳禪師が幕府の内政に關與したが、臨濟宗の形勢は禪師の力で支配せられた様である、江戸の金地院が僧録司となる様になつて、全く臨濟宗の中心が江戸に遷つたものである、

京都には愚堂東宮禪師が、一方に聳へた大徳であつて、其下に一絲文守禪師が知られて盛に禪風を擧揚せられた、宮中に於て法門を説かれたともあつた、それから京都から澤庵宗彭禪師が關東へ下られ、三代將軍家光の歸依を受けて、品川の東海寺を開かれた、同時に、嶺南崇六禪師が芝の東禪寺を開かれた、東北には雲居希庵禪師が松島の瑞巖寺を再興せられた、是等の三人は關東に於て、一方の門戸を開いて居られたのである、此時代には曹洞宗は、人物が大に欠乏して居る、興聖寺の萬安英住禪師が、當時の曹洞宗を代表せる人物であつた様である、個様に各地に禪宗の大徳が居つて、命脈を繋いで居りました、是等が先づ一世に聳へた大徳であるけれども、昔しの盛大に比すれば誠に寂寞たる状況であつた、

此の如き時代に、黄檗宗が開立せらるゝことになつた、これは徳川時代に於ける大なる出來事である、黄檗宗開立は、隠元隆琦禪師の渡來に始まつたので、當時は明末の騷亂を避けて西來した僧は澤山あつて、菅長崎の地方に留住してゐた、隠元隆琦禪師が日本へ渡來した事に就て、誤た傳説がある、それは、後水尾上皇の勅請に由ると云ふとばである、最初後水尾上皇が古石禪師をば、支那に遣して高僧を招待せられた、此の招

待に應じて隠元が渡來したと云ふ様に傳はりて居るが、實は然ではない、當時の事情は其の様の事を許さない、然るに支那の書籍に依ると、成程隠元は王命に依りて日本へ渡たとしてある、我國の歴史でも十三朝紀聞等に、勅請に由る様に見える、殊に面白きは大學で編纂せられた國史眼である、後水尾上皇が明僧隆琦を召す、隆琦は其徒隠元等二十餘人を率ゐて來るとある、隠元禪師は諱を隆琦と云のであるから、一人を二人に書いたのであるが、禪宗の僧侶には字號が澤山ありまして、取り違へるともありませんか、然しこれは甚しい誤りである、其實は當時長崎には明末の商人が來て、一の居留地を開いて居て、始終支那から僧侶が居留地に來て、禪宗を弘通して居た、隠元隆琦禪師の前に澤山渡來して居る著名なるは逸然、古石、濶謙等である、是等は皆居留民を教導して居たのである、彼等支那人は、自分の宗門の僧侶を招待して寺院建立して居た、長崎の崇福寺、興福寺、福濟寺、是等の寺院は皆支那僧が住持で管轄してゐたのである、隠元隆琦禪師も彼等支那人に招待せられて、日本へ渡來したのである、禪師は閩州の黄樂山の住持で、重要な地位を保つてゐるから、容易に動くとは出來ないのであつたが、初め居留民が、禪師の弟子を遣して呉れる様に請ふた、禪師の弟子に也懶圭と云ふがあつて、此人を日本の居留民の請により派遣する事になつて、也懶圭は早速出發しましたが、海上暴風の災難に逢て遷化せられた、これが、禪師自ら日本へ渡來する様になる一の因縁になつたのである、つひに重要な地位を擲て日本へ渡來したのは、一分弟子を吊ふ至情に出たのである、殊に日本の居留民の方では、也懶圭海中で遷化した後、重ねて日本から數々渡來を請ふたのである、即

ち崇福寺の逸然が門末連署て書を送つた、それ故隠元隆琦禪師は志を決して、日本の承應元年明の仁治九年に我國へ向て出發したのである、其時隠元は六十一の老年であつた、黄檗山に於ける重要な地位を捨て、一門の弟子を率ゐて日本へ渡來したるとは、大なる出來事であつた、其時に逸然と隠元との往復の書翰があるが、それで見れば、日本へ渡來した事情が詳に解ります、それで長崎へ來た後は大變な人氣を受け、内外の道俗相競つて禪師の門に教を請ふ事になり、大に西國を騒がしたが、追々京都に上ると云ふとに就ては、種々の困難があつた、それは長崎の奉行より全く支那の反問ではないかと云ふ疑を受けて、京都に上るとを抑留せられた、其時に京都妙心寺の龍溪性潜和上と云ふがある、曾て三年許り前に隠元語録二卷の舶來したるを読んで、隠元隆琦禪師の大徳であることを知つてゐたから、其渡來を聞て大に驚喜し、是非迎へたいと云ふので、熱心に奔走の上長崎奉行の抑留するにも拘らないで、笠印と云ふ人を遣して遂に京都に迎へた、明歴元年に京都の方に上るとになつたが、僅かに京都、大坂、奈良、堺等の五ヶ所に限り法門を説くとを許され、且つ其席に集るものは男女三百人以上を禁ぜられて居つた、其困難なる状況は察せられます、然るに龍溪性潜は後水尾上皇の御歸依を受けて居る故、後水尾上皇に推舉して、上皇から法門上の問を下さるゝとになり、禪師はこれに對して答を上るとになり、初めて上皇の御歸依を受くる様になつたのである、先づ個様な譯で日本へ渡來した事情と云ふものは、今日黄樂宗に傳へて居るところとは幾分か異て居る、實際は日本へ渡來してから、種々困難して居られたのである、個様の事實を蔽うてはならぬ、禪師の後資たるものは益々事

實を詳にして、その苦心を思はねばならぬ、

萬治の初に江戸に出て、將軍家綱公に謁して日本に於て傳道の事を請はれた、それで幕府の許を受くるとになり、翌年二月今の山城の宇治に地を賜り、根本道場を開立する事になった、是等の事は皆龍溪性潛の斡旋盡力の結果である、寛永元年に至り工事が落成して、黄檗山萬福寺と號しました、これは關州の萬福寺を模擬したもので、制度風儀もそのまゝである、鎌倉に於て建長、圓覺を支那風にしたよりは、一層支那風であつて一山器具物品も、言語動作も皆支那風であつて、一の支那國を開いた様でありました、それ故黄檗山へ參詣したものが、山門を出て、茶摘みの歌を聞て初めて日本へ歸た様な心地がしたと云ふ位であつた、それで寛文三年に念黄檗山が落成して、祝國開堂の時には各宗の大徳も皆袖を連ねて參會しました、それは隱元隆琦が上皇、並に將軍に歸依を受けて居ると云ふのも、一の原因となつた次第であらう、然し此落成の法會の後間もなく隱元隆琦は退隱し、一山の事は高弟木菴性瑠禪師が主ることとなつた、隆琦の門下で高弟である木菴性瑠、即非如一の二人は對立の狀があつた様であるが、木菴が黄檗山第二代となるとなつて、如一はすぐ山を下つた、それで木菴性瑠は一門の諸法弟を引率して、所謂守成の業を全うすることとなつた次第であるが、寛文の末に青木甲斐守の本願で、江戸の白金臺に一寺を開いて紫雲山瑞聖寺と號し、延寶の末に隱元隆琦禪師が寂せられて後、木菴性瑠は關東に下つて一門を構ふこととなつたから、黄檗宗の中心は自然に關東に遷ることとなつた、隱元、木菴相嗣いだが、黄檗宗の形勢は此年間に變なこととなつた様である、即ち第二の黄檗山である紫雲山瑞聖寺の榮へることとなつた、黄檗、紫雲の兩山に三壇戒場を設けることになり、兩山對立の狀であつたが、實際一宗の中心は紫雲山にあつた様で、木菴性瑠門下の三傑と云はる、鐵牛性機、慧極道明、潮音道海は共に關東に下り、鐵牛は相模の紹泰寺を開き、次に向島の弘福寺を開くこととなり、潮音は猿江の廣濟寺を開くこととなり、十哲の一人なる鐵眼道光も亦、關東に下つて相共に一家の興隆事業に經營した、個様の次第で大に關東に盛大になつた、黄檗山には木菴の後慧林性機は僅に一年で退隱し、獨湛性瑩が山主となつたが、獨湛は淨土教に意を傾けて念佛誦經を事としてゐた様であるから、益衰微した様である、元祿五年の事である、高泉性激が第五代の山主となつて稍面目を新にした、高泉は博學多才で抜目のない人であつた様である、支那人でありながら扶桑禪林、僧寶傳、續扶桑禪林僧寶傳、東國高僧傳等を作つた其洗雲集を見ても人柄が判る、一方には靈元上皇の御歸依を蒙り、他の一方には將軍綱吉の尊敬を受けて居られた様である、然し門下には了翁道覺一人が聞てゐるばかりである、門下は寂寥たる狀況であつたから、其後黄檗山は再び興ることなく、漸次に衰微する事となつた様である、

臨濟、曹洞、黄檗の三宗が對立することになつていづれも其宗風が異つてゐる、就中黄檗宗が一異彩を放つたは事實である、當時支那には、坐禪念佛一味の説が盛に行はれてゐたが、隱元隆琦以下の諸禪師は此説を傳へた様である、獨湛性瑩は大に念佛を鼓吹し、扶桑往生傳を作つたが、自ら一宗の風をなした様である、臨濟宗の夢窓疎石が念佛を排撃したとは、黑白の相異である、

黄樂宗が渡つたについて、其影響は種々の方面に認めらるゝ様である、應元西來に伴うて獨立性易等の文人も來たから、詩、文、書、畫等に關係する事實も乏しい、然し是等の事實は話す逸もないから略しておか

う、
當時曹洞宗の形勢が如何であるかと云ふに、臨濟宗が關東に興つた様に、同じく關東に興つたは事實で、實際關東に中心が遷つた様である、關東三ヶ寺即ち下總の總寧寺、武藏の龍穩寺、下野の大中寺が興り、次に江戸三ヶ寺即ち總泉寺、青松寺、泉岳寺が興つて一宗の形勢が一變した様であるが、内部には伽藍相續の弊害が盛であつた、元祿の頃である月舟宗胡、卍山道白等の諸禪師が出て弊害を打撃する様になつて、大に活氣を帯びたが、月舟宗胡等の改革は宗門の大事であつた、諸君は十分承知の事でありまじやう、復古志等に其顛末の書が傳つてあるから、今茲に委しく話す必要もなからうと思ひます、

只此改革が隠然黄樂宗の興隆に刺戟せられた様であるは、如何にも事實であらうと思はれます、延寶五年に明の心越興禪師が西來したのも、大に宗門興隆の媒となつた様である、

第七三宗持續の時代

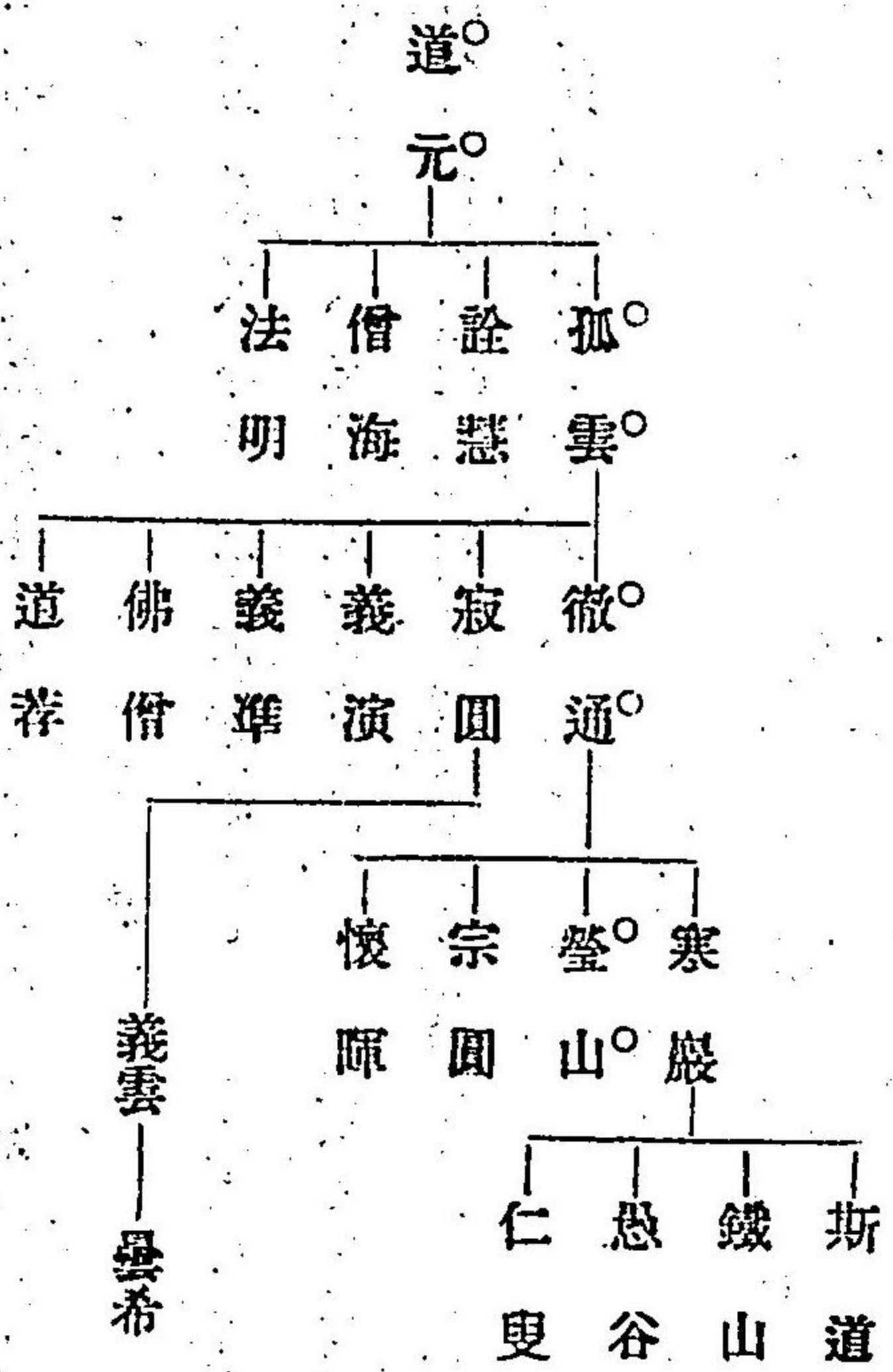
第七三宗持續の時代と云ふは、中御門天皇の朝の初から、大凡九十餘年の間を假に稱する次第である、臨濟宗には白隱慧鶴、古月禪材の二大徳が出てられ、就中白隱慧鶴の下から大に、興隆することゝなつた、東嶺圓慈、峩山慈掉等の輩出するゝなり、一宗の新局面を見るとゝなつた、

曹洞宗には天桂傳尊禪師が出でられ、其下が大に興隆し指月慧印、豁道本光、面山瑞芳等の諸禪師が出られて、これ亦一宗の新局面を見ることゝなつた、

黄樂宗には大禪師は出なかつた、龍統道棟が本邦人で、始めて黄樂山第十四代の山主になつたが、別段に言ふほどの事實もなかつた、其後良忠如隆が稍聞へてゐるが、一宗の衰微を如何ともするゝが、出来なかつた様である、

第七三宗持續の時代の形勢は、今日三宗の形勢に連續してゐる次第であるが、三宗の老宿が眼前の事實の様に瞭知してゐることであつて、私が未熟の觀察を話すは、興味のないことであらうから、斷然略して置きます、諸君が諸老宿から親しく聞取られたる事實は、却て私が承りたいと願ふところであります、相共に協力して、歴史の研究を積みたいた考であります、

○曹洞宗法脈相承 (補遺)



禪宗史要終

社會學綱要

浮田和民講述

(文挾廣文速記)

第一 社會學の概念

社會學の現狀

私のこれから講義致しますのは、社會學と云ふのですが、此社會學のことは、頗る新しい學問で、實は今日他の學問の様に成立して居ない處の學問であるのです、佛蘭西英吉利獨逸亞米利加等の學者の中に大分研究しつゝある人があるが、未だ社會學の全体と云ふものは組織が成立して居ないので、漸く社會學の或部分だけに就ては一般の學者が認識して是は確實な法則であると云ふことを認めて居る様なものがありますけれども、社會學と云ふ所謂一の學問の大系は未だ成し得ないので、それで講じますに就ても、一人の學者の説を全然其儘取ると云ふことも出来ない、又一つの社會學に關する著書を以て、是れで社會學だと申すことも出来ない、元より外の學問にしても、其の全体が悉く眞實であると云ふことは云へない、然れども物理學化學經濟學の様なものにはアラカタ全体の形をなして居りますから、大抵或人の著述を取て解説すればそれで大概其學問の概要は解る様なわけであるが、此社會學は全部ソレ成立したものでない、僅に近頃亞米利加で出來ました「キッチングス」の社會學は随分社會學の大系をなして居る、然しそれにしても未だ是は「キ

社會學綱要 社會學の概念

ツチングス」の社會學と云ふだけで、社會學は果して此の如きものであると云ふ標本にするわけにいかないけれども、先づ「キツチングス」の社會學は一般に形を成して居ると申して宜しい、然れども、是は初學の方には解りにくい、近頃翻譯になつて東京専門學校から出版に成たのがありますが、初學の方にはわかりにくいと思ひます、**ユイ**云ふわけである故、社會學の講義は頗る困難で、講ずるものは自分で**ヤハリ**研究する所の態度を取らんければならぬのである、又講義を聴く諸君も、批評的態度を取らるゝの必要があるので果して是が社會學の真相であるかを、始終自分で研究し、自分で批評すると云ふ態度を要します、他の學問にしますと、先づ講義を其儘一應は受取て置くこととは、安全であるけれども、社會學だけは**ソ**云ふわけにはいかない、初より幾分か不安心の心持で、御聴取になる必要があると思ひます、又書物を讀むときにも**ヤハリ**其精神が必要で、云はれ今日社會學は建築中である、譬へて申すと外の學問は**アラカク**建築が成立て居りまされども社會學は**ソ**はいかない、成程諸學者が社會學と云ふ大なる建物に就いて一部分づゝは成功して建築したけれども、一人で全部分を建築したものはないです、それ故今研究する者も、自ら建築者の一人と成ていかなければならぬ必要があります、

ソ、**ユイ**一寸参考書の事を話しますが、「キツチングス」の翻譯書のある事は前申す通り、其他には「スベマサー」の社會學、是は今日では少し舊く成て居りますが、**ヤハリ**「スベマサー」は創立者の一人て、佛國の「**コント**」英國の「**スベマサー**」此の二人が社會學の土臺を成して居る、それ故「**スベマサー**」の社會學は、今日参考書として有益且つ必要な者です、此書物は**モハ**、十數年前に有賀長雄君が解説せられ、社會進化論産業進化論族制進化論宗教進化論と云ふ様な題名で、餘程能く解説せられた、是は参考書として缺く可からざるものと思ひます、其れから近頃岸本能武太君が社會學を書いて居ります、是も社會學の入門として餘程有益である、それから博文館から出た「**フニア**アバンクス」社會學是も入門の書としてよい書です、それから開拓社から出版せられたと思ひますが、**キツト**の社會進化論と云ふ題であつたと思ひます、英語で**ソシヤル**、**ニポリ**ユニションと云ふ書であつて、それを翻譯したのでありますからよい参考書になります、

社會學の起原及び社會學の位置

次に本論に遷つて、第一社會學の起原に就いて辯じ、それから社會學の概念と云ふ事に就いて述べます、社會學が一科獨立の學問として、基礎を置く様に成つたのは、漸く今より六十二年前即ち佛國の有名な學者「**コント**」が千八百三十九年初めて實驗哲學と云ふ大著述をいたしました、其實験哲學の一部分として社會物理と云ふ一科を設け、本論には社會物理と云ふ題名を付しまして、社會の事も**ヤハリ**物理學上の現象と同様に研究する事が出来るもので、社會の現象は法則に依て支配されて居る、恰も物理上の現象が法則に依て支配されて居る如くに、人間社會の現象も必ず前後の關係がありて亂秩序ではない、それで必ず將來の結果を豫想する事も出来ると思ふわけで、即ち社會の事も一科の學問に組織する事が出来ると思ふので、其著書の本文には社會物理と云ふ名を付し、其の傍解に **Sociology** と記載しました、此の **Sociology** と云ふ名は初めて「**コント**」

が作つた名稱である、是が初めて社會學の起り始めてある、此名稱に就いて、學者間には種々の異説があり、また、此の *Sociology* と云ふ言語の組織は野卑である、それは羅甸語と希臘語を結合した名であるので、即ち羅甸語の *Soeios* 「仲間」と云ふ語と、希臘語の *Logos* 所謂「教へ」とか學とか云ふ意味に當る字を結んで *Sociology* と云ふ新名稱を拵えた、日本の語で云ふと漢語と和語を結合した様な言語である、先づ名稱に就いても種々反對がありました、*ソヘンサー* が此の「*Sociology*」と云ふ語を採用する事になり、今日でも、*ソヘン* 歐洲列國の學者は此 *Sociology* と云ふ語を採用する事に成て居る、多少列國發音の相違はあり又た綴りも少しは違ふて居るが兎に角「*コント*」の創設に係る所の *Sociology* と云ふ名義が今日一般に採用せらるゝ事に成て居ります、*ソヘン* 然らば是より先き即「*コント*」以前に社會の現象を研究する學者かないかと云ふに、それは随分ある、特に「*コント*」の如きは昔の「*アリストートル*」即ち紀元前の大學者、或は自分より先きに出た所の「*モンテスキュー*」是等の人は社會學研究の先驅であつたと云ふ事を認識して居るのです、それ故「*コント*」自身には初めて此社會學の研究を致したと云ふて居ないけれども、兎に角「*コント*」以前の社會學者と云ふ者は、社會の一部分に就て科學的學術的研究をしたので「*コント*」の如く社會の全體を研究の目的物としたものは先づ無いと云ふ事が出來ます、古代の「*アリストートル*」が研究したは、即ち政治である、政治學は最も「*アリストートル*」の着眼したものです、又近くは「*コント*」より百年前十八世紀の中頃、即ち千七百四十七年頃、彼の「*モンテスキュー*」が二十餘年間の大研究の結果、彼の名高い「*スピリツ*

ド、オブ、ロース」所謂萬法精理と云ふて、列國の法律を比較研究したのであるが、其の研究は餘程學術的に成て居ります、即ち物理學者が物理上の現象を研究する如くに、法律の研究に就いて、列國の風土氣候に關係があると云ふ様な處より説いて、其説き方は、法律上の現象は決して無法則でない、必ず法則があると云ふ觀念で研究して居る、けれども、専ら着眼して居るものは法律上の現象であつて、其他は先づ研究しなかつた、*ソレカラ* 又「*アダムスミス*」と云ふ人「*モンテスキュー*」より後に出てし人（即ち「國富論」と云ふ書を著し、經濟學の大系を始めて成した人であるが、此人は「*コント*」の社會學に於ける如く、社會哲學の一として經濟學を研究して居るです、而して「*アダムスミス*」の經濟學は、正しく學術的方法で、即ち富の發達、富の生産、富の分配、皆それ／＼法則があると云ふ事を研究して居るのであつて、恰も物理學者が物理學を研究すると同様であつて、學術的方法に依て研究し一つの大系を具へる様にしたのですが、其の着眼が國富論に於ては、餘り經濟上の現象のみに止つて居る、それで社會全部を一つの現象として、經濟法律政治等是等の上に於ける現象は皆人間社會に起る所の者であつて、互に密接の關係を以て居り、政治法律經濟是等の上に於ける現象の此三者は決して分離する事は出來ない、其の間に離れ難い關係があるので、政治上の現象が一種の状態をなすときは、必らず法律上の現象も、それに適應した状態を成し、經濟上の現象如何に由て、政治上法律上一種の現象を生ずる事になり、又或は政治上の状態が變遷する時には、法律上經濟上の現象も變遷する事に成て、總べて政治法律經濟宗教等は、社會の總べての現象より引き離されぬものであつて

互に密接の關係を有たものであると云ふ點より觀察して、此の複雑なる社會全體を一ツの研究の目的として研究の必要を説き、又研究すべきものと宣言して、研究を始めたのは「コント」である、先づ「コント」は社會學の第一の創立者として認められ、經濟政治宗教それらの上に於ける現象總べてを一括して、研究の目的物とするに云ふに至つたのは「コント」以後の事である、ソコテ社會に關する所の部分的學問は「コント」以前に既に發達して幾分か系統を具へる様に成つたものもある、即ち政治學の如きは「アリストートル」によりて一の大系を成したと云てもよい、此以前は政治學は全く進んで居らぬので、全く「アリストートル」に至つて、略ぼ政治學が原則及び土臺を成したのである、又經濟學の如き「アダムスミス」に於て、アラカタ其の形をなし其以後大に經濟學の進歩を來たして居る、それ故に或る意味に於いては、「アダムスミス」は經濟學の創立者と云ふ事が出来る、又法律學の如きも「モンテスキュー」其他の學者が研究して、法律は一科の學となり、殊に實際上の學としては羅馬の民法が成立し、法律學の基礎が成立て來た、それで社會の總べての根本的學問は漸く第十九世紀の初めに成り立たたのですが、社會の各部に關する所の部分的學問は、早く現はれ發達して來た、是は、實際上の必要からソコテ來るので、總べて學問の基本的部分は、後に成立し枝葉より出来るので、例せば、生物學の如きも、ソコテ此學科は非常に新しき學問で社會學より少し以前に名稱が出來たので、即ち十九世紀の初年に於て生物學即ち「バイナロシー」と云ふ語が出來たと云ふ位です、此の生物の元素は何であるかは却々分りにくい、その生物の元素を研究する學問で、漸く十九世紀に始つたの

である、けれども、動物學植物學と云ふものは、其の以前から完全なものではなかつたけれども、兎に角、生物學より先きに起つたのである、ソコテ動物學植物學の基礎たる生命は如何なるものであると云ふ研究は、後になつたと云ふ例と同じ事である、今一つ例せば、醫術は古い學問で、寧ろ技術と云ふ方がよいが、兎に角、醫術だけは昔よりある、西洋も東洋も同様、病を癒す所の方法は、實際上必要に逼て起たのであるが、其所謂醫術の基礎たる人身究理と云ふ事は漸く近世に至つて成立て來た、支那日本では早くから血の循環を知て居つたが西洋では漸く二三百年来分明になつた位で、人身究理を知つて醫術を行ふに至たは近頃の事である、醫術の基礎たる學問が後になつた、總べて、コト云ふ例である、生理學人身究理學のない醫術は不完全であるが、人身究理學生理學に基いてくれば、始めて醫術が完全に進歩してくる、即ち前に云ふ所の動物學植物學は生物學が初めて現はれて、始めて長足の進歩をなす様になつたと同様の例である、即ち政治法律經濟等の學問は、社會學の以前に其萌芽を發し、大いに進歩發達したのであるが、社會學がそれらの學問の基礎となるべき學問であるとするれば、社會學成立せざる前には政治法律又經濟等の學問は到底不完全を免れぬと云ふ歸結になつてくる、今後社會學が成立した上には、以上の學問も完全に發達するであらうと思ふ、即ち社會學は社會に關係する諸學科の基礎的學問であつて、總べて社會に關係する原理原則を供給する學問であると云ふ事に、今日は略ぼ成て居ります

社會に關係する諸種の學問と社會學其者との關係に就いて、三様の説即ち見解が成立て居ります、「コント」の

社會學と
社會に關
する諸學
との關係

考へに依ると、法律政治經濟等の學問は、社會學を離れて成立すべからざるものと云ふ見解を立てた、それで「コント」は經濟學の如きものを攻撃した一人である、即ち新經濟學と云ふて非常に「アダムスミス」末派の一方に偏する所を攻撃した、即ち英國派の經濟學に反對し、申さば、近頃獨逸が根本に成て居る、新經濟學派に先きだちて歴史的經濟と云ふ事を研究しなければならぬと云ふて、今日の歴史派の經濟學を主張したは「コント」である、けれども「コント」の經濟學に就て偉大の結果がなかりしは、兎に角「コント」は經濟學は社會學の一部であつて社會學を離れて經濟學は成立しないと云ひ、即ち前に申す通り社會學の現象は互に密接の關係があつて實際分離されぬ、社會學を離れて政治法律等の學問を論ずるのは誤謬の學問である、真正の學問をなさないと云ひて總べて前世紀の政治論を、散々に破壊したのであるから、經濟學も社會學を離れて論ずる事をしないのであつた、通常の人が眞理と思ふて居つた所を「コント」は既に千八百三十九年の大著述の中に破壊して居る、例へば人民主權説の如き、或は良心即ち本心の自由、又は思想の自由と云ひ、一見すると非常に立派であるが、全く十八世紀革命の主義に外ならぬと云つて居る、即ち「ルソー」の政治論の如き又「プロテスタント」奉教の自由、思想の自由を唱へる所の説に對しても、是は絶對的眞理としては認識することが出来ない、絶對的眞理とするのは誤謬である、革命の原動力革命の方便として主權説思想の自由説はよいが、社會を建設する爲には有害無益である、大體眞理と云ふものは個人思想をまげて眞理に服従しなければならぬ、夫故思想の自由と云ふ事は、絶對的の意味でないといふ事を説いて、餘程十八世紀の革命思想

を攻撃して居る、ツマツ社會學を離れた政治論は或は急激なる革命論となり、或は頑固なる守舊論になつていかぬと云ひ、元來政治學は社會學を離れて成立せず、經濟學も社會學を離れては偽りの學問であると云ふて攻撃を加へた、それで正しく「コント」の考へでは社會學が成立してくれば、從來の政治法律等の學問はそれに合併され併呑されてしまふわけである、即ち社會學は社會に關する學問を包含するつもりであつた、處て「コント」の社會學といふ者に就いて、諸學者が直に賛成して十分研究する事は六ヶ敷い、中々社會の現象は漠然として複雑で其社會學の目的物に至ては不明了であるゆゑ、ツマツ社會の各部に就て研究する方が研究の目的物が明白である、それで社會全體を目的物とするのは、餘り抽象的で混雜して居て實際成立しぬゆゑ、一方に於ては「コント」の名稱を用ゆる人でも尙ほ社會學と云ふ者は寧ろ一ツの總名に過ぎないと云ふて、社會に關する諸學即ち「ソシヤルサイエンス」を一纏めにして名稱を附したる社會學であると云ふ様に觀察して、而して法律經濟政治等の學理を比較總合するに過ぎぬ學問である、ソコテ社會學と云ふ者を具體的に分拆すると云ふと、各學科の學問に成てしまふ、即ち法律學經濟學政治學、若しくは歴史學統計學と云ふものになる、で、それらを比較的に研究するのが社會學で、是等の學問を總括して社會學の名を附けると云ふ様に解釋する人が「チカド」かど云ふと多數であつて、獨逸亞米利加等の學者が社會學と云ふ時に其見解を對照してみると一方に偏して居るです、極最近の著述であるが獨逸の「バナル、ベルト」と云ふ人の意見をきいてみると、社會學は如何なるものかと云ふに、歴史哲學即ち社會學と云ふことである、若し歴史哲學が社會學で

あるならば、單に歴史哲學と云ふてよいでしょうが、*ダンク*、それに少しく視察の趣きを新たにしたのみで
 ソー云ふ名稱を附したのである、即ち「*バチル*、*ペルト*」の見解によると、歴史哲學即社會學と云ふ事になる
 又獨逸の「*トライチター*」と云ふ有名歴史家又政治學者であるが、此人の見解は寧ろ政治學即社會學と云
 ふ事になる、即ち此人の専門は政治學、重んずる政治歴史を研究する人である故、社會學は即ち「*ポリチック*」政
 治學若くは國家學の中に含まるべきものとして居るのである。其他、例せば北亞米利加の有名な經濟學者「*ク
 ーリー*」と云ふ人は、社會學の名で經濟學を書いて居る、此人はソシヤローといは云はない「ソシヤルサイ
 エンス」即ち社會的科學と云ふ名です、經濟學を本務にして居る所の學者の社會學と云ふものは、經濟學にな
 る、又歴史學を研究するものは所謂社會學が歴史學に成て居ると云ふ次第で、*ユウ*の見解は余程人數の上
 より云へば多かつたのであります、*ツマリ*、*コウ*云ふ人の見解に依ると、法律經濟政治統計等總べての學問は、
 其研究する所の目的物は同じ事、即ち社會の事を研究するのである、唯社會の各部に付て研究し、隨て其研究
 の方法は多少違はねばならぬ、法律を研究し又經濟學やスタチスチックを研究するには、同じ社會の現象を研
 究するのであるけれども、其現象の趣きが違ふに從て其研究の方法も違ふ、*ソコ*各其名を異にし統計學歴
 史學法律學と云ふ名を云ふのであるが、然し是皆社會學であると云ふ様に見解を立てるので、寧ろ*コウ*云
 ふ風の見解が從來は多くあつたと云ふ事が出來ます、「*スベンサー*」の見解は寧ろ今以上の二説を折衷した説
 と云ふてよい、「*スベンサー*」の見解によると、社會學は一の獨立の學科であつて、社會の現象を全軀に研究

する所のものである、又社會の現象は互に密接の關係ある故、其關係を總合的に研究する必要があるので、
 ヤハリ「*コント*」の立脚點に立つのです、けれども「*コント*」の如く社會學を離れては他の學問は成立ぬとは
 云はぬ、社會學より全く分離しては社會學に關する學問は成立ぬと云ふ、社會各部に關係する學問は社會學を
 基礎とせなければならぬと云ふが、けれども社會現象の一部分だけを専門として研究する所の學科も成立し
 得る、即ち法律政治經濟と云ふ様な者は、社會學に隸屬して幾分か獨立して一科の學問を成すと云ふのが「*ス
 ベンサー*」の説である、全く分離する事は出來ない、が、社會の各部分を一科の學問として研究する事も出來
 ると云ふ折衷説である、寧ろ今日は此説が社會學者の普通の説であります、「*コント*」の説は包含しすぎます、
 社會の現象は複雑である故、社會全部に關する學問を一人て研究する事は出來ない、唯社會現象の密接な關
 係社會現象の根本的原則を研究する事が社會學の専門であるけれども、法律なら法律、富の經濟なら富の經濟
 に就て、其れ々々實際上の目的に從て、法律を完全に研究するとか、又は富の發達分配等を研究するとか云ふ
 事は、一科の學問として成立し得るものであると云ふ説に成て居る、先づ「*スベンサー*」の説は正當であると
 思ひます、社會學を離れた所の政治法律經濟等の學問は成立ぬものであると云ふ點は「*コント*」の説と同じ
 です、ソレ、今日はまだ社會學は十分建設されて居ませぬが、唯社會學が未だ建設せられざる前の法律學や經
 濟學等は如何にも不完全であると云ふ事を免かれぬ、今後政治法律經濟等の學は社會學が十分に成立した
 上で、始めて完全な學問にならうと思ひます、前に「*アリストートル*」以來政治學は十分進まないと云ふ事を申

上げた「アリストートル」の政治學の原則は、余程明かであるけれども、尙ほ不完全であると思ふのは、政治學の本體即主體は即ち國家である國家の活動は政治である、然るに國家の起原を説くは社會學に屬した問題である、國家の起原を説くには政治學以上に溯らなければならぬ必要がある、政治と云ふ者は國家ありて後の事で、政治の主體たる國家の起原を説くには社會學に依らんければならぬ必要が生ずる、社會學で國家の起原を説いた上國家の活動、即ち政治と云ふことの研究が始まつて説明が完全になる、事物の起原は實際上に影響するもので、前世紀に至るまで國家の起原を説明する事に就て苦んだ、實際上、國家起原説に二派ありて夫れが爲めに或は革命となり或は反動となりて、而して十九世紀に移つた、即ち反動が革命となり革命が反動となりて、社會が動搖して來て居る、是皆國家の起原が明白でない爲めに非常に無用な争ひをして來た、ツマリ社會學が未だ十分に成立て居ない所から、政治學で國家の起原を説く事になり、假定的説明をしなければならぬ事に成て、十八世紀の紛争を起す様に成たのである、

第二 社會學と他の關係諸科學

政治學と社會學との關係に移りますが、即ち政治學は社會學を基礎としなくては、成立たぬと云ふ事は前に申す通り、國家の起原は、政治學では説けない問題である、社會は自然に進化して國家となるのです、國家以前既に社會は進化して、漸く國家になるのです、國家の起原を政治學で説くと、到底假説或は架空の説に陥るは必然の結果である、十九世紀以前歐米の學者は、兎に角架空の説で國家の起原を説いた、その結果無

社會學と
政治學

用の争ひを生じ、不完全の學術の爲めに黨派の争ひを激烈ならしめて居る、夫れで十八世紀以前は動もするど互ひに殺すといふ様な政治上の争ひがあり、一方で改革を計るものがあれば、夫れが直ぐに革命となり、或は反動して革命を起す所者は國賊であるといはるゝ様になつて來る、總べて政黨の争ひが動もするとそうなる、斯の如く政黨の争ひを激烈ならしむる原因は、政治學の根本なる國家の起原に就て、互ひに相容れざる所の解釋を爲し、非常に黨派の争ひを激烈ならしむるにあるのである、若し學術が完全であると黨派の争ひは減少するものである、即ち國家の起原に就て、凡そ十八世紀までは、二説に分れて居ります、一方には神權説、一方には民約説、此の二説を取る所の者は、互ひに共通の出來ない立脚點に立つと云ふことになる、神權説を主張する解釋に依ると、國家は神の建設であるので神は君主に政權を與へた、それだから、君主は天に對し神に對して責任を負ふもので、人民に對しては責任がなくて、人民は君主に對しては、服従の義務あるのみと云ふ歸結になり、國家の起原は人間の智慧を以て研究することは出來ない、神が建設すると云ふば、夫れだけの話してある、君主の權は、神が與へたと云へば、最早學術上の研究問題とする事は出來ない、即ち君主は神聖犯すべからざる者である故、只だ君主には服従する丈けて、學問上の議論は、不敬に當ると云ふことになる、之に反し民約説では其の神權説を倒す爲に起つた説である故、九て正反對の解釋である、國家は、人民各自の契約によりて出來た者である、元來始より國家はない、即ち人間が集りて、國家をなすので、西洋は基督教者である故、神と云ふことを説く、夫れ丈けは立脚點が皆同じで、神は人間を平等に待

らへた、天は萬民に對して平等である、人間は生れ乍ら獨立自由天賦の權利を有して居る、然るに一方は君主、一方は人民と隔絶すると云ふのは、是は各自が自由意志に由て契約を結び、即ち單獨孤立であつては、不便である故、止むを得ず、互ひに戦争などしては甚だ幸福の目的を害する故に、人民各自が其の主權を抛擲すると云ふ契約を結んで、人民中の或る者を君主となし、其の君主に權を託したと云ふ、トコロデ君主と云ふ者は、元來人民より權利を有して居ると同時に、又人民に對して責任がある、人民の方は、君主を廢立する權があるから、此の人民主權説と云ふ者は、非常な革命の原動力になる、即ち民約説で人民の契約に由て、社會が出来たとすれば、今の君主がワルイとすれば直ぐに廢することが出来る、イッデモ國家を改造する事が出来るかばかりに、實に社會は不安全である、夫れ故革命するには民約説が便利である、社會の秩序を維持するには、神權説がよい、然らば、ドチラがよいかドチラが正當であるかと云ふに、政治學の上では差別を付ける事が出来ない、十九世紀に至て、社會學が端緒を開くに至り、今日では國家の起原を説くに就て、神權説に依らず、民約説にも依らずして、その解釋がいくら出来る様になつて、ダ、ン、ク、神權説と民約説と對照して見ると、ドチラモこれは學術的解釋でない事になつた、人民が契約した事實は何れにあるかと云ふに、その事實の證明は出来ない、即ち民約説は、歴史上の證據を擧げる事は固より出来ない、神が國家を建設したと云ふ事は獨斷説である、或る意味で云へば國家ばかりではない、萬物皆な天に依りて立てられて居ると云ふ事は云へるけれども、夫れは説明にはならぬ、凡べての者は天然に生じて來る者であつ

て神若しくは天と云ふ者は、萬物の元である事は、當然の事で、人間萬事皆不可思議なる勢力が是を生み出すのであると云ふ事が云へる、宗教上より觀察すれば豈に國家のみならんや、凡べての者が神又は天が造つたと云ふ可きなれども其の意味で云へば、病氣も天が造つたと云へる、ソウなれば學術上の説明にならぬ事になる、即ち神權説も誤謬であるが、民約説も誤謬である事が解つた、然らば國家の起原に就て、真正の解釋は如何と云ふに、今日迄明らかでない、今日と云へども完全に明白には、云へないけれども、國家の起原は社會學に屬する問題であると云ふのが正當なる歸結である、國家の起原の事は、社會進化の事を申す上に就いて述べます、

社會學と經濟學
次に經濟學の如き倫理上の見解と如何にして調和するかと云ふことが問題になる「アダムスミス」は道德哲學と云ふ名で、社會全體の現象を研究した、此の人は經濟學者であつても、近頃の經濟學者の様に、經濟學の現象ばかり研究した人でない、「アダムスミス」は、法律上の現象、倫理上の現象、經濟上の現象を、歴史、比較的に研究して居る、「アダムスミス」の著述は、其中二つだけ成立して居る、倫理説富國論と云ふ者だけ出來て、法理學に就ての著述は約束だけで到頭成就する事が出来なかつた「アダムスミス」は法律倫理經濟等の現象に就て研究して居るけれども「アダムスミス」の經濟學は倫理説と獨立してあつた様になつて居ります、その調和に於て一寸仕にくい、即ち「アダムスミス」は倫理篇即ち倫理の事を説く時には、人間は天性同情を有つた所の者である、即ち同情と云ふことを基礎にして、倫理道德を説いた、此の同情は利

己主義にあらざり、人間互ひに自然に同情を以て交際する、此れが倫理の原則であると説いた、即ち同情は天性であつて利己主義を含まぬと云ふ解釋である、トコロ、経済篇の富國論を説く時には、社會の事に利己主義で説き、人間は只だ己れの利益を圖り、それに依つて人の利益も圖ると云ふ所から説いて居る、ソコ、道徳上の感情は、經濟上に、ドウ云ふ影響を及ぼすかと云ふ事は充分に説いてない、夫れ故「アダムスミス」の倫理篇を読む時は、人間は天性利己的でない、同情的であると思ひ、又經濟學を読む時には天性利己を圖る者と思ふ、此の二者の調和は出來兼ねて居る、今日の歴史的經濟學派と云ふものは、此の二者を説明せんとして「アダムスミス」の眞正の立脚點に還つて居る、今社會上の現象として研究する時には、同情と、利己主義と始終錯雜して、實際の現象に顯はれて居る故、經濟上の事を論ずるにも同情と云ふ者も入れて、研究しなければならぬ、即ち實際の社會的現象を基礎として經濟學を説かぬと、尤で經濟學の歸結は、倫理學の歸結と、衝突する事になる、倫理學では、正義同情を説くが、經濟學では尤て人間は利己主義で凡べての事が、只だ貨銀の拂渡し受け渡しの關係になつて來る、是の如く經濟學は社會學を離れると、倫理學と衝突する事になる、此に於て社會學を基礎として、經濟學を研究する、必要が生ずるのである、

社會學と
法律學

次に法律學の事であるが、これも社會學に最も密接の關係がある、從來法律學の見解は、社會の見解を離れて居つた爲に、餘程人間の權利と云ふ事の解釋が不完全であつた、ツマリ法律學は、權利の學問であるが、權利の起原を説くには矢張社會學に依らぬければ、充分説き明かす事が出來ない、社會的に觀察せぬと、權利は如

何なる者かも説けない、權利の起原は國家の起原と同じで、十八世紀迄は權利は一方に於ては、神が與へた神賦の權であると云ひ、一方に於ては君主の與へた者であると云ふ風になつて居る、今日から見ると、何れも正鵠を失して居る、始めて此を社會的に解釋して見ると權利の起原が分つて來る、權利は天が與へたか、或は財産の權利生命の權を、天が與へたと云ふては、その説明は何にも役に立たない、一の例を申せば天賦人權説は誤謬であると云ふて、加藤弘之先生が説いたは、眞説である、權利は全く天賦ではない、たゞ天は人間に權利を與へ自由を與へたと云ふも、その保護する事を天は人間に托して居る故、天賦の權と云ふ事は成立しない、財産の權、生命の權は、生れなからにしてあると云ふた所で、野蠻人の間に行けば、直ぐに取られて仕舞ひ、猛獸に出遇ふては生命の權はない、全く天賦の權は自分と自分に保護し得る間は、權利があるけれども、ツマリ優勝劣敗になりて、天賦の權は強い者に歸し弱い者は推し倒されて仕了ふ、夫れでは權利ではない、此れは強力である、全くの權利と云ふ者は、強者弱者平等に生命財産の權利を共有するに至つて、始めて生命財産の權利があると云ふ事がいへる、此は即ち社會の力、社會の輿論、社會の道徳、社會の宗教、社會の人情に基づく者である、君主が權利を與へると云ふても、社會の輿論宗教道徳風俗に拘はらずして無暗に權利を與へる事は出來ない、ツマリ權利は社會的に發達する者で、社會は權利の基礎である、而して國家は、此を保護する任務に當ると云ふ事になる、天賦人權説は、權利は社會に關係ない、尤て天から受けたと云ふのであるから、人間は社會生活をなさずとも權利がある、前世紀迄は、法律學者が、權利を

二種に分ちて、絶對的權利と、相對的權利とに分ち、絶對的權利は、社會若くは國家に關係せずして自然と人間として持つて居る權利なりと云ひ、生命の權利幸福を求る權利と云ふが如きは、絶對的權利で、夫れから參政權とか、夫婦の權とか、親子の權とか云ふ事は相對的權利であると説いた。今日の法律學者に於ては此の區別は無くなつて、絶對的權利はないと云ふ、即ち社會を離れて、人間は權利はないと云ふ事に今日法律學がなつて居ります。此等も社會的に權利の起原を説く様になつて、始めて權利の解釋が完全になりつゝある證據である。

モウ一つは法律の最も實際的部分に關係した犯罪、此の取扱ひは、十八世紀頃まで西洋諸國は非常に殘酷で英國の法律の如きも、實際上法律を寛和して、適用して居つたけれども、十九世紀初年まで、法律の明文より云へば殘酷なること、我徳川時代の法律にも、勝るとも劣らぬと云ふ程である。當時英國の如きは犯罪者は成べく苛酷の罰を與ふれば、よいと云ふ考であるから、僅かの金を盗みても死刑に處し、或は貴族の地内にある兎一匹を殺しても死刑に處するとか、或は倫敦の橋を毀付けても死刑に處すると云ふ様な事が、イクトラ有つたか分らぬと云ふ程であつた。英國の如きは歐羅巴では、社會上最も進んだる部分であつたが、十八世紀より十九世紀の初めまでは、ソウ云ふ封建制度であつた、即ち貴族の利益になる様に法律を拵らへた、是は社會の利益にならぬ、又隨つて貴族の利益にも成らぬけれども、無暗に苛酷の罰を當てました、それでさへ犯罪は減らぬのである、全體犯罪は如何なる性質の者であるかと云ふに、此は社會の狀態からして起る所の者である、社會の狀態を改良せずして、只だ消極的に刑罰を加ふるだけでは到底犯罪が止まぬといふ考が起り漸く十九世紀になつて、近頃、學者が社會的に犯罪を觀察する事になつて來た、犯罪は他の現象と密接の關係がある、社會は犯罪の遠因である、成程一々殘酷な刑罰を當てし犯罪の處分をすれば、幾分か社會の安全を保護する事はあるけれども、社會の犯罪を減じて、幸福を増す事にはならぬ、ソノデ十九世紀に始めて法律を寛大にした、寛大にすれば犯罪の増加があるかといふに、成る程比較的に云へば、社會の生活上自由競争になつて居るから、其の意味から云へば、犯罪が増して來る譯であるが、割合に犯罪は増して居ない、減つて居るといふ有様になつて居る、ソウ云ふ觀察の上からして、犯罪に刑罰が入らないとは云はれぬが、刑罰は正しく社會の秩序を保つ上に要る丈で、夫れは消極的處分である、犯罪を積極的に治療するには、社會の狀態を改良する事に着眼し、即ち社會的觀察の方法を以て、犯罪を研究する様になり、犯罪は社會學中の一科をなして居る犯罪社會學と云ふ事が成り立ち來らんとして居る、斯様な譯で、法律經濟政治等の學は社會學的研究態度を取らなければ、完全な研究にならぬと云ふ事が解かる。

社會學と

歴史

次には、歴史の事を申します、歴史と云ふ學は、從來の所では、一科の學問をなさぬ、只だ過去の事實を記し、臆するまでも、重んじ個人の傳記を綜合した様な者になつて居て、尤で歴史は、個人の傳記であるので、科學的研究は六ヶ敷い、個人と云ふ者は、一人よりほかない、同じ様な人間は殆んどない個人とした事で歴史に残るは僅かの部分である、多くの人は残らぬ、多くの個人は、消滅して仕了ふ、偉大な人物は、蹤跡が

多少残るが、夫れは僅かの部分である、或る人々の事は記録に残るだけで、断片的に過ぎない、即ち歴史は個人の傳記、或は帝王の傳記、或は英雄豪傑の傳記に外ならぬと云ふ解釋では、歴史は到底一科學にはならぬ、全く一の學科をなすには之に普通の現象がなければならぬ、單獨孤立前後関係のない現象は、*イックラ* 集めても科學にならぬ者である、成程個人の傳記は、歴史の材料として必要であるが、歴史は社會の進化である社會は前後相關係した者であるので、社會は突然現はれて、突然消滅する者ではない、個人は突然生れて突然消滅するが、社會は永久に存する所の者である、歴史は社會の過去現在を研究する處の學科として、一の「*イエンス*」になるので、個人の傳記と云ふだけでは、断片的である、その個人の生活して居る社會は、始終連結して、昔より今に傳はり又將來に存する所の者である故、歴史は社會的に觀察し解釋する様になりて、一の科學にならうかと思ひます、從來の歴史は、過去の新聞紙、或は小説として過去の偉大な人物を復活し又社會の或る時代丈けを繪の様にし、又彫刻にし、或は文學上の演劇みた様にして、現はす丈けてあつて、歴史は、一の科學とはならぬ、斯の如く社會に關する所の、種々なる學科と云ふものは、社會學の完全を缺つのです、社會學は一の基礎的學問であつて、此を研究しなければ、社會に關する學問は、完全なる事の出來ない事實は、明白であります、

社會學と
宗教

既に社會に多少關係する所の學問は、社會學の觀察點から、餘程見解を異にせぬければならぬと云ふ事になる直接社會に屬する學科、法律、政治、宗教の事は勿論の事、宗教の事は餘り委しく申しませぬが、從來宗教

の觀察は、西洋支那日本皆な、非科學的である、宗教も、*ハ、リ* 社會の他の現象に關係して起つて居る所の者で、支那東洋には、自然支那東洋に適合した宗教が行はれて發達して來た、西洋には西洋の社會的事狀に應じて發達し、名は基督教であるか、西洋に行はるゝ今日の基督教と、昔時猶太國の基督教とは違つて居る、此れは自然と社會の現象に適合する様になるので、佛教にしても支那日本のは、印度の佛教と違つた形を持つて居ると思ひます、根本は同じであらうが自然と社會的に變遷進化するものである、*ソ、コ、テ* 宗教の異同を論ずるに至て、此を社會的に觀察する時には、自然に其の國土風俗に依りて起る所の者なる故、西洋には基督教が適當であるし、東洋には佛教が適應すると云ふ事が云へる、相互ひに、一方は眞で、一方は誤謬であると排斥する必要はないです、殊に多神教、拜物教の如きも、如何なる下等の宗教も、多少の眞理はある絶對的に誤謬である宗教はない、一般社會に行はれて居る下等の宗教にも、其中に多少の眞理はある、社會學の觀察より云へば、凡べての宗教は獨立するを得、而して互に相容れられる事が出来る、*ダン、ク* と社會の關係交通の結果が密になつて來ますから、西洋の社會と東洋の社會と共通の現象を生ずる事になり、昔しの鎖國時代の様ではない、東西の社會的事狀は、餘程共通の分子が現はれて來て居る、自然此の二十世紀は、宗教上の大進化を成す時代であらうと思ひます、東洋西洋自他相通して、自然に變化する事になる、昔の如く優勝劣敗で、他の宗教を撲滅し、一方の宗教のみを助長せしむると云ふ譯でなく、從來の宗教の如く、自分のみ宗教を建て、他の宗教を撲滅すると云ふことはなくなると思ひます、從來西洋では基督教でなければ許さ

ぬ、而も國家の權力を以て他の宗教を禁ずる事になつて居る、同じ耶蘇教の宗派にても、獨逸は、舊教新教のみを保護し英國は折衷の宗派たる監督教會のみを國教とし露西亞は「ギリキ、カトリック」教といふ様で同じ基督教國であるが、宗派に依りては國々て之を禁ずる事になつて居た、支那日本では佛教儒教と云ふ者は各宗派を平等に自由に許るし耶蘇教は嚴禁した、西洋では國家の權力を以て、他の宗教を排斥し、社會の多數が信仰する宗教を以て、他の少數の信仰する宗教を撲滅する事になつて居た、今日では之を社會的に研究する事になり、國家が宗教を自由にする様になり、各宗教が相容れらるゝ事になつて、社會に行はるゝ様になつた、尤も非常に社會に害毒ある所の宗教、誤謬の多き所の宗教は、或は之を禁止し滅するか知れませぬが、多少眞理を有つて居る宗教は、將來充分發達し、又獨立する餘地がある、而して互に提携して、ソウして眞理だけは認識して行くことが出来る、丁度申さば、昔時の國家は、強い國家が弱い國家を呑んで仕了ふことであつたが、今日は各國獨立して國際法に基いて、如何なる國でも獨立し維持して行くことが出来ると同様である、尤も露西亞とか英吉利とか云ふ強國が覇權を握つて居るが、其間に小國も獨立し得ると云ふ様に、宗教間の關係も餘程ソウ云ふ風になると思ふ、即ち宗教哲學も成り立つて、各宗派の根本は共同の眞理に基いて、各宗派が、各地方各民族の要求に應じて、宗派と云ふ者を成り立てる、即ち耶蘇教徒であると同時に、佛教徒たるとも出來、佛教徒も、自然、耶蘇教の眞理を認識するとなり、此の二十世紀に於て宗教思想が大變遷するかと思ひます、非常に宗教の解釋が社會的になる時には、互に獨立する事も出來、互に相

社會學と
數學

容れられる事も出來る、凡べて社會の原則に基き、その宗教が成立することにならうと思ひます、此迄は先づ直接社會に關する所の學問の上に就て、社會學が、餘程影響があると云ふ事を申しました、是れより後二ツは、直接社會學に關係する譯ではないが、間接に關係のある所を述べます、例へば算術の如き此れは數學の一部分で必らずしも直接社會に關係はないが、社會に關係した部分は算術の組立も、違はなければならぬと思ふ、從來は算術の題目は皆物理的に出來て居るが、社會上の算術を云ふと餘程違ふ、例へば物理上數學の原則に依れば、二二々四四四十六と云ふ風になる、一定不變の原則で成立つて行くが、社會上の算術は餘程趣きが違つて居る、即ち算術の中には物理的の數學にて説明せらるゝ部分と、社會的に説明を要する部分がある、算術の中で物理に關係する部分と、社會に關係する部分とは結果が違ふ、例へば農業の如き、物理上の原則より論ずれば、大概一反の土地に米八俵出來るとすれば、同じ人間と肥料とを用ひて同じ土地であれば六反の土地には六倍得る事が出來る、けれども製造上の算術になると、ソウではない製造の上には非常に分業法が行はれ、その結果實に偉大なる結果を生ずるです、即ち個人的に、ヤル場合と、分業的に、ヤル場合とは、雲泥の差を生ずるので、製造に關した算術を云ふ時には、二二々四四四と云ふのはなら、二二々十にも百にもなる、此れには「アダム、スミス」分業法の機能を説く爲めに挙げました實例があります、留針を拵らへるに就て「アダム、スミス」の時は分業法が幼稚であつたけれども、一人て留針を拵らへるには、一日一本も容易でない、トコロで分業法によると「アダム、スミス」の時代に、十八科に分業せられてあつた、即

ち針^{ピン}を拵らへるに就て、十八に分れて居る、尤も「アダム、スミス」が觀察した會社は小さいので、十箇に分業して、十八科を多少兼業して、十人て、留針を、製造する事であつた、單獨孤立て製造すると、二十本は兎ても出來ない針が、十人の製造高が、四萬八千本になつて居る、斯の如く、分業の功は、大きい者である、一日一人では、僅か二十本も中々出來ない者が、分業法の結果一人の生産高、四千八百本出來ると云ふ譯になる、即ち此れは製造上に於て、共同する結果である、分業は全く協力の意味である、針の頭を拵らへる者、針を磨く者、又針を尖らかす者、又針をのべる者、斯云ふ風に分業してやると、社會的の算術になるから、二三百にも千にもなる、政治上或は精神上に於ても、斯云ふ風になるので、社會學の研究する所は、ソコにあるです、社會的研究は、偉大な物を生ずる、即ち百人の人が、一致團結する結果が、非常な結果を生ずる、一人が千人にも萬人にも當る、戰爭の上で一騎當千と云ふ事は、昔から云ふが、形容詞ではない、全く單獨孤立ては出來ない、團結訓練の力は、一人が百人にも千人にもなる、即ち社會的算術は、同じ數學の中でも、その算術の觀察が、自然と社會的にならねばならぬに今の算術は全く個人的であるのは大に改良すべきの點である

ついでに心理學といふものは、直接社會學では無いけれども、人間の精神は、重もに社會的作用に依つて發達して居る、昔から人間は、歴史的に云ふと、社會に生活して居るです、心理學の如きも、社會を基礎として研究しないと、誤る事になる、算術に社會の關係の有る部分だけは、非常に、原則が變つて來る如く、殊に

社會學と
心理學

心理學「サイコロソイ」になると、單獨孤立ではない、仲間を有します、個人の精神とは非常に違ふ、題目は單獨孤立の人間として、研究するけれども、始終社會の影響に伴つて居る、此の影響のない人には、人間の精神中の、高尚の部分だけは成立し得ない、物を感覺知覚する事は、單獨孤立で、幾分か出來、社會的生活をなさぬでも、圓い物は圓い、白い者は、白いと云ふ事は分かる、自分の身體に、苦痛快樂を感じる事も分かる、けれども社會的生活なしに、果して高尚なる、推論が出來るか、われ／＼の、思想の働きは、餘程言語を待つので、言語の力なしに、思想の高尚の運用は出來ない、殊に少しばかりの數は、暗算で出來るが、數學の如きも高尚の所に行くと、千にも萬にもなる、モウ算用は出來ない、百數へるに就ても、一分間で、數へる事は困難です、とても計算は出來ない、それで今日社會の上では、何萬と云ふ事を、數へなければならぬ、ソウ云ふ事は、數字の力で出來る、實際一々數へて行けば、十年も二十年もかゝる事になる、斯様な譯であるが、言語數字は、社會の生産物である、夫れ故、到底高尚な推論は、社會なしには出來ない、況んや、善惡邪正の別は、社會の判斷の結果である、自分だけの苦樂は、社會なしに感ずるが、此れは正義であるか不正義であるかと云ふ様な事の判斷を付けるのは、社會の結果であるです、何に果して美妙であるか、何に果して醜惡であるか、此れは、倫理上の思想が餘程關係する、社會的生活の結果で、醜美の別も始めて成立するのである、單に心理學だけでは、眞正なる、美醜を感ずると云ふ事は、恐くは出來ない、斯く心理上の現象は社會の影響を蒙るものであるから、社會學が完全にならねば、心理學も完全になら

ぬ、成程物理生理で説ける事は、社會の關係を待たずして、説く事が出来ようが、情とか意とか、倫理の方に關係し若しくは言語の作用を竣つ部分即ち感覺知覚想像已上になると、社會的の産物であると云ふ事になる故、即ち心理學も、非常に社會學の影響を蒙む事が分かる。

社會學と
哲學

随つて哲學と云ふものも、餘程社會に關係があるので、哲學は社會學とは云へないが、哲學はすべての科學の根本結核である故、云ふて見れば、凡ての科學を包含せなければならぬ者である、偕て科學の終極點は社會學である、それ故哲學も社會學が、完全にならねば、充分に成立しない、それで科學の階級は「コント」己來に始まり「コント」がいろ／＼の學問を分類して、學問の間には、階級があると云ふて、諸科學の位置をきめて居る、まづ「コント」の各學科の順序は、あらまし始めに數學、星學、物理學、化學、生理學、社會學と云ふ順序になつて居る、ツマリ數學なしに、星學若くは物理學の研究は出来ない、物理學なしに化學の研究は出来ない、物理化學なしに生理の研究は出来ないと云ふ工合に、物理學は、數學を基礎にせなければ、成立たぬ、夫れ／＼、各科學には、基礎と云ふ者があり、社會學は、最後の學問であると云ふて居る、哲學は全體を綜合して、學問の基本となり、各學問を綜合したる結果を云ふが、哲學は一の科學である、凡て他の科學を綜合し、而して人生の終極目的に向つて、夫れを、結合する所の學であるから、哲學も社會學が成り立たなければ、不完全なる事を免れない、ツマリ哲學は、社會的である、凡ての學問は社會的である、いづれの學問も、社會の完全人間の福祉を目的とするものである故、社會の完全社會の目的理想は、

如何なる者かを充分に研究しないと、哲學は成立たぬ、哲學の根本的問題は、實在である、扱て、實在は何んてあるか、凡て世の中は、幻の如く、何にが實在やら、此の夢と、夢でない區別は、心理學上の理論では、成立たぬ、夫れは、今ま一人で感覺する點を云ふと幽霊を見た者は、幽霊を實在と思ひ、夢を見た者は夢を誠とする事である、昔し社會の初めに溯つて、社會進化の場合を見ると、夢を夢としないで、眞實と信じたる時代があつた、夢の中で親に遇ふとか、朋友に遇ふとか、或は、遠方に行くこと云ふ事を、眞實自分の魂が遠方の土地へ行き、又た亡親の靈が眞實我に來つたとして、解釋した時代がある、社會が全體、ソッ信する時には、ソッと云ふわけには行かない、社會全體は人間精神の大部分を支配する、夢とか夢でないとかは、社會の輿論に依つて定まるものである、此の邊の事を、委しく申せば、現象と實在との區別は、餘程倫理にも關係し、其區別は、義務と責任とに依つて、分かつのである、夢の中で借金を拂つても、社會が承知しない、一方は只た現象で、實在じゃないと云ひ、一方では夢を實在として拂ふたと云ふ、此の區別をするのは社會である、社會が認め、法律が認識して始めて正確になる、實在である實在でないこと云ふ事は、哲學上の問題であるけれども、又實際上の問題である、夫れで哲學も今日は、社會的になつて、社會的の現象に倫理を基礎として哲學上の問題を觀察しなければならぬと云ふ事になつて居る、まづ此れは社會學と社會學に關する學問との關係を詳述したものである。

第三 社會學の單位、定義、分類及び研究法、

社會學綱要 社會學の單位、定義、分類及び研究法

以上述べました所は、社會學は、社會に關する諸學問の基礎である、且つ科學の中では終極の學問であるといふ、二つの意味を以て述べました、社會學を社會に關する學問と云ふ事は、原語では、極明白に云ひ顯はす事になつて居る、即ち前に云ふ通り、社會學は「コント」已來「ソシオロジイ」といふ、一の詞で云ひ顯はし、社會に關する學問と云ふ事は「ソシヤル、サイエンス」又は「ソシヤル、サイエンス」と云ふ、(サイエンス)といへば單數「サイエンス」といへば複數で社會學等といふ意味になる、日本語では「ソシヤル、サイエンス」と云ふことは、充分云ひ顯はす事が出來ない、先づ社會に關する諸學問といふので、其の基礎となるものは、社會學である、一の根本的學問である、社會全體を一括して、研究する一の科學である、此れ即ち凡べての科學の終極の學問である、社會學以上の學問と云ふては考へられぬ、「コント」の順序で云へば數學、天文、物理、化學、生理學、社會學と云ふ事になる、いろ／＼の學問は、あるけれども、夫れは何れも社會學以下に屬するものである、心理學は「コント」の考では、生理學の一部分と云ふ積りて、社會學と生理學との間に、別に一科をなさずして、生理學に屬する學問として研究した、で、いろ／＼學問は、今後とても出來るか知らぬが、なほ今ある所の科學の外に、新しい學問が、將來發生するとも、その位置は、すべて社會學の下に屬する物で、社會學以上の科學と云ふ者は、恐らくは成立せぬ、宗教學倫理學と云ふ者は或る意味では、社會學以上ではないかと云ふ事も思はれますが、此れも、ヤ、ハリ社會に關する學問で、社會學の一部分と、見なさるべきものである、要するに、社會學は此の如く重要な學である、

ソ、コ、デ、社會學で研究する時には、研究の單位は何であるか社會の全體を一括して研究するは、漠然たることであるから捕捉し難い、すべて他の學問の例を以て見ても、研究の單位がある、殊に物質界の學問では、明白に研究の單位本位といふものがあつて、研究の目的物となる者の、根本的要素といふ事が出来る、例へば天文學であると、天を漠然研究するではない、星が單位である、即ち星と星との關係距離等を研究する、此れが天文學の目的物出發點である、地質學では、何にが研究の單位かと云ふに、只だ漠然と土地を研究するてない、地層を組織して居る所の岩層が研究の單位である、其他化學に於いては、物質の元素即ち酸素水素炭素等の七十餘元素が研究の單位である、此れより上に、分拆が出來ぬと、認められて居る物質の、元素及び其元素の働き、一の元素と他の元素と抱合して、如何なる結果を生ずるかを研究するので、即ち元素が本位となつて居る、すべて一科の學問には單位がある、ダン／＼學問が高尙になると、研究の本位も六ヶ敷なる、例せば、生物學の研究の本位になると、通常の者には分かりにくい、動物學植物學の研究の單位は明白で、動物や草木が本位である事が分るが、生物學であると、何が研究の單位かと云ふに、生物の生命を研究するのである故、顯微鏡で觀察すれば解かるが、詞の上で云ふては解からぬ、生物を分拆して見ると、動物植物と同じ事、その根本は細胞即ち「セル」が單位である、此の細胞に依つて纖維が出來、纖維が機關をなし機關が合して有機體を爲す、人間でも此の細胞が本で、肺の臟、肝の臟等の機關が出來て居る、その機關が合して動物なり植物なり有機體と云ふ事になる、生物學者は此の「セル」を主として研究するのである、機關

の働き如何と云ふ事を研究するは、重きに人身生理の範圍に屬する、生物學と云ふて、殊に動植物學、人身窮理以上の、研究をなす時には、この「セル」が一番根本である、

生物學以上の心理學は、今日では「カント」の考へとは違ふて、獨立の學問になつて居る、心理學で研究する時には、何を研究するか、固より人間の精神であるが、その研究の單位は、意識である即ち精神の根本的作用はこの意識である、自から感じ自から知覺し自から知る所の力がある、その意識の状態を研究するので他の詞で云へば、一の觀念と云ふ者が必ずある、その觀念が種々聯合すると云ふ事で、*タンク*と精神作用が發達して來る、物を見又感ずる時に起る觀念が、複雑になつて、種々の結合をなし、いろく思想となり感情となり、又意志の働きとなるものである、ところで舊心理學は單に意識だけを研究したが、それでは充分心理學を研究する事は出來ない、今日では意識の條件である所の、腦髓及神經系統これも心理學者の研究の一部分として、缺くべからざる單位になつて居る、心理學を研究するには、意識ばかりではない、意識の基礎となる生理をも研究するので、心理學と云へば重きに意識及び神經系統が研究の本位になるので、學問が高尚になるに隨つて研究の本位が無形になり又た複雑になります、

社會學の單位

*ソコ*社會學では、何にか研究の單位であるか、社會と云へば非常に廣ひ、世界も社會なり、一家族も一町村も社會である、その社會の中で、社會學が研究する目的物の根本的要素は、何にかと云ふに、固より人間に外ならぬのである、所が、その人間は種々なる學問の目的物となつて居る、只だ人間と云ふては意味が分

からぬ、人間は或る意味では動物である、即ち高等動物である、*ヤハリ*動物である故、動物としては、人間も、即ち動物學、或は生物學、或は解剖學で研究する所の目的物である、それから又た人間は精神ある所の動物である、多少動物には精神があるが殊に意識ある所の動物として研究する時には人間は廣い心理學即ち人間及び動物の心理を研究する所の目的物となる、比較心理學でいへば人間ばかりでなく人間以下の動物の精神作用も研究する、*鬼に角動物*と云ふものは心理學の目的物ともなり得る、*ソコ*人間は社會學の目的物となる時には、即ち此の社會的動物としての人間である、只だその動物單に意識ある動物でなく、夫れに加へて社會的動物であると云ふ所からして、人間は始めて社會學の研究の目的物となる、*ソコ*社會的動物は何であるかと云ふに、即ち單獨孤立の人間ではない、只だ一個の意識ある動物としては、心理學の目的物となるけれども、社會學の目的物とはなり得ない、即ち仲間を有する所の意識ある動物、即ち同類と共同生存をなす所の、最高等動物を研究するが、社會學の本意である、それで、*ヤハリ*心理學の研究の目的物と同じであるけれども、心理學では他に仲間のある事は一時看過して、一個獨立の人心を研究するのである、社會學はソコでない始終個人を研究するでなく、夫れに他の個人がある事を研究する、即ち心理學では單に意識を研究するが、社會學では、二つの意識が相對した時に、如何なる作用をなすかと云ふ事を研究するです、即ち心理學では一の意識を研究するが、社會學では意識と意識との相互作用を研究する、*ソコ*廣い意味で云へば社會學も一種の心理學である、普通に云ふ心理學とは違ふ普通に云ふ心理學は、意識が土臺である、腦髓及

以神經系統をも、研究するですが、單獨の人間を研究の目的物となすのである、外界に對して、五官が働く外物を知覺する所の動物であれば、心理學の目的となり得るが、それでは社會學をなさぬ、傍らに相對する同類のものがあつて、始めて、社會學の研究の本位が出で来る、即ち社會學で研究する人間は單に個人に非ずして仲間を持つて居る所の人である、ソコテ社會學でまづ研究する所の者は、精神ある動物、意識ある動物が二者相對した時の最初の精神作用が何んであるか、之を明白に分拆することが出来れば、即ち社會學の根本的原則に達することが出来る、一個の人間が、他の人間と相會した時最も單純なる相互作用が何んであるか、その相互作用の性質その結果如何を研究すれば、即ち社會學の根本的原則に達することが出来る、その相互作用の間に、果して規則があるか、果して相互作用の結果に一定の形式があるかを、研究するのが、社會學である、

ソコテ社會學の定義は中々複雑に涉つて學者間に、いろ／＼の説があります、夫れでまづこれがよい定義であると思ふのは、社會學は何んであるかと云ふに、社會組織を研究する學問である、その目的は社會に於ける人類の關係を支配する所の法則を發見するに在る、ツマリその意味を委しく述べると、即ち社會の起原社會の成長發達及び社會の目的なども研究せねばならぬ、それで社會學と云ふ中に種々その種類を分けて申す事が出来る、まづ第一に社會の事實を觀察する必要がある、實際には種々の社會がある、今日日本にある社會其他に在る社會ツツ調べて見ると、形が違つて居る、それを觀察する必要がある、即ち記述的社會學が先きに必要である、社會學は一つであるけれども、其中研究の方面が種々になる故、分類して、第一、記述的社會學、實際社會の實狀を描く所の敘事的社會學がなければならぬ、社會の事實は如何、現在世界にありとあらゆる社會はドウかと云ふに、決して一定不變ではない、自分の生活して居る社會を考えて見ても、昔と今との異なる事は傳説に依つても分かる、殊に進歩する社會であればなほ明かである、支那の様に進まぬ國或は印度の様な所では、數百年來同じ事であるとしても、ヤハリ昔と今は違ふ、それ故過去の社會は、ドウであるか今存して居る社會は、過去に於て如何といふことも考えて見ねばならぬ、即ち茲に歴史的社會學が成立つて来る、此は敘述的社會學の一部分と見なしてもよいが、過去に溯る故、是を歴史的社會學と云ふ、今日に云ふ所の歴史が一の科學となる時には此れは敘述的社會學の一部分として成立すると思ふ、固より此の社會の出來事を記録するはいつも必要で、過去の人間の事を記録する歴史は、固より、いつも存在するものであるが、その歴史を土臺にして一の史學が成立つて見れば、夫れは社會學の一部分で、敘述的社會學に過ぎない、此れがツマリ眞正なる歴史學とならふと思ふ、即ち社會の發達起原その順序を研究する所の學である、此れで始めて歴史と云ふ一の科學が成立つと思ひます、斯の如く現在の社會を敘述し、又過去の社會を研究し、始めて社會組織の原則及其の目的及び其理想と云ふ事も、研究する事が出来る、まづ第一は、過去現在社會の事實を調べ、次に社會觀察の原則及び目的理想を研究する事になる、ソウなると、哲學上の關係を持つ事になるから、之に哲學的社會學と名を付ける事も出来る、斯様にその研究の方面に依つて社會學を分類するこ

社會學の
定義及び
分類

社會學綱要 社會學の單位、定義、分類及び研究法

とが出来、斯様に社會組織の原則を明かにし、又その目的を論じ社會理想が成立つて來ると、それを應用する事が必要になる、凡べて學問終極の目的は應用に歸する、眞理は眞理の爲に研究すべしと云ふ事は學者が眞理を研究するに他の卑ひ利害を挾んではならぬといふ事を警めた語である、即ち道德は道德の爲になし、正義は正義の爲になすべしといふのと同じである、正義以下の利害得失の爲に動かされてはならぬとの意味です、正義と云ふものも、畢竟するに、人間の爲めの正義である、自分が正義の爲にすると云ふて、人間の爲めにならぬ様では、正義ではない、正義と云ふは、自分だけの心で正義と思へばよいと云ふわけではない、此れは社會の福祉人類の幸福を増進するが、人間最高の利益を發達せしむるものであるかを、研究しなければならぬ、正義の爲めに正義をしなければならぬと云ふのは、正義以下の利益を方便としてはならぬと云ふ事である、正義はツマリ人間の爲めである、眞理も同じである、學者も眞理の爲には利益を考ふることはならぬ、即ち眞理以下の利益の爲に心を動かす名譽富貴を目的として研究するのは學者の面目を保たぬ、眞理は人間社會の爲めてなければならぬ、人間の爲に害になる眞理は、それは眞理でない、固より一時、眞理は或る部分の害をなすかも知れぬが、人類終極の目的から云へば、眞理は人間の益となるのでなければならぬ、如何なる高尚な學問でも、人類の改善を目的とするに非れば價値はない、哲學、心理學、論理學、みな然り、此等の學問は、有形上の利益とてはなけれども、精神上の利益を與ふる所の者で、人類の福祉人間の改善を目的とするのである、社會學の如きは、其の原則を明かにしその成長發達を研究する上にも、始終終極の點は、社會に應用することである、故に終には應用的社會學が成立つて來る、尤も今日では、充分出來て居ないが、若し應用的社會學が成立すれば、正當なる政治學にならうと思ふ、今日の政治學は社會學に基礎を置かぬ所の者で、所謂生理學を知らぬ所の醫術と同じである、只だ外面から病を診察して、種々の藥を適用すると同じで如何なる理由で藥を用ひるが道理は知らぬ、只だ病氣の際、斯云ふ物を飲めばよくなる、始は「マ、マ、ナイ」の様な者で何んでも信仰して飲めばよいと云ふ事である、これは只だ實驗の結果で種々の藥が發明された丈で、ド、ウ、云ふ譯でその藥がきくと云ふ事は分からぬ、古い漢法醫の如く、現今の政治も夫れと同じく、過去の経験で歴史が多少政治家の参考になつて、實例を取るだけで、合理的に、社會はかくしなければならぬと云ふ事は知らない、今日憲法行政等は、いろ／＼成立つて居るが、乍併政治學は一の科學、一の完全した學科になつて居ない、應用社會學が成立つて、始て眞正の政治學が社會を活動せしめ進歩發達せしめて行くことになる、それ故、今日の政治が如何に幼稚であるかは將來社會學が進歩したならば分かる様になる、まづ社會學の種類は、コ、ン、ナ、者です、

次に社會學研究法を申します、社會學といへば、前申す通り、すべての科學の頂上に位する所の學問である、そこで、ある意味では凡べて社會學以下の學問を包含して居るわけです、物理を研究する時に生理を知らぬでもよい、又必ずしも化學を知らぬでもよいが、化學を研究するには物理を知らぬと出來ない、即ち物理學研究の方法は、化學研究の一部分となる、併し物理學研究の方法以上に、化學研究の方法と云ふて、一の特

社會學研究法

社會學綱要 社會學の單位、定義、分類及び研究法

色がある、その中には、物理學研究の方法も含む、生理といへば、その以下の物を含む、化學を研究するとき、生理を知らぬでも出来る、けれどもモウ生理を研究し、動植物を研究する時に、動植物の生理を研究する時には、化學の知識がなければ出来ない、動植物の元素は、化學的要素である、種々なる元素の抱合に依つて、出来て居る故、生理を知る時には、化學を知らなければならぬ、生理を研究する時には、心理を知らぬてもよい、尤も醫者が人間を取扱ふ上に於て、心理學を研究すれば、非常に影響する、即ち病人が醫者を信用するとしなないとは、大いに病氣に關係する、乍併單に生理を研究するには、心理學を知らぬでも、研究が出来ぬが、心理學を研究するには、生理を知らぬと出来ない、其の如く社會の事を研究するには、是非心理を知らぬと出来ぬ事になる、社會學と云ふと、其以下の學問を包含して居る、社會的學問の研究方法は他の各學科に用ゆる所の方法を包含して、すべての科學的方法を用ひ、すべての學術的研究を網羅して研究しなければならぬ、只だ物理化學等の研究方法だけでは行かない、物理化學の方は、觀察實驗で、研究が出来ます、生理學になると觀察實驗ばかりでは出来ない、比較研究といふ事をしなければならぬ、一の動植物を試験するだけでなく、數多の動植物を集めて比較的に研究する、比較と云ふものは、生理の研究に必要となる、觀察實驗も必要であるが、ダン／＼と研究方法の要素が加はる、心理學に於ては實驗も固より必要である、比較も必要である、けれどもモウ一つ心理學に必要なは、省察、自分と自分の意識を省みて察する力がなければならぬ、即ち自からの精神をひるがへつて考察する力が必要である、是は只だ觀察の力ばかりでなく、内

部の心的状態を省察するのである、

それから社會を研究するに至ると、比較と云ふ事が、さらに廣くなつて来て、歴史的に研究しなければならぬ、即ち社會は昔から今日に至る迄、漸次進化する所のである故、只だ此の現在の社會を比較するばかりで行けない、過去の歴史に溯ぼる故、歴史的研究が必要になる、ダン／＼と單純な學科に於て、用ゐられて居る方法に加へて、少しづつ高尚な方法が加はつて来る、社會學では、他の物理學の様に、試験と云ふ事は出来ない、始終人が云ひますが、即ち社會學では、觀察は出来るが、試験は出来ない、此れ即ち社會學と、他の物理學と異なる所である、成程其通りである、社會學では、試験はしにくいけれども、丸で試験が出来ない譯ではない、試験といふ事には、直接と間接と二ツある、直接の試験は、社會では出来ない、例せば、毒藥を持つて来て下等動物に試みる様なことは出来ない、此に一つの「虎列刺」の微菌を持つて来て、社會に傳染せしむることは出来ない、けれども間接に始終試験をする事が出来る、即ち自然と「虎列刺」が流行する其結果は始終觀察が出来る、戦争の如きも態と戦争して見る譯に行かぬが、止むを得ず社會には戦争が起る、其の結果は著しく分かります、夫れ等は、自然に起る試験であるが、其他に人間は始終、新たなる試験をなして居る、今日の様に社會が進歩發達すると、昔し流の習慣、過去の實例を法律としてゆく事は出来ない、昔の法律は習慣であるが、今日は政府の内に一の機關を設けて、造兵局で、鐵砲を製造して居る様に、立法部では始終新しい法律を年々製造するのである、昔は祖先の習慣に従ふ事が、列國の常規であつて、新たに

法律を立つる事は悪である、新法は悪法と云ふ意味であつた、然るに今日は、始終法律を新たに造る、此れは非常の試験になる、例せば、昨年来、未成年者に、煙草を禁じた、其の結果は如何んと云ふ事は、チャント今日分つて居る、又種痘法が出来た、其結果は非常な影響を與へて居る、若し捨て、置けば、人民が、瘡の爲めに、難澁をする事云ふ事が分かる、凡べて斯様に新法律は、社會的に觀察する人には、其結果如何を注目すると、試験の換りになる、なほ論理學上より社會學の研究の方法を申すと、六ヶ敷なるが大體普通の處ではまづ斯様である、なほ社會の研究には警戒を要する、そは他の學問よりも、誤りに陥り易い傾きがある、又種々なる迷信、種々なる偏頗心、黨派心と言ふ様な事の爲に、影響を受くる傾向がある故に警戒を要します。

第四 社會學研究上の警戒

扱て此の社會の現象を觀察し、又判斷するに就いて、その警戒を要する點を申します、學術的研究方法は、種々雜多である、前に申したのは、最も普通なる例を掲げたのである、論理學の上には、演繹法と歸納法と名を付ける事がある、又歴史的に過去に溯れば、歴史的方法といふがある、又一の理想に向つて研究するとき、哲學的方法と名を付ける事もある、或は數多の事實を一括する時には、是を概括法と稱へる、或はいろいろの例を取つて、其例より推論する時は類推と云ふ、名の付け方がある、夫れ等を研究するには、論理學といふ一科の學問がある、今は委しい事は申上げませぬ、只だ重きに誤謬に陥らぬ様に、社會の事を研究

する警戒の必要上、夫れ等の方法の一つだけを用ひたならば、或は極端に走ると云ふ弊もある、今其の例を申上げて置きます、

演繹法に
戒する等

演繹法と云ふは、ザツと申せば一の原則を立て、其原則に依つて歸結する所の方法である、即ち社會學で、演繹法を用ゐると、人間の天性は、斯の如きものであると、その人間の天性中、原則となるものを捉へて、夫れで社會の現象を説明し、或は社會の現象に適用して説明する事になる、即ち演繹法は、英語で「デタクシヨ」でこれは一の原則からして歸結する所の論法である、此の演繹法を用ゐるに就いて用心をせねばならぬ事は、人間の天性は、斯の如き者であると、原則を立てても、人間の天性は複雑である故、天性の一部分だけを取つて、全體の部分と見誤る事になると、餘程歸結に間違を生ずる、例せば、或る意味では、すべての有機體は自ら生活する事が第一の原則で、自分の生命を維持し獨立する事は、すべての生物の原則と云ふ事が出来る、ト、コロでその原則があると云ふて、利己主義と云ふ事を、人間の唯一の天性であると云ふ風に立てる人も有る、有機體は、自存自活し自分の生命獨立を維持する事が第一の原則である故、ソ、コ、デ或る社會學者は利己主義を以て、すべての原則とし何んでも利己主義で社會の事を説明する、道徳も博愛も皆な間接直接利己の結果であると云ふ人があるが、此れでは少し現象は説きにくいと思ふ、人間の天性は、丸で利己と云ふ事は云ひにくい、自らの生命を維持し獨立すると云ふ事は必要であるが、それと同時に、他愛の分子が人間の天性にある、尤も別に道徳上の他愛と云ふのではないが、仲間を好むと云ふ社會的天性がある、

人間の天性の一部分だけを取て、それを全軀と見なすのは弊害である、即ち演繹法を用ゐる弊は、一の原則で萬事を説明しやうと云ふことである、成る程利己と云ふことも、天性の一部分に相違ないが、全軀ではない、今利己と云ふだけでは人間の天性の僅か一部分だけで、之を以て社會現象の全軀を説明することは難いのである。

又演繹法の弊害として實際を研究する事があつたらぬ所になる演繹法をやる人は、歸結をインク故に、其の結果、自然と前提を明かに、研究する事をゆるかせにし、充分複雑なる原因を、研究する事を怠る、即ち早く歸結する故、架空の原則を設けて、説明をインク事があつたらぬ、此れは社會の事に就ては、最も有りやすい、例せば宗教で云ふと、兎角人間界には罪惡がある、此の罪惡は、ドウして起るかを研究するには、社會學上から研究すると、罪惡は一の研究の問題であるが、早く現象を説明しやうと云ふ所から、實事を研究して居ると、マ、ル、イ、昔に在つては事實の研究は出來ない、罪惡はあるが夫れは事實であるか、夫れを説明するに、事實上の原因を以て説明すると困難である故、架空の原因を以て説明することになる、即ち西洋にては「アダム」が罪を犯かした、人間の祖先が罪惡を犯し、遺傳して、今日の間が罪惡を犯すのである、此れは、イ、ク、ラ、か遺傳と云ふ事實と罪惡が實際にある事實と、結び合せて斯云ふ説明になつたのである、遺傳と云ふは事實である、罪惡も事實であるが、其の原因として、一の小説を拵へて説明としたのであるが、是は學問上の説明にはならぬ、私は佛教は知らぬが、佛教では此れを前世の宿業と云ふ風に説いて居る、此れも、ヤ、ハ、リ

遺傳と云ふ一の事實に基づき、又社會は無より有を生じた者でない」と云ふ道理に基いて、多少道理があるけれども、通俗に云へば人間は前の生に、罪を造つて、其の酬ひに依つて、此の世の中に種々の禍があるを説くも、ヤ、ハ、リ、一種の小説で説明する事になるのである、此等は學問的に研究する事の出來ない時代にはよい又爲めにもなる、宗教の方面では、ソ、ウ、である、歴史學の方面でいふと、國家の起原は如何、現在治者被治者の區別がある、政府はドウして出來たか、歴史的に研究し又社會學的に研究して居ると六ヶ敷い、西洋では、やはり百年前迄は宗教界で罪惡の事を古代の祖先が、コ、ウ、したと云ふ様に「ル、ー、ソ、」と云ふ佛蘭西の政治學者の如きは、昔の人間が契約をした、昔しは人間が各自平等にして孤立して居つた所の者であるが、夫れは不便である、よくないと、各人が契約して此に政府を建設した、即ち各人と各人とが約束して國家を建てた、或は又一方の神權説であると、神が權力を與へた、神が「アダム」を造つた時に政權を父の權として與へたと云ふ、此等は昔な小説で社會の現象を説くのである、國家は事實であるが、その起原を説くに、一の小説を拵らへたと云ふ譯である、即ち演繹法を用ゐる人は事實を分拆せず、原因に溯ぼる事をしないで、空想的に見る弊害がある、演繹法は必要であるが、夫れを濫用すると、斯の如き弊害を生ずるです、

夫れから類推と云ふ事(或は酌例とも云ふ)、社會上の研究法として用ゐられて居る、一の論法で推して行く英語で「アナロジー」と云ふ、此れは非常の結果を生ずる事がある、例せば「カリフォルニア」に行つて居つた人がある、其所からは澤山の黄金が出る、それがため今の「サンフランシスコ」も起つたんであるが、その「カリフ

類推に關する弊

オルニヤ」に行つた人が「オースタラリヤ」に行つて偶然「カリフォルニヤ」にある金山の景色と有様が同じ即ち「オースタラリヤ」の「ニュー、サウス、ウエールズ」と其の山の模様が似て居る、外面から一見して金山なる事を發見した、その山を掘つて見たれば果して金山であつた、即ちこれは「カリフォルニヤ」の山の下には金がある故、之に似たる「オースタラリヤ」の山の下にもあるだろうと類推して、金を發見した、此れ等は類推であるが、又ナカ／＼間違へる事が多い、例せば、此に一人泥棒した人があつて、他にその人間に似て居る者を見てこれを泥棒だと歸結することは出来ぬ、却て此れは正實の人であるかも知れぬ、それは大抵人相で分かることもあるけれども、類推だけでは危険である、なるべく事實の原因に溯つて斯云ふ原因から斯云ふ結果が生ずると、ソコを突止めないと危い、類推の論法は早く間にあふ事であるが、ナカ／＼危険である、けれども此の論法は社會に行はれます、例せば、英國の現在の話ですが、郵便税を非常に廉にして、郵便局の収益がますます殖えたことである、それは元は英國は郵便税が高かつたのであつたが、或る改革論者があつて引下げる様になつた、一つの書翰を出すにも今日では一ペンス(日本の四錢位に當る)新聞や「はがき」であると半ペンス(日本の二錢位)日本と英國の物價の差を以て考へて見ると、非常に廉である、ソコ又忽ち論者があつて、類推して云ふには、郵便税を下げて非常に収入が多くなつた、夫れであるから電信料を引下げなければならぬ、引下げれば、郵便と同じ様に収入が殖えるだらうと云ふ論者が起つて、ナカ／＼盛んであつた、此れは全く類推の間違で、その原因をツキ止めた故、斯云ふ論をしたのである、郵便の如きは

手紙一本持つて行くに人足一人入るが、百本も千本も持つて行つても一人で間に合ふ、夫れ故費用を少なくすることが出来る、然るに電信になると一度に幾音信も發することは出来ない、夫れ故電信料を郵便税の様にする譯には行かない、英國の如き賢明な人民中に在つても、斯云ふ間違ひの議論が起る、夫れから又一寸考へて見ると、新聞の如きも廉である、そして新聞は廉になると却て利益がある、昔よりも今日は比較的に廉になつて居る、或る意味では廉にすれば讀者が多い爲めに數でユナス故非常に利益になると思ふのであるが、その新聞の、利益ある所以をツキ止めて見ると、これは實際家の話であるが、廣告で利益があると云ふのである、斯様な譯であるから郵便や新聞の例を以て推論して電信に適用しやうと云ふのは、原因が既に間違つて居る、

概括に關する警戒

それから概括、多くの事實を一括して結論するを云ふのであるが、此れも速断すると危険である、其の事實の標本次第に依つて非常に誤ちがある、例せば西洋人が一寸日本を旅行して見て中には非常に褒める人がある、日本人は馬丁車夫に至る迄禮節を知るといふ様な事を云ふて、大變褒める、褒められるのはよいが、中には非常に悪しく云ふ人がある、日本人は皆なウソを云ふ不品行である、女は結婚せぬ前に節操を守つて居る者はないと云ふ風に書き立てる、兎角旅行者と云ふ者は自分の接觸した者を見て一般に概括する弊がある、日本人も、ウソ云ふ弊がある、西洋人と云へばどれも同じと思ひ、一人の西洋人のする事を見て忽ち凡ての西洋人は、コウであると概括する、維新改革の前後日本に來る西洋人を見て、成程中には開港場に來る西洋人は水夫水兵の様な

者が多いから不品行な者が多いに相違ないが僅に西洋人の或る部分を見て西洋人が夫婦手を携へて居る所を見て西洋人は不道德不品行であると考へて、ソッして西洋の開けたと云ふ意味は一方では不道德を意味する様になつた、此等もヤ、ハリ速断した概括の弊である、他の例でいへば酒樽の如き米俵の如きその全軀を見ないでも一酌の酒一掬の米を標本として見れば其の全軀は分かるソウ、云ふものは概括しても誤りはないトコロが社會は米俵や酒樽とは異ふ、社會の何れの部分を以て全軀の標本とするわけには行かぬ、下等社會の人間を以て全社會の標本とする譯にも行かず、又上流社會の人に對して見ると夫れを以て全社會の代表的人物と云ふ譯にも行かない、標本とするには上中下の社會の人々に接し、平均した所で日本はコウ、亞米利加はコウと概括して論じなければならぬ概括する時は標本を擇ばねばならぬ若し標本がその全軀を代表して居るか居らぬか分からぬ時は、先づ概括する事を見合はさねばならぬ、新聞を讀む時にも用心をしなければならぬ、孟子が盡く書を信ぜば書なきに若かずと云ふたが、私は近頃の新聞を讀むで、西洋の新聞を讀むでも同じであるが殘らず此れを信ずる事は出来ない、一つの新聞を見て悉く信ずるとすれば却てない方がよいと思ふ、多くの新聞を見れば皆な矛盾して居るけれどもそれを比較して見れば概括するに安全になる、單に一の新聞だけでは黨派的臭味が多いから大に誤まられることが多い、遂には其の新聞紙の爲に反對黨の惡む様になつて或は危害を加ふる様な事が出来る、伊庭想太郎の如きも、すこし、兩方に眼を著けてくれたなれば星を刺し殺さんでもヨ、カッタと云ふ事が分つたらうと思ひます、新聞には珍しい事實が出ると云ふ事は、自然の結果で今日の新聞を

見ると、親殺しとか、夫殺しとか、或は情死とか、姦姪とか、夫れ等の事實で充ち満ちて居るが、東京の新聞を讀むで、社會の事狀を此れで歸結する所の外國人があれば、非常な歸結が立つと思ふ、日本の社會は殺人詐僞取財姦姪情死と云ふ様な事實で充ち満ちて居ると見らるるかも知れぬ、新聞の現象はソウなつて居る、この新聞にも社會の闇黒面が多く現はれるのである、現に私も在米中此の觀察で誤まつた、米國は道德國と聞いて居つたが、ア、チ、ラで毎日の新聞を讀むで居ると顔色が青くなる様な事實が澤山出て居る、娘が親を毒殺したとか、又は姦姪したとか、カ、ク、オ、チしたとかいふ事が日々の新聞に出て居る、私しが前に道德國であると思ふて居つた事が大に相違した、それで亞米利加は基督教國であつて日本迄宣敎使を送つて居るのを見て、私は宣敎使に向つてまづ先きに自分の國を敎化したらよからうといふて、宣敎使などに警戒を加へた事があつた、ソッソッ考へて見ると、新聞に出る事は珍らしい事しか出ない、新聞を以て社會の鏡とする譯には行かぬよい事は新聞に出てこない、日本では親孝行と云ふ事は尊ぶ故よく孝行の事は出るが、西洋では親孝行の事は當り前の事として別に新聞などに出さぬ、只だ非常な博愛慈善家などが出る、ソウ云ふ事は出ても褒めるだけである、悦んでよむのは探偵事件とか殺人罪とか日本でもソウな事は新聞でも出し悦んでも見るが、米國の新聞などはなほ委しく出します、實に慘憺たる處を描くに妙を得て居る、ソウ云ふ風であるからよい方は出ない、まづ社會の善い方面の代表者は新聞には出ない、惡しき方の代表者が多いのである、一寸見ると社會は實に腐敗して居ると思ふ、けれども兩方合せて見ると亞米利加の社會日本でもソウであるが善人が多いと思ふ、

歴史的
研究の
新法に
關する

殊に亞米利加の如きになると政治社會は腐敗して居るが、社會の道德は實に堅固な處がある、向ふの家庭に行つて見ると氣品の高い處がある、亞米利加は貴族も何にもないけれども、實に古の武士も及ばぬ義侠心の品格を保つて居る人が社會に生きて居る、政治社會は腐敗して居るけれども米國は安全と云ふ結論に到達する事が出来る、日本の如きはその安全と云ふ事は少し困難である、日本は今日が大事な時である、日本では政治社會が尤も有力であるから、之が腐敗すると全躰に及ぶことになる、米國の様に平氣では居られぬが、併し新聞に出る程社會がわるい譯ではない、新聞を見て居ると悪人ばかりの様に思ふが、實際立ち入つて見ると、私共始め、ソウ人殺しの現場を認むる事は少ないと思ふ、けれども新聞を見ると、毎日の人殺してある、夫故加減して新聞を讀まぬと大に誤まる、是を例せば讃岐の琴平様を信心すると同じ事で、私は行つた事はないが信心して助かつた御禮に捧げた鳥居が充ち満ちて居ると云ふ話してある、實に讃岐の琴平様の御利益は著しい、固より信仰の結果御利益があるに相違ないが、しかし此れも一方的である、難船して助からなかつた人のしるしは、ドコにあるか、ドコにも出て居ない、若し夫等の人の救はれなかつた例を出したなら、ドコがば多數であるか疑問になる、ソウ云ふ風である故新聞を讀むにも、わるい方が多いよい事を出しても人がよまない、人と約束して、約束の通り金を拂ふたと云ふて新聞に出しても珍らしくない、此れは一の正義です、此れに依つて社會が立つて居るのです、社會は複雑である故、亂りに概論すると大に誤まるのである、歴史的方法といふは、過去に溯り過去の實例によつて概論する方法であつて大切な必要なものであるが、しか

し何んでも過去の事を知らねば決斷の出来ない様になると、社會の進歩を害することになる、歴史的方法の弊害は過去の事實に拘泥することである、此の弊害は社會の進歩を妨ぐものである、即ち過去を以て現在を束縛し將來の進歩を遮断する事になる、只だ過去の實例は参考にはなるが、過去の實例に依つて將來かく爲さぬければならぬと云ふ風に歸結する事は出来ない昔と今とは形勢が異な過去の事實に依て現在將來は斯くある者と歸結するはよくない昔しは奴隸は一般に行はれて其時代には開化の發達を助け人情に背かぬのみならず寧ろ文明開化に貢献して居つた、然らば今日奴隸がよいかと云ふに、今日は輿論がどこ迄も之を排斥する様になつて居る、今日は害悪で人格を害するのみならず、非常に社會の生産事業の上から云ふても不利益になる、奴隸一人の働きをなさしむるに監督を要するから二人掛る必要がある故、今日は損である事が分かる。古代では野蠻である故、戦争の結果、敵を虜にするときは或は打殺すとか野蠻人ならば之を食ふと云ふ位な事があつた、尤も人間を食ふ人類は少くないが、飢饉の場合でもある時には行はれた、昔しは敵の捕虜を殺してし丁た、此等は人情に反し且つ無用に人命を絶つことであるから、夫れが爲めに奴隸制度が始つた、此は人情の一の進歩である、古代では奴隸は生産事業をなす人間で商賣や製造の勞働者となる故、奴隸制度は古代に於ては文明の進歩を助けたが、今日になつては害悪である、昔しはヨカツタ事が、今日はわるくなる、即ち今日では善である事も將來は惡となる事もある、大概今日社會にある所の犯罪といふ者は、一度は或る社會では善と認められた時代が必らずある、今日は泥棒はわるいが、昔しは泥棒は無かつた、人の物を取つて泥棒にならぬ時代が

ある、「スバルタ」國の武士は國中の人民の財産を取てガ、マ、ヲ見付かると罰せらるゝが、密かに取る事は、非常に軍事上の教育になると云ふ事で獎勵した時代がある、それ故ある社會の時代では、石川五右衛門の如きも悪人でないと云ふ事が云へる、此れは極野蠻の時代、殊に私有財産制度のない時代である、昔しの野蠻時代は多くは共有して居る所から何者を取つて食ふても差支ない時代があつた、ソ、ウ云ふ習慣を今日まで維持して居るのは彼の所謂泥棒である、泥棒も時代後れの人間、我々を全く異つた人間ではない、此れは只だ可愛そうな事には教育がない、遺傳があるいと云ふことから、過去の社會では善であつたことを、今日社會には秩序があり法律が立つやうになつた時代迄維持して居る故犯罪となる、モ、ウ少し過去に生るれば、ユ、ウ云ふ人間は稱讚せられ、登用せられたかも知らぬ、夫れ故、過去の實例に依つて將來を下する事は、参考にはなるけれども、それを以て理由にする事は出來ない、過去の實例は或る意味に於て外國の實例と同一である、外國では斯くあるから必ず我國にてもそうであるとは限らぬ、外國の實例も参考にはなるが理由とすることは出來ぬ。西洋の例を以てして我國にても必ずかうしなければならぬといふ事は論鋒が誤謬です、歴史的研究比較的研究の濫用になる、

哲學的研究
するに類
する警戒

それから哲學的研究の必要ですが、此れにもいろ／＼定義がある、哲學的方法或は理想的推論法となることが多い、理想はコ、ウである故實際かく仕なければならぬと歸結する、此の哲學的方法に就ても、餘程用心せんければならぬ、理想は成程理想として結好であるが、過去の事狀に拘はらず、又た現在の形勢に拘はらず、

直ちに理想通りに社會をなさうとする歴史的研究所の反對の弊害で、結果は同じ様な事に立ち到る、即ち泥棒の如きも前に云ふ通り、過去の社會であると正當である事を、今日文明の社會で行はんとすると犯罪となる、姦淫の如きも半開野蠻の時代には、狼褻ではない我妻ならぬ婦人と交接する事は野蠻時代の社會は許して居る、今日の様に一種確定の道德が成立つた社會には、狼りに男女の倫を行ふと不品行不道德といふ事になる、過去の社會では正當であるが、今日の社會では犯罪になる、今理想を直ちに現在の社會に行ふと同じ様な事になつて、理想としてはよい事であるが犯罪となる事がある、例せば、道德上の理想から云へば實は社會の富は、すべて此れは公共的の性質である、富は社會の爲に用ゆべきものである、私有財産と云ふと雖も社會の爲に用ゆべき者で、此れは自分の者であるからと云つて、矢鱈に使つてよいといふ理由はないで、倫理上の理想から云ふと、すべて富は社會公共的の性質である故、亂りに自分の爲に用ゐてはならぬ、彼の社會主義といふものはその理想を以て大に社會を改革しやうとするのである、扱て今日の社會では私有財産制度と云ふ事で法律が成立つて居る、社會黨の理想は或る意味では倫理上の理想に符合するけれども、それを直ちに社會に行なふとすると此れも泥棒になる、漸次に其の理想を行ひ歴史的發達を待ち社會の輿論が一變し、社會の良心が認めて斯くなるべしと云ふ時節の來るのを待たずして、理想を直ちに行なふと革命となる、革命が成功すればよいが、失敗すると革命者は國賊犯罪者となる、社會の富は共有的の者で倫理上から云ふと公共的に用ふべき者であるが、鼠小僧の様に、金持ちの富を取つて貧乏人の爲にすると云ふ事は、鼠小僧夫れ自身は傳

愛てあると思ふか知らぬが、現在社會の制度から云ふと犯罪に外ならぬ、理想を直ちに行はんとすると、そう云ふ結果に陥る、その結果革命になる、革命の結果反動を生じ、非常に社會の進歩を害する事になる、ア、マ、過去の事實に拘泥する事は、現在を束縛し將來の進歩を遮断する事になるが、直に理想を現在に實行せんとする事も急激なる進歩主義の結果、頑固なる守舊主義の結果と同一の結果を生ずる、頑固なる守舊主義は社會の進歩を害すると云ふ事はもとよりですが、急激なる進歩と云ふ事も、同じく社會の進歩を害する事になる、即ち革命を生ずれば革命の結果、反動を生じ非常に揺り戻す、革命の結果、社會が治まればよいが、社會は凡べて反對の勢力がある故、再び反動してきて、革命の結果で進んで来ただけ反動の結果で揺り戻す事になる、革命反動反動革命と云ふ事で、イ、ツ、マ、デも社會は進歩しない事になる、

是の如く社會上の研究に就いては、他の學術に於けるよりも警戒を要する所以で實際上に影響を及ぼすこと少からぬのである、其他宗教上の宗派心、政治上の黨派心、人種上の偏頗心は、社會の上では非常な害悪をなすものですから、社會學を研究するにも、まづ此の宗教上の宗派心、政治上の黨派心、人種上の偏頗心を餘程斥くる様にせんとはいけない、他宗教の社會を調べるに就いて、自分の宗教の理想が伴ふて来ると、それを以て直ちに善惡邪正を判断する傾向がある、又政治上に於てもさうである、他の時代若くは國土の事を論ずるに當り自國自分の主義が多く出て来る、例せば徳川時代の事を論ずるに當つて藩幕方の人と藩閥方の人とは自然と判断を異にする事になり易い、コウ云ふ事は最も注意して、社會學を研究するには、すべての事實

宗派心、黨派心、人種心、偏頗心、及び個人主義、戒るべき事

を平等に見て解釋しなければならぬ、而して如何なる宗教及制度風俗と雖も、或る時代に一般に行はれて居るものは、必ず其社會の必要から起つた者であることを忘れてはならぬ、人種が違ふと殊に其判断を誤まる事がある、例せば、日本の方から云ふても其の例がある、西洋人は、兎角東洋人と云ふと一種異つた人種と思ふて、野蠻人と解釋して居る、然るに、其野蠻人中の日本人が西洋文明の術を學んで戦争をしても、日清戦争の様に非常に勝つた、其結果西洋人は、東洋人に、西洋文明の利器を與ふる事は、危険なるを感ずる事になつた、若しも日本人の眞似をして支那人が強くなり、西洋文明の機械術を學び、軍隊の組織が出来たなれば、四億以上の支那人があるのであるから、一朝事あれば西洋は、カナラマ事に思ひ、野蠻人が西洋を滅亡すると云ふ風に歸結して恐れた人がある、人間は元より平等である、或る意味では西洋人も野蠻人である、文明の結果で文明人であると云ふだけ文明を取つてしまふたら、其の天性は野蠻人と少しも異ふ事はない、亞米利加の「インデヤン」、南洋の土人と同じく高等動物である、或る意味では西洋人は即ち野蠻人の文明に進んだ者で、其の天性は古今文野の別はないのである、將來支那が非常に開けたならば、コウイ、か知らぬが、全くの空想である、論據が丸て間違つて居る、白人が文明人て他が野蠻であると云ふ事は人種上の偏頗心に基づいて居る、夫れは維新の當初日本人が西洋人を評したと同じである、日本人は西洋人を見て智慧ある夷狄であると思ふたは非常の誤解であつた、夫れて社會的研究をするには、人間がいくら文明開化しても教育を取り除くと、今も昔しも變つて居らぬと云ふ事が分かる、人間は進化すると云ふけれども、此れは社會の

進化です、動物としては人間は平等である、「ダウキン」の進化説で云ふと、元は人間は下等動物から進化したものであるけれども、人間になつた以上此より上には發達しないです、此の上、羽が生へ鱗が生へる様な譯には行かない、殊に文明の智慧がある故、肉體は何れの境遇にも應じて進化せぬても、社會進化して凡ての場合に應じて行く事が出来る、人間になつた以來といふ者は天性には變はりはない、北海道の土人や臺灣の土人などは、非常に未開の様ですが其の精神肉體を分拆して見れば變はつた處はない、天性と云ふ者は平等である、天性は野蠻人も文明人も同じで文明人と雖も男女の欲は同じで、野蠻人も文明人も無差別である、只だ社會進化の程度階級が異なるのである、生れながらの天性は皆同じである故、東洋人が開けると非常に危いと云ふ歸結は、間違ふて居る、まづ斯様に社會上の現象を研究するには、種々の警戒を要する次第であります、

第五 社會とは何ぞや

社會と云へる詞は近頃出來た詞で、只だ漠然と實際に使はれて居る、普通では家族と國家の中間が社會と思はれる、夫れで日本では、家族若しくは學校を出るのを社會に出ると云ふ事になつて居る、其上に國家がある故、普通の使ひ方では家族若しくは國家の中間の様に思はれる、此れは俗間に用ひる詞で學問上に用ひる詞ではない、英語でも社會と云ふ詞は同様に用ひられて居る、兎に角社會に出ると云へば、家族若しくは國家の中間の事を云ふが、時によると、社會は大變狭まくなつて、云ふて見ると上流社會即ちソサイエチーと云ふことがある、即ち交際社會まづ上流社會の事を意味する事になつて、此れも通常の用ひ方で學問上の意味ではない、併し兎に角此の社會と云ふ字は用ひると廣ひ意味になる、家族も市町村も國家も世界も社會と云ふ事が出來ます、殆んど人間と云ふ詞と、社會と云ふ詞は、同意義に用ひる事が出来る、兎に角二人以上夫れから定限はない、一人では社會と云へない、人間と云ふ詞は、一人でも人間と云はるゝが、此れも支那語の意味では一人ではない様です、社會と云ふ意味でしょう、けれども日本では一人でも人間と云ひます、社會と云ふときは兎に角二人以上なければならぬ、ソコテ社會といふ詞は其意味から云ふと、第一は仲間を有する所の状態、二人以上あれば社會と云ふて、二人の間には社會が成立します、然らば何にか二人の間に社會を爲す所の要素があるかと云ふに、意識ある所の個人が二人接する時には互ひに知り合ふ作用が起る、而して互ひに知り合ふ中には、異がふ所もあるけれども又同じ所もある、知りて見れば彼も我も同様の人なりと感ずる所の情が起る、具體的に云ふと、彼れの好む所我れも亦好み、我れの好む所彼れも亦好むと云ふ事が分つて来る、なほ具體的に云ふと我の恐るゝ所の者は彼も恐る、我の愛する所の者は彼も亦愛する事が分かる、野蠻や極半開の時代で見ると、二人よると、何にが一番、コソ、イかと云ふと猛獸が、コソ、イ、ソウすると一つの猛獸が現はるれば、共同の恐れがあり、共同の敵があるから、自然と同情同感共同戮力と云ふ事になつて来る、兎に角、斯の如く、二人の人類が相會する時には、ソコに知り合ふ所の作用がある、知り合ふ所の作用同情を持つ事が出来る事になる故、二人相會合する時には、社會ある事になる、社會と云ふ詞は、重もにソウ、云ふ同情者の集まる状態を云ふ、即ち二人若しくは二人以上の人類が互ひに相知り、互ひに同情を有し

社會と云へる詞は近頃出來た詞で、只だ漠然と實際に使はれて居る、普通では家族と國家の中間が社會と思はれる、夫れで日本では、家族若しくは學校を出るのを社會に出ると云ふ事になつて居る、其上に國家がある故、普通の使ひ方では家族若しくは國家の中間の様に思はれる、此れは俗間に用ひる詞で學問上に用ひる詞ではない、英語でも社會と云ふ詞は同様に用ひられて居る、兎に角社會に出ると云へば、家族若しくは國家の中間の事を云ふが、時によると、社會は大變狭まくなつて、云ふて見ると上流社會即ちソサイエチーと云ふことがある、即ち交際社會まづ上流社會の事を意味する事になつて、此れも通常の用ひ方で學問上の意味ではない、併し兎に角此の社會と云ふ字は用ひると廣ひ意味になる、家族も市町村も國家も世界も社會と云ふ事が出來ます、殆んど人間と云ふ詞と、社會と云ふ詞は、同意義に用ひる事が出来る、兎に角二人以上夫れから定限はない、一人では社會と云へない、人間と云ふ詞は、一人でも人間と云はるゝが、此れも支那語の意味では一人ではない様です、社會と云ふ意味でしょう、けれども日本では一人でも人間と云ひます、社會と云ふときは兎に角二人以上なければならぬ、ソコテ社會といふ詞は其意味から云ふと、第一は仲間を有する所の状態、二人以上あれば社會と云ふて、二人の間には社會が成立します、然らば何にか二人の間に社會を爲す所の要素があるかと云ふに、意識ある所の個人が二人接する時には互ひに知り合ふ作用が起る、而して互ひに知り合ふ中には、異がふ所もあるけれども又同じ所もある、知りて見れば彼も我も同様の人なりと感ずる所の情が起る、具體的に云ふと、彼れの好む所我れも亦好み、我れの好む所彼れも亦好むと云ふ事が分つて来る、なほ具體的に云ふと我の恐るゝ所の者は彼も恐る、我の愛する所の者は彼も亦愛する事が分かる、野蠻や極半開の時代で見ると、二人よると、何にが一番、コソ、イかと云ふと猛獸が、コソ、イ、ソウすると一つの猛獸が現はるれば、共同の恐れがあり、共同の敵があるから、自然と同情同感共同戮力と云ふ事になつて来る、兎に角、斯の如く、二人の人類が相會する時には、ソコに知り合ふ所の作用がある、知り合ふ所の作用同情を持つ事が出来る事になる故、二人相會合する時には、社會ある事になる、社會と云ふ詞は、重もにソウ、云ふ同情者の集まる状態を云ふ、即ち二人若しくは二人以上の人類が互ひに相知り、互ひに同情を有し

而して共同の目的の爲に、協力する事の出来る状態は、社會であると云ふ事が出来ます、夫れが最も單純なる社會の定義である、即ち互に相知り、互に同情を有し、而して共同の目的の爲に戮力する事の出来る人間の状態と云ふ者が即ち社會である、夫れがモウ一と進むと組織その者を社會と云ふ事が出来る、斯の如く二人以上の人間が互に相知り、互に同情を有し、而して共同の目的の爲めに力を協はする事の出来る様な人間が相集まる時に於ては、一の組織を立てる様になり、永久の組織が出来て社會組織が成立する、ダ、ソ、云ふ者が成立して、種々なる制度規則と云ふ様な者が出来、規則及組織と云ふ者は永久に傳はり、個人は消滅し變遷するけれども、その組織秩序規則は完全に於て、代々に存在する、抽象的に社會と云ふ時には、組織其物を社會と云ふ事が出来る、互に相知り互に同情を有し、共同の目的に力を協はする事の出来る、人間の關係が、永久的になり組織的に成つた所の其の結果を社會と云ふ事になるのです、故に社會と云ふ言葉は無組織の状態を云ふ事もあり、又一定の組織をなした状態を社會と云ふ事も出来る、

從來社會の定義を下す學者は共同分業する所の状態に重きを置いた、從來は専ら經濟學上より社會を觀察しか、經濟學上より社會の意義如何と云ふ事を觀察する時に、直ちに現はる所の者は何にかと云ふに、即ち分業協力である、經濟上で社會は何のであるかと云へば、分業協力である、故に經濟學上より觀察する時は分業協力のある所は、社會と云ふ事が出来るけれども、分業協力のない所は經濟學上より觀察するに就ては、價値がない事になる、從來經濟學者の定義は、分業協力の状態を社會と云ふた、分業協力がなくては社會はな

分業協力は社會現象の根本に非ず

いと云ふ位に、從來は之に重きを置いた、社會の定義も分業協力に限る様になつて居つた、殆んど分業協力は社會の根本的要素であるかの如くに從來の定義はなつて居つた、けれども分業協力は結果であつて、モウ一とつ奥に原因がある、ドウして分業せしむるに至つたか、如何にして協力せしむるかと云ふに、其の動機を捕捉せざる以上は、まだ社會の根本的要素とは云へない、今日社會學者の定義は分業協力より、モウ一とつ深くなる、分業協力は結果であるが、その原因如何んと云ふ事が重要である、ソ、コ、今日例せば、獨逸「ベルリン」大學の「ツンメル」と云ふ人の社會の定義に依ると、即ち人類の相互作用ある所に社會存すと云ふ事を申して居ります、必しも分業協力の至らずと雖も、すべて二人若しくは二人以上の間に、精神上的の相互作用ある所には、社會存すと云ふ、この精神上的の相互作用が外に顯れた結果、分業協力になる、精神上的の相互作用なき所に分業協力は出来ないです、夫れ故社會と云ふ事の定義を下す時には、即ち分業協力の根本たる人類の相互作用に着目せなければならぬ、たゞ分業協力だけで云へば、社會以外の者にも分業と協力とはある、此の花(卓上の花を指す)の如きも自然と其中に分業がある、協力があ、草木には根があり、幹があり、而して葉があり、花がある、其葉は丁度動物に比較すると、肺の臓の様な働きをして空氣を呼吸し、即ち動物の吐いた炭酸瓦斯を吸収して、營養を取るのである、其他、木の根、木の幹、皆な各々分業協力があ、況んや、人間の身體になると分業協力が成立つて、五官各々職業を持つて居り、一の有機體即ち全體の爲めに分業協力して居る、然らば、人間の身體にも、社會と云ふかと云ふに社會ではない、分業協力はあ、其の由

て起る所の原因に精神作用はないのであるから、此れを社會とは云はぬ、動植物の機關は立派に出來て不可思議なる原因より起つて居る、宗教上の詞では造物者の意匠に依ると云ひ、此れを進化説に依ると生存競争の結果に成ると、いろいろいふけれども、兎角其の秘密は分からぬ、ソウ云ふ所には社會と云ふ名稱は下だされぬ、分業協力があれば社會と云ふ事になると、人間の肉體も草木も社會と云ふ事になるが、其原因に人間に於ける状態と異つた物がある故、社會とは云はぬ、意識より起る分業協力でないと、社會的作用と云ふ事は出來ない、意識より起り互に知り互に同情を有し、而して始めて其結果で戮力協同分業すると云ふ時には、夫れは即ち社會の最も進んだ状態になるべき、ソコで從前の定義に依ると組織のない所には社會なしと云ふて居る、經濟學上では重にも、ソウなつて居る、分業協力になると組織が必要なので、或人は此の事を爲し或人は他の事をなす、皆な共同の目的に向つて力を協はせる、ソコに規則が必要であり、組織が成立たなければならぬ、而して今申す通り其原因が則ち社會の社會たる處です、共同戮力と云ふ現象だけでは社會と稱するに足らぬ、ドウ云ふ原因から起るか、ドウ云ふ精神的作用に依つて互に力を協はする様になつたかを知らぬ時は、社會とは云はれぬ事になる、共同戮力に至らずとも夫れに至り得る處には社會ありと云ふ事が出来る、社會と云ふ意味は「マンメル」の定義で云ふ時は、人間間に相互作用ある所に社會存すと云ふことになる、此の定義で云へば社會は二ツになる、

社會の分類

即ち組織的社會と、無組織的社會とに分ける事が出来る、ソコで經濟學の觀察上から云ふと、たとひ二人の友人があつて共に運動して居るのは、社會でないといふ、又非常に澤山の人が上野或は芝公園に集りて居る、而して集まつたばかりでなく、一の物を見、或は演説會があるとしても、ソコものは經濟學の點から云へば社會とは云はぬ、然れども家族は社會であると云ひます、二人以上で何にか分業があれば社會と云ふ事が出来るると云ひ、たとひ、何人集まりても分業協力のない時には社會ではないといふ、軍隊の如き澤山の兵士が秩序立つてあるいて居つても、夫れは社會でないといふ、乍併今この「マンメル」の定義に依ると、夫れも社會と云ふ事が出来る、二人が互に運動する時は互に知り合ひ互に同情があつて、興味ある宗教上の談話とか文學上の談話とか、相互作用が活潑に其の間にある、即ち其處に社會ありと云ふことが出来る、況んや多くの兵士の如きも、一の目的を以て同じ職業をなすつゝある所の者で、互に共同して敵に向つては戦ふ精神を持つて居る、固より社會になつて居る、又たとひ見ず知らずの人間であつても、偶然に汽車の中に邂逅して行き、或は同じ船に乗つて行く時には、其處に社會があると云ふ事が云へる、船中の人でも無事で行けば物を言はずに濟んで仕了ふが、萬一風波が起り、船が顛覆する場合になると、同舟の人が互に相救ふ事になる、孫子が兵法の中にも云ふて居る、吳越は平生敵であつても同舟の中に在りて共同の利害になると、互ひに相救ふこと手足の如くなるると云ふて居る、いかにも社會の秘密を悟つたらしい、ソウ云ふ風に同じ汽車、同じ船に乗ると、たとひ見ず知らずの人でも、互に共同の目的がある故、其の目的に對しては同情同感と云ふ事になる、たとひ詞は云ひかはずとも、精神上的の相互作用がある故社會と云ふ事が出来る、即ち社會學の

上では二人以上若しくは、全世界を含む事も出来る様に定義を下す方が眞理である、その意味で云へば世界若しくは人類と云ふことは、組織的社會で無い、無組織的社會である、又幾分か理想的社會であると云ふ可きである、實際世界的意識人類的意識はあるけれども、それは最も文明に發達した人民だけに過ぎない、まだ組織せられた社會ではない、決してそれは人間一般に存在して居る意識ではない、今日の程度でいへば、まづ組織せられた社會で最も廣大なる社會は國家である、國家以上の社會は今日はない、國家は最大最高の社會である、夫れから國家以下に種々組織せられたる社會がある、例せば郡縣市町村、或は宗教社會、文學社會、商業社會と、いろ／＼ある、夫れで社會といふものは、組織的社會、無組織的社會の二種類に分けましたが即ち此の組織的社會は國家が中心點になる、此の組織的社會の下たと上へとは無組織的社會がある、組織的社會は無組織的社會より出で來りて、*ダ、ン、ク*組織的社會の範圍を廣めて、今日では國家と云ふものが最大なるものです、けれども、世界は未だ組織せられて居らぬ、只だ理想である、兎に角、*ド、ウ、カ*組織せぬと行かないと云ふ、互ひの感情は列國にある、國際間の關係を法律的になし、國際間の關係を完全にしなければ行かない、國際法を以て世界中を支配する様にせんければならぬと云ふ考はある、今日では不完全であるけれども國際法は進んで居る、文明諸國は互に國際法に依つて互に交ると云ふ事になつて、國家と國家との間組織的になりつゝあるが未だ不完全である、夫れで世界人類の事は多く空名で、只た開けた人の中だけには、世界的意識が理想にある丈で、世界的意識と云ふものは、一般人類にはない、廣く云ふと世界を社會と云ふ事

が出来れば、今申す通り組織的社會ではない、世界の各部に相互作用の出来ぬ場合が多い、今日では鐵道電信蒸氣船、頻繁になつた故、文明諸國は互に相互作用をなして居るけれども、「グリーンランド」に居る土人南洋諸島に居る社會と日本との間には相互作用はない、日本とか米國とか、苟くも文明諸國となつて居る所の國民間には、直接間接常に相互作用がある、即ち英吉利の戦争は日本迄も影響を及ぼし、自清戦争は歐羅巴に直ちに影響を及ぼす事になつて、殆んど文明諸國丈けは相互作用が頻繁である、即ち一つの社會と云ふ事が云へます、無組織的であるけれども相互作用がある故、社會と云ふ事がいへるが、却々人類全体世界全体に、ソウいふことは出来ぬ、人類と云ひ世界と云ふは、一の名稱若くは理想に過ぎぬ位である、まづ斯様に社會の種類を分けて、組織的社會、無組織的社會と云ふ事にしますが、それから、モウ一ツの區別を立つることが出来る、即ち自然的社會と政治的社會と區別することが出来る、自然的社會はまづある部分だけは無組織的社會と同じ意味に當るけれども、自然的社會と云ふ中には、必らずしも全く組織のないといふ譯ではない、只だ政治組織のない社會の事を云ふのです、即ち半化未開の人民になると社會組織はあるが、極下等な處へ行くと政治組織はない、治者被治者の區別はなく、主權者と云ふものは、サツ、バリ分からぬ、役人も政府もない、尤も或る社會では政府なしに平和に生活して居る、政府なしに平和に生活する文明人はないが、野蠻人にはソウいふ例がある、ソウ云ふ所に行く、習慣で大概治まつて居る、皆な習慣で社會の制裁が立つて行く、或は萬一個人間に葛藤を生ずる時には、別に裁判官が定まつて居らぬ、老人が來てさばくのであ

る、その社會では、老人を尊んで居るからである、又或る處では裁判の方法が違ふ處もある、或る野蠻人の間に紛議があると、詩や歌を吟じて能く吟じた者が勝ち、負けた者が耻を受くと云ふ事になつて居る、輿論で制裁を付けて居る、即ち習慣が規則で輿論が裁判官である、かく政治組織のない社會がある、治者被治者の區別なき社會が實際ある、ソ、ウ云ふ社會は國家とは云はない、社會とは云ふが國家と云ふ名は付けられぬと云ふので、英語では是を自然的社會と稱し政治的社會と區別します、いろ／＼社會の種類區別があるが、まづ社會學の上で必要の區別は、無組織的社會と組織的社會又たその組織的社會の中に二種類ある、未だ政治組織をなさぬ處の社會がある、たとひ組織的社會まで進んで居つても政府人民治者被治者の區別のない社會がある、此れを自然的社會といふ、英語で Natural Society と云ふ、自然社會はダン／＼進んで治者被治者の區別が明白になる、即ち酋長政治となり役人がある様になつて此を Political Society 即ち政治的社會と云ふ是れ即ち國家であります、ソ、コ、ノ國家と非國家とは理論の上では明白に區別することが出来る、互に同情を有し互に共同戮力し得る數多の人民の中に一人、若くは數人の治者があつて、其治者に對しては全身の人民が服従すると云ふ關係になつて居る、夫れは國家である。互に相知り互に同情を有し、又共同の目的の爲に戮力するけれども其間に一人、若しくは數人の治者と云ふ者があつて夫れに對して社會全身の人々の服従する習慣のない所は、いまだ國家ではないと云ふ事が出来る、理論の上では斯く明白に區別が立つが、自然的社會から政治的社會に移り行くのは、夜がダン／＼と曙になると同じく何處より何處までが國家、或は國家

てないこと云ふ事を區別する事は六ヶ敷い、此れは國家であると云ふても、他の人から認めない事もあるです、實際に於ては判然しない、社會があつて國家と云ふて、よいかわるいか、餘程疑問になることがある、社會の定義はそれだけにします、

社會は有機體であるか

今度は、社會の本質の事を申します、大概定義の中に分かつて居るが、從來「コント」は生物學に重きを置いた、社會學は生物學に基礎を置かなければならぬ、社會は、一種の有機體である、コ、ウ云ふ風に説を立て、又一方に於ては、第十九世紀の初めから、獨逸に國家有機體説が行はれて居つた、獨逸の有名な哲學者「フ、ヒテ」「ヘーゲル」の如きは社會學の方面から研究せず、哲學上から國家を研究して、國家は有機體と唱へて居つた、一方には此の國家有機體説があり、而して「コント」は社會學の基礎として、生物學に重きを置き社會は有機體であるとの意味を主張した、而して「コント」の後、「スペンサー」は第十九世紀の中ば過ぎ千八百六十年社會有機體論をなして社會は有機體である事を唱へ、種々生物學上の例を引いて説く事になり、續いて獨逸澳地利等の學者に續々有機體を唱へる事になつて、社會は有機體であるといふ詞は一種の流行語となり、重きをなす事になつて、今日でも社會は有機體であるかないかは社會學者の間に議論がある位です、即ち分業協力は有機體の本質であると云ふ點を以て云へば、社會も有機體と云はなければならぬ、分業協力は社會の間にもある、農業工業等支那の詞で云へば士農工商と云ふが、此れは社會の分業に外ならぬ、即ち社會の一部分だけが農業、又社會の一部分が商業或は製造と云ふ様に、又他の部分は社會を保護し社會を統治する處

の作用をなす、此れが大きな分業で、夫れから又種々なる分業がある、動物間植物間に在る所の類てはな
いが、最も複雑なる分業協力がある、分業協力は社會にあるから社會は有機體と云ふも差支ない譯です、ま
づ第一の意味は其處にある社會は有機體なりと云ふ事は人身の五官に分業があつて、全體の爲に働く如く、
社會と云ふものは互に分業し協力して働いて、其の點から云ふと社會と有機體は同じである、互に相依り
相依頼して居る故、どれが上だ下だといふことは出来ない、手足であるからと云ふて下等の者と賤しめられ
ない、其の手足の爪先きに苦痛があれは腦髓に苦痛を感ずると同じく、全體は一部の痛さを全體の痛さとして
感じ、全體に血液が循環し神経が行き渡つて腦髓は手足の爪先きまで保護して居る、或る意味では腦髓即ち
動物の最も上にある處の腦髓も、手足のために働いて居る、其他肺臟と云ひ心臓と云ひド、テラが上へ下たと
云ふ事が出来ない、肺は空氣を吸うて新鮮なる酸素を心臓に與へ、心臓は血液を循環せしめて之を分配し、
有機體の各部は互に目的となり互に方便となつて、どちらが上へ下たと云ふ事が出来ない、只だ習慣上奇麗と
かきたないとか云ふけれども、道理の上からは五官何れも必要である、完全なる有機體の爲には缺くべから
ざる者で、社會も丁度夫れと同じく士農工商互に分業して、普通の人は、政治を取る役人は、上へと思ふが
役人ばかりあつても社會はいかない、最も下等と思はるゝ者が社會存在の爲には最も必要です、夫れ故社會
學の言語より云へば貴賤の別はない、生理學上で五臟の中に賤しい者がないと同じで、最も耻かしいと云ふ
部分が生理學上では最もも必要な部分になつて居る、五臟六腑皆な貴いのである、それで社會も共同生存

の爲には何れの部分も必要である故、その邊からは社會も有機體と同じである、社會は有機體と云ふ事が出
来る、但し社會は有機體なりと云ふ事は、有機體の如しと云ふ意味ではよいが、社會即ち有機體なりと云ふ
事は一の問題であります、

第六 社會有機體説の批評

社會は有機體なりと云ふ説の根據并に其の批評に就て、引き続き述べますが、或る點に於いては、社會は
前云ふ如く有機體を名けてよい、即ち社會といふ全體は只だその全體を成立たしむる所の物體が、外部的に
集合し居るのみと云ふではない、物質のカタマリと社會のカタマリとは餘程違つたものです、例せば石の積
前み重なつて居る状態とは趣きが違ふ、又この家などの状態とも違ふ、此の家は成程各部分に夫れ／＼の持
があつて成立つて居るが、夫れは皆な外部より人が成立たしめた所の結果である、即ち此の石、材木、瓦と
云ふ様な物は皆な人間の方で外よりクツ付けた者で、大きくするも小さくするも、人々の隨意にて只だ部分
を加へて行けば大いなる製造場や、寺の如くに種々さまざまに人間の力を以て付け加へて膨脹して行く事が
出来る、社會は斯の如くにして成長發達する者でない、社會は自然と内部の勢力で増長する、即ち人種の繁殖
に依つて自然と社會が膨脹して行く有様は、前申す通り幾分か有機體と同じくある、即ち分子たる細胞より、
纖維となり、纖維が集つて機關となり、機關が集つて、有機體をなす有様に能く似て居る、社會は只だ部分
が集つて居る計りでなく、その部分の間には一種の關係があつて、その關係は内部的の關係で、外部より人

第一の類

かッケ加へた所でなく、不思議なる内部の力で、互に關係を結び合せて居る所の者です、
 第二は、此の關係即ち各部分の關係は、部分を成立たしめて居る分子の變化に拘はらず、比較的不變なる
 ものです、而して各部分は其不變なる所の關係によつて、相互に相關的作用をなす事になつて居る、生理學
 上で云へば、人間の身體を組織する分子は始終新陳代謝して居る、丁度佛敎で人間の生命は燈火の如しとい
 ふ喩があるが、此れは學術上の事實を云ひ現はして居る、人間の身體は暫時でも止まつては居らぬ、各部分
 は瀑の水の流るゝ如く、或は燈火の如く、其の燈火の作用に依つて油が少しづつ燃え去つて行く間に、光を
 放つ様に人間の身體をなす所の、元素物質の元素は、始終新陳代謝して行く、即ち毎日我々が食物を食ふて
 補ない、毎日一つの考、一つの働きをする毎に、此の物質を消費する、夫れを補ふ爲に三度の食事を要する、
 丁度人間の身體は、物質上からいふと瀑の水や、燈火と同じである、毎日變はらぬやうに見えるが、それは
 白絲の瀑の如きもので其の分子は始終變はりつゝあると同じく、人間の身體も一定の形はあるが、乍併其分
 子は骨の堅い所に至るまで七年には一變する、堅くない部分は、それより短日月の間に變つて仕了ものです、
 けれども、各部分の關係は同じ事である故、始終一つの身體と云ふ者が成立つて居る、ソッして其關係が原
 因となつて相互に相關的作用をなす、即ち肺臟心臟胃の腑は、自分一部だけの働きては、その働きを全う
 する事は出来ない、胃の腑が食物を消化するには、ヤハリ肺臟が呼吸し心臟が鼓動する作用をなさぬければ
 ならぬ、心臟は鼓動し、肺臟は呼吸し、胃の腑は食物を消化するので、相互に各自の働きをなすことが出来

ます、有機體の状態は斯の如き者であるが、社會の状態も夫れと同じ様なものです。

是の如く有機體に於ても社會に於ても部分と全體との間、内部的の一定なる關係がある部分と全體との間に
 は外部よりクツ附けるのでなく、内部的に自然に成立する所の關係がある、各部分は始終變化するけれども、
 其の關係は比較的に不變化である、又た社會も有機體も内部から成長發達し外部より膨脹せしむることによ
 來ない。

第二の類

それから又た有機體は内部的の關係で、成立つて居る所の者であるが、外界の影響を受くる者です、外界に
 對して生存を維持する爲には、種々なる順應をなさぬければならぬ必要を生ずる者です、暗い處に生活する
 所の魚は、目が無くなると同じく、外界の影響を蒙る、即ち外物に適應して生存を全うする必要上、又全
 體を保存する必要上、時に依ると部分の生存だけは犠牲に供する事がある、有機體に於ては、斯の如き場合
 が始終ある、

社會に於ても全體の組織を保存する爲に、社會を組織する各人の有する物は、全體の爲に犠牲になる必要を
 生ずる傾向がある故に、社會を有機體に喩る事が出来ず、

第三の類

夫れからモウ一つ申すと有機體も社會も外物を目的とせずして、自分自身の内に目的を具備した者です、社
 會も有機體も外物に對せずして自然に其の目的がある、此の「ユツプ」は「ユツプ」を指す「ユツプ」夫れ自身には
 何んにも目的はない、人間との縁が離るとヤハリ土と石とのカタマリに過ぎないで、何の用もなさぬ、人

間に對して人間の爲の一方便である、即ち人間が生活する爲の方便で、コップ夫れのみでは何んにも目的を具備せぬけれども、此の花(花を指す)は心はない、目的を自覺して居るとは云へないが、人間が見ると見ないに關はらず、此花はひとつの終極點に向つて生長發達して居る、内部より自然に成長發達する力がある、芽を發し花を開き實を結ぶ所まで行く所の目的を有つて居る、即ち外の物に對せざるも、行く處迄行かなければならぬと云ふ終極點がある、動物に於ても夫れは同じであるが、社會もソウである、昔しは人間社會は未來の世界の爲めの準備と思ふた時代もある、或る意味では、ソウです、現在の社會は、モウ少し完全な社會に達せんとする所の階段に外ならぬ、けれども夫れは或る意味ではソウですが、たとひ、其の完全なる人間社會の状態まで達せんでも、現在の社會だけで充分社會として生存する價值がある、此の社會は生存する目的を有つた者であると云ふことが出来る。例せば此の社會は百年の後になくなる、人間が皆な消滅する未來に於て無くなるのみならず、現在に於ても消滅するとした所で、百年と云ふ間は人間が幸福を得て生存せぬければならぬ所の理由がソ、コに成り立つ、智識あり人情あり、而して本心を具備する所の人間社會であると生存する時間の長短に拘はらず、將來即ち未來死んだ後如何んど云ふ事、及び造物者が有るか無いかに拘はらず、人間夫れ自身に價值があつて、人間の幸福は、増進させぬければならぬと云ふ目的が成立します、外の物の方便とならざるも社會夫れ自身は、獨立固有の目的となる所の性質を有つて居る、斯云ふ點からも社會は有機體であると云へる、併しそれは或る意味で社會は有機體の如くあると云ふ丈で、實際社會は有機體であると云ふ事は、却々論結する譯には行かぬ、

「スペンサー」の論法は多少前後矛盾して居る所がある、「スペンサー」は世の中には實物に二つしかない、無機物、有機物である、ソ、コ、社會は無機物でないとすれば、有機體でなければならぬ、凡そ天地間の事物には無機物有機物と二ツに分ける、草木人間は有機物、金石の如きは無機物、物質の中では此の二ツしかない、今社會を實物とすれば、ド、チラにか屬せんければならぬ、而して有機物は必ず成長發達し無機物は成長發達しない即ち有機物は成長發達するものである社會も亦た成長膨脹する故有機體なりと歸結して居る、けれども、成長と云ふ意味には餘程社會と有機體との間に相違の點があるです、夫れを區別するに就て表面上から申すと、

第一の相違 社會には一定の外形はない、凡べての有機體には一定の形がある、即ち人間草木昆蟲其他の動物植物、皆な有機體である以上は、長短方圓種々なる一定の形がある、けれども、社會には、ソ、ウ云ふ一定の外形はない、日本の形は蜻蛉の様であると云ふが夫れは只だ日本人の住んで居る島の形を云ふだけである、地理學の上で云へば伊太利の形は長靴の様である、伊太利の半島の先きには「シ、リイ」と云ふ島がある、靴の先きで靴をける様である故、地理學の記憶に便する爲に便利であるが、伊太利の社會が長靴の様だと云ふ譯ではない、即ち社會は無形である有機體は定形を有つて居るが、社會にはソ、ナ物は無い

第二の相違 其の次に有機體には一定の生命の期限がある、殆んど確定した期限が其間に在つて成長し發達し老衰し死亡

する事が運命の様になつて居る、人間は人生七十古來稀なりと云ふて居る、他の動物にすると皆な成熟期限の五倍だけは活きる、猫は十八ヶ月で成熟する故に其生命は九年若くは十年、或は三年で發育する動物は三十五年は活きる、馬は五年で發育し廿五年活きる都合である、人間は二十から二十五までに成熟する故、その割で云ふと百二十五まで活きる譯です、夫れて五十や七十で死するは他の動物の例で云ふと人間は餘程不規則になつて居る、人間は、モウ少し自然の法則を守り情欲を制し社會を完全にし、流行病を制止する様になれば、他の動物と同じ割合で發育期の三倍五倍は活きるでしょう、武内宿禰の如く二百年も活きると云ふ事は疑ふべきであるが、僧の天海が百三十迄も活きたと云ふ事は、夫れは實際であると思ふ、ソウ兎に角生命の期限といふものがあるけれども、社會には是の如き期限はないのである、

即ち精神の衰亡し老衰に近い、支那の如き社會は自滅に近いといふとですが、然らば支那はドウしても亡びなければならぬかと云ふにソウ云ふ譯はない、支那や日本の奮發其のヤリ方に依つては、列國に對する外交略の如何んに依つては、支那が活きる機會がある、他の有機體では或る期限に達する其機會はない、有機體は一定の期限が満つれば衰亡する運命を持つて居る、其の點に於ては社會と違ふ、社會は内部で反逆が起り、外部から敵の襲來する結果で多くは滅びるのであるが、有機體の如く自然に消滅せなければならぬと云ふ理窟はない、尤も歴史上調べて見ると亡國の例は踵を接して居る、ある意味でも國家も又必ずず成長發達し衰亡すると云ふ學者もあるが、其の死する所以の者は有機體とちがふ、又有有機體の死するや、その有

機體を組織する分子は必ずしも全體と共に消滅しない、分子は暫く後迄活き残る、けれども早晚消滅に歸する、蛙の頭を切つても足の方は動く、神經でも部分の神經は死んで居ないと云風に活き残るが、乍併有機體であると全體が死亡すると部分は晚かれ早かれ消滅します、社會はソウでない、たとひ支那帝國が亡滅したと云ふても支那の人民は亡滅しない、イツモ生存する事が出來ると云ふ風で、有機體の例と社會の例とはちがふ、

第三の相違

其次には平和の時でも各社會の間には分子と分子と始終交通混合して居る、即ち英國人が日本に來て生涯活するものもあり日本人が外國に行つて生涯商賣する者もあるか、有機體の例ではソウは行かない、私身の身軀の分子が諸君の分子の中へ這入つて旅行滞在する事は出來ない、それから動物には營養機關、分配機關、整理機關がある、「スベンサー」が社會は有機體なりと云ふ重なる理由は此の三つの機關がある事を云ふので、即ち食物を食ふて胃にやりそれから滋養分が血液に廻わり、全體に分配され、それから腦髓があつて腦髓から神經に傳へ全體を整理する、社會もソウ云ふ風で即ち農業と云ふ者があつて社會の滋養物を生産し、それから商業によりて農業の生産する滋養物を分配し、それから政治及宗教と云ふものがあつて、社會を整理して行く、云はゞ腦髓及神經と云ふ様な者である、即ち此の三つが具はつて居る、然るに社會の機關といふ者は妙な物で、各社會錯雜して居る、昔の様に鎖國の時代であるといふ社會は一の社會だけの機關があるが、ダンクと國と國との交通が開けると營養機關等は列國共通になる、即ち日本人が消費する所の食物

の中、今日我々の食ふ所の米に、支那米が雜つて居る所、既に營養機關が支那日本と共通になつて居る、況んや石油の如きは此れは共和國の亞米利加、又近頃、コウがつて居る魯西亞あたりから來るので、若し此の品物がなければ、日本人は安樂に生活が出来ない、ソウ云ふ風に營養機關が列國共通になつて居る、トコロデ他の動物になると私しの食ふた食物は諸君の腹にまでも、滋養を分けてやる譯には行かぬ、自分の食ふた食物は自分だけしか營養しない、國家及び社會といふ者は一國の生産する所の者は餘るすから、餘まつたのは他の社會にやり他の社會に餘まつた所の者は無い所の者と有無交換する事になつて居る、それ故營養機關、分配機關は社會上では動物の例とは違ふ、整理機關にしても、ソウです政治は大抵其の社會のみの整理機關であるが、ツマリ宗教の如きは、大概佛教基督教又マホメット教になると世界的宗教で一國だけではない、一國でない所の社會を整理する即ち大いなる宗教制度と云ふ者は東洋に在つては印度以東支那日本朝鮮暹羅安南共通になつて居る、政治上の事にしても時によりては、日本は北京に行つて民政を施すを云ふ場合もあるし、西洋諸國から來て民政を施す場合もある政治上の整理も時に依ると一國の社會が他の社會に及ぼす事がある、その一國だけの政治機關にしても、他の動物の有つて居る脳髓や神經に比較する譯には行かない點がある、例せば政治上の整理と云ふ者は只だ政府の役人や國會議員がやつて居る譯ではない、有機体にするると脳髓及び神經を離ると殆んど感覺はない、手足の先き何處でも神經系統のある處だけは感ずるが其脳髓及神經の連絡が断れるとサツバリ外は無感覺である、トコロデ政治社會と云ふ者は各人民に整理思想があつて整理し

第四の相

て行く、固より中には其社會の反對者或は乞食小兒風癩白痴等の者があつて社會觀念、若しくは國家的意識のなほ人民もあるけれども、併し、ダン／＼と普通教育の結果で今日では社會の觀念國家思想と云ふ者を一般に普及しつゝあるのですから政府の役人や國會議員計りが國家を思ふ譯ではない、士農工商皆な國家的政治思想を有して居る、それで始めて社會が成立つので、有機体の例とは餘程違つて居ります、斯の如く觀察して見ますと社會と云ふ者は有機体以上の者である事は結論として避くべからざる者です、或る點は有機体と同じであるけれども全く有機体なりと云ふ事は出来ない、

「スペンサー」も遂には有機体と云ふ説を取り除いて居る「スペンサー」は「コント」に基いて、生物學に重きを置き、社會は有機体だと云ふたが、遂には有機体は喩だと云ふて居る、始め社會學に於て委しく有機体なりと掲げて置いて終には有機体と違ふ所があると云ふ、「スペンサー」は全軀舊社會學と新社會學との中間に居る人です、尤も「スペンサー」前後に於ても社會は有機体なりと論定した者が多かつたが「スペンサー」も有機体なりと云ふだけには云ふ、即ち社會も成長し有機体も成長する故社會は有機体なりと歸結して居るが遂には社會と有機体とは違ふと云ふ、其の違ふ所の點は「スペンサー」の説では有機体は於ては感覺中樞があつて其の苦痛及快樂を感ずる、即ち腦髓及び神經系統と云ふ一つの感覺中樞があつて、それが苦樂を感ずる、全軀には感せぬ、トコロデ社會に於ては社會全軀の爲に苦痛快樂を感ずる大中樞があると云ふ事は出来ない、社會に於ては各部分に感覺中樞がある社會は全軀に於ては無感覺で之を組織する各個人に感覺があるの

である

社會に於ては有機体の如く前腦とか後腦とか云ふものはない、國家の腦髓であるとか國會は大腦であるとか比喩することもあるが、それでは國會は、ドゥカと云ふに個人で成立つて居る故、社會の意識社會の感覺は個人にある即ち社會の各部分にあるので全體にはない、ソコデ「スベンサー」は個人主義の論者である故、有機体は全體が目的で部分が方便になる、社會は個人が目的で社會が方便にならなければならぬと云ふ歸結をして居る

社會が目的か個人が目的か此れは別論として後に譲りますが、兎に角社會は有機体以上の物である、

そこで「スベンサー」も社會の進化は有機体以上の進化であると云ふ事を云ふて居る「スーペルオルガニズム」(超有機体進化)と云ふ事は「スベンサー」より出たのである

第五の相

なぜかと云ふに、社會の元素は、ヤ、ハリ有機体の元素の如く分子が集つて成立つて居るが、其分子と分子とを結合することは精神的になつて居る、有機体即ち人間のからだにしますと、各部分を一致結合せしむる其の紐は何にかと云ふに、第一上には皮膚と云ふ皮がある内には筋、奥には骨があつて皆な一種物質的の紐で全體を繋いで居る、其中を無形の不可思議なる生命が一致結合せしめて居るが、それは無意識です、心臓の鼓動する、胃腸の消化する、肺の呼吸する、此れは生理上の作用と云ふ者で無意識であつて、意識といふものはない、社會も或る點までは無意識です、人と人と結合する事も餘程始めは無意識で自然に出来るけれども、

凡て無意識ではない、始めから、ヤ、ハリ前申す通り互に相知り同情を感じ共同の目的の爲に働き得る資格があつて、社會をなすから、始めより全く無意識ではない、社會の組織は即ち此の思想の一致結合によつて成立する、或は感情の結合に依つて結び付け、或は意志の一致團結に依つて、社會の組織が鞏固になる、其の思想の一致感情の結合、意志の團結を媒介するものは言語である、又た社會を同化して行く宗教、或は社會の習慣等の精神的方便があつて社會を成立するのである故、社會は有機体と云ふ譯には行かない、土臺は物質的である、即ち社會を組織する所の分子は一個の高等動物である、人間を各個人に分拆すると、即ち一個の高等動物である故、部分は有機体である精神的有機的であつて、其意識作用によつて社會組織をなすのですから、社會は有機体の如くあるが、全く有機体ではない、有機体以上の物です、有機体は無機体に勝る如く、社會は有機体以上の物である、ソコデ、「ギンチンクス」の定義に依ると若し社會を有機体と云ふなれば夫れは精神的有機体と云はなければならぬ、即ち物質的基礎を有する所の精神的有機体と云ふべきものである、換言せば社會は有機体に非ずして精神的組織である、半ばは無意識なる進化の結果で出来、半ばは有意識的計畫の結果で成長發達する所の組織である、即ち「オルガニズム」と云はずして「オルガニゼーション」と云ふべきものである

第六の相

有機体であると、如何に各部分が欲すると雖も全體の形を自分の思ふ様にすることは出来ない、人間の身体を組織して居る分子が種々計畫して或は長く或は短くする事は出来ない、社會は多少出来ませう各部分を組織す

る所の個人の相互に計畫する結果で、社會組織は改革變更することが出来る、即ちその例は歴史に於て澤山ある、佛蘭西の如きは、百四十五年前は君主政治であつたが、今日は共和政治である、即ちたび／＼の變動により或は自由の共和政治より君主政治になり、又君主政治より共和政治となる事があるが、有機体は、ソレナ變化は出来ない、

モウ一つ社會と有機体と違ふ點がある、有機体の各部分と云ふ者は、丸で全体の爲に存在して居る、各部分は全体を離れて獨立する事が出来ない、部分を離れば命はない、社會に連なる個人は随分社會より獨立し得る社會に對して謀反する事が出来る、有機体は各部分が自由意志を以て全体の爲に盡力する事は出来ない、けれども社會を組織する所の個人は止むを得ず、服従して居ることもあるが、多くは忠實なる士民が悦んで自分の自由意志で社會の爲に社會に一致結合して運動して居るのである、中には泥棒の如き社會に在て社會に反對の運動をして居る者もある、それで忠實なる者は社會に對して反抗し得るけれども、それは忠義の爲になさぬのである、是の如くして始めて忠實なる社會の一員と云ふ事が云へます、止むを得ずして只だ社會に連なつて居るものは社會の一員とは云はれぬ、客員です、有機体の例で云へば寄生蟲寄生動物です、人間の身体に在つても蟲やいろ／＼の物があつて、我々の生命を害するです、社會にも有るです、然れども社會を成立する正員たる者は、すべて社會の爲に有意識的に、社會の目的を知覺して行く事が出来る、萬一間違ふと社會に對して謀反し得ることもある、是れ大に有機体と違ふ所である、社會は物質的基礎の上に立つて居る

所の精神的組織であると云ふ事は間違ない、有機体であるといふ事は、或る點は比喩として面白いが、事實に合はぬ事があります、

第七 社會物理

これから社會組織の一條件たる社會物理に移ります。前に云ふ通り、社會は物質的基礎の上に成立する所の精神的組織である、有機体と云ふ詞はまづ使はぬ、用ゐる人も用ゐざる人もあるが、概して有機体説は今日社會學者が排斥する傾向がある、今日社會學者で最も有名なる佛蘭西の「タールド」澳地利國の「クンプロウイツ」は、大に有機体説を排斥する學者である、概して有機体説を用ゐぬことは、今日の最も大なる社會學者の説としてよろしい、併し有機体と云ふ詞を、或る意味に於て用ゐる事は差支ないです、兎に角、社會が組織せらるゝや、物質的基礎に基いて、精神的に組織せらるゝものである事は、社會の本質であります、故に社會を研究するには、一方では社會物理と云ふて、即ち此の社會に關係ある所の物理と云ふ者が成立つ、又一方に於ては社會的心理學と云ふ様な者が成立つて、此の二つの者が完全しないと、社會學の完全を期する事は出来ない、で、「コント」は、前に云ふ通り、社會全部を社會物理と名けて居るが、尤も社會物理と云ふ名は、社會の基礎たる所の物質的條件、社會組織の基礎となつて居る、物質的條件に関する研究、即ち此れは、重もに人口に関する所の部分である、おもに「スタチスチック」で研究の出来る部分は、社會物理と名を付けて然るべき者である、而して外界は此の人口の上に非常に影響をなす、其の原則其の有様を研究するは即ち

此の社會物理である、

委しい事は時間もない故述べる譯にはいれないが、兎に角、社會組織の物質的要素を、分かり易く云へば人口と云ふ事になる、人口がなければ社會は組織さるゝものではない、而して人口の大小に依つて社會組織の大小が定まる、而して其の人口の大小は、種々なる物質界の状態に依て、一言で云へば、まづ食物の多少に依つて人口の大小がきまるのです、食物の供給の澤山ある所には、人口が澤山出来る事で、社會組織の性質は餘程人口に關します、ツマリ大いなる社會、發達したる社會を組織するには、大いなる人口を要します、僅かの人口では大いなる發達したる社會、高尙なる社會は出来ない、小さい社會でも高尙な社會は出来さうですけれども、人口が少くしては、高尙なる發達したる社會は成立たぬ、只だ人口が多いただけでよいとは云へない、けれども少くしては、いけない、ソコで古代の「アリストートル」は國家をなす所の人口の定限を云ふて居る、尤も今日には當て符まらぬが、希臘の古代の標準では、十人以下では國家は成立たぬ、又「アリストートル」の意味では十萬人以上の國家は成立たぬと云ふて居る、此れは希臘と云ふ國は、風變はりの國で、地中海の圍はりの諸國は皆な一の市府を國家として居る、市府的國家は、古代の希臘の國家である、日本の國家若くは近世の國家とは趣きがちがふ、近世の人口の標準では「アリストートル」の標準は用ひられぬが、兎に角、社會の完全したるもの、國家と云ふ社會を成立せしむるには、或る程度の人口を要する、餘り多くても、餘り少くなくても、いけない、今日では何千萬の人口があつて國家になるが、併し、ハリ制限がある、

今日といへども、四億五億の人口を有して居る國家は非常に不完全で、支那印度魯西亞の如きは不完全である、夫れならばと云ふて餘り小さい國は今日成立しない、兎に角、時勢に隨つて完全なる社會を成立するには、或る標準があるので、大概な處で組織する必要があるので、ツマリ人口が餘り少ないと生産する食物が少くない、それ故食物は少なく自然と社會の勢力が薄いと云ふ事になつて来る、人口の少ない處では大いなる農業も發達せず、大仕掛の製造業も出来ない、僅かの人民の間には、餘り分業法は行はれない、隨つて、産業組織は至つて不完全である、小さい社會は、大いなる社會程に社會的活動が出来ないから、國家は成立たぬ、最下等の野蠻人社會は二十五人乃至百人までで成立つて居る、サウいふ僅かの人口僅かの社會では國家は今日成立たぬ、凡そ文明制度は皆な人口稠密の處に發達します、政治的活動の如き、或は文學的活動の如き、或は種々なる理學上の發見と云ふ事は皆な澤山の人民があつて、互に意見を戦はし或は互に相競争する作用の結果である故、人口が少くしては智識は進まない、即ち社會的活動は進まない、市府は古代の文化の中心である、希臘の如きは前に云ふ通り市府が國家になつて居る、今日でも歐洲列國日本でも同じ事、文化の中心點は都會である、此の都會から新思想が起り、凡べて都會より、社會の運動が始まる、都會は田舎の人よりも智識が進み、いろ／＼の工夫をします、凡べて近世の文明は都會を中心として居る、都會は多くの人民が集まり、互に競争し互に切磋琢磨して行く結果、學校の如き、或は會堂の如き、或は大新聞の如き圖書館博物館と云ふ様な物は、皆人口稠密の處に成立つて居る、

人口と食
物

人口はまづ第一の條件ですが、其の人口の成長發達するや、最も食物の供給による、殊に人口の上には經濟上の條件が最も影響します、統計學に依ると結婚出産死亡の割合は、餘程經濟上の狀況に依る、經濟上の狀況に依つて直ぐに結婚の數、出産の數が影響せらるゝと云ふ、此の點は重きに「スタチスチック」の調べてあるが、歴史的に申すと、最初人口は天然の恩恵に依頼するものです、まづ自然に食物が生じ、澤山食物のある處でなければ、人口の發達を期する事は出來ない、人間は初めから農業を知つて居る譯ではない、皆な經驗に依つて學ぶのである、故に埃及國の如き今日に至るも「ナイル」と云ふ河があり、其れが國中に溢れて肥料となり、鋤をも加へず耕やす事も要せず、只だ種子を蒔けば生へると云ふが埃及國の狀態で夫れは古代文明の最も古い處である

其の次には西亞細亞の「カルデア」と云ふ地方も、今に麥が自然に生長する所で、西亞細亞に於て文明の始まつた處です、多分は支那の文明も「カルデア」の方から東漸したと思ふ、それから印度の「ガンヂス」地方それから支那になると楊子江黄河と云ふ地方は何れも河流に沿ふて印度及び支那文明の起原地である、即ち人間最初の社會と云ふ者は、天然の恩恵に依るものです、さればと云ふて、熱帯地方の様に働かぬても自然に食物があり何にもせず、飢ゆれば直ぐに山に入り、菓實を食ふて生活が出来る様では又た發達しない、多少勞力を要すると、報酬が澤山あると云ふ境遇が人口の始めて繁殖する状態です、それ故最初は歐羅巴には人口は繁殖しない、文明は發達しない、ア、云ふ寒い處で緯度で見ると日本の北海道地方に當る奥州以北で

す、今日歐羅巴と云ふ國の緯度を考へて見ると餘程北の方にある、歐羅巴は潮流の工合で北海道程寒くない緯度から云ふと、南伊太利は仙臺あたりに符合する、倫敦になると北海道の餘程北に當る、西歐羅巴は暖い潮流が流れて行く故氣候が比較的に温暖である、歐羅巴は最初から大なる人口と、文明が發達する譯にはいかない、此れは他の地方で天然に富んだ國で文明が出來た後、歐羅巴が開くる理由がある、最初からは歐羅巴は開けぬ理由がある、西亞細亞の方は早く開けて、進まぬのは重きに天然の恩恵に依頼して居る故である、或る程度迄は進んでそれから先きは進まぬ、それには人力を要する、又寒い處又生存競争の激烈なる刺激を要する、西亞細亞の文明は、歐羅巴に行つて歐羅巴人がそれを採用するに至つて氣候が寒いから勉強して維持しなければ、天然の恩恵に依頼する事が出來ないと云ふ状態によりて、それから文明が絶へず進んで行くやうになつた、歐羅巴人は勉強に依つて文明を維持して居る、其の文明を維持する所以は即ち其文明を進むる所以である、西亞細亞では天然の恩恵に依つて發達した故、文明を維持するに就ては苦痛を要せぬ、それ故或る點までは進んでそれから進めと云ふ結果を生じて居る、別に人種の優劣で西亞細亞と歐羅巴との進歩不進歩を論ずる必要はない、多少人種の優劣はあるが、人間としては前に云ふ通り、殆んど平等である、能力は平等とは云へないけれども、天性は平等で、人間は生れ乍らにして教育も何もなければ、皆な野蠻人である、夫れは文明國の小兒を見ても知れる、奇麗なことも、キタナイことも知らぬ、すべての小兒は皆野蠻人である、成る程詩や歌で謡ふて小兒の美妙なる處を云ふが、それは詩歌的想像で、小兒自身の天性は却々殘酷の所も

ある、即ち野蠻人である社會は野蠻の境遇より文明の境遇に進んだと云ふ事實があるのみならず、現に歐米日本支那等文明國の各個人は一代の間に野蠻から文明の點まで進むのである、夫れ故歐米文明の優劣を論ずる時に天性の優劣があると云ふ歸結にはならぬ、多少能力は各國の民族に依つて優劣がある、個人に天才の差がある通り餘程其能力に差があるが、天性は平等である

最初社會に及ぼす物理上の影響は直接である、今日は餘程間接になつて居る、今日我々の見る所では天然の恩恵に依つて生活して居ることよりも、社會の恩恵に依る事は著しく見えるのである、日本や歐米の富は勞力に依つて蓄積したる富である、祖先以來の蓄積の餘澤によつて居る、天然の恩恵は餘程間接になつて來る、天然の恩恵はいつも必要であり、いつもなくなるものではないが、文明の進むに従つて其の影響は間接になつて、多くは人間の勞力を通ふして働く様になる、併しどこ迄影響を及ぼす者であるか、物質界は、社會に、ドウ云ふ影響をなしつゝあるか、研究が今に少しく明白になれば、多くの點に於て知識を得る事が出來ると思ひます、

食物と男

まづ人口の上に食物の影響する事は明白であるが、次に食物の營養如何は、人命の性質に影響するものである、只だ人命の性質に影響する計りでない、人口の性質にも兼ねて影響する、男女と分かるゝことは大に食物の營養如何に關係する、此は「スタチスチック」の研究で分つて居る、何故に同じ腹から男女が生れるか、何故に同じ家から男が多く生れたり女が多く生れたりするか、今日では實際詳かには分からぬけれども、食物

の營養如何んは男女の差別を生ずる影響のある事が分かる、獨逸の「サクソニー」の統計に依つて見ますと、千八百四十七年から千八百四十九年まで非常に食物が賤貴した事があつた、其の時の影響を調べた學者の説に依ると、不思議な事には「サクソニー」の土地の高い處に近づく程男子の出産が多く低い土地には女子が多く生れた、ソウ云ふ經驗から「ダン」〜と研究して見ると食物の營養如何による事が分かる、即ち高地に生活する人民は鹿食をなし、平原の地に居る人民は食物が豊かである、その豊かなる所に限つて女子の出産が多い、それと同じ例で、都會と田舎の比較を取つて見ると、都會の方が女子の出産が多い、ソウ云ふ都會の方は食物の營養が豊かであると云ふ理由に依る、田舎は多く鹿食するを以て男子が多いと云ふ事になる、ソウ云ふ魯西國全軀の例で云ふと、何處が一番男子の出産が多いかと云ふに、女子よりも男子の出産する所は、田舎が第一である、それから都會首府「ベルリン」になると最も女子の出産が多い、それで戦争の時、飢饉の時、又新たなる土地に移住する時には、男子が多く生れる事は事實である、夫れから又た富家に於ては貧家に於けるよりも女子が多い、すべて今日我國の華族社會でも婿一人に嫁八人と云ふ様な譯で華族社會の一大問題になつて居る、此れは、いろいろの理由があるが、概して今申した事實で、統計學者の説によると營養が餘程豊かであると女子が生れる様です、それは、ドウ云ふ譯か知らぬが、ソウ云ふ女子の身軀は美妙で、男子は鹿食である故、鹿食なる食物にても男子は多く生れ、女子は優美である故豊かな食物でなければならぬのであらう、此れは只だ統計學上の推論である、されば始終男子の方が多く生るゝ理由か

分る、實際生るゝ時の割合は男子が多い、或る人は、男女の人口は同じであると云ふが、それは生るゝ時は女子よりも男子が多く生れるが、男子の方は多く激變に會ふて死亡するのが多い、殊に文明國では男子は移住する故、實際女子が多くなつて居る亞米利加を除くの外、歐洲諸國は女子の數の方が多し、日本は男子が多い、尤も或る地方では移住の結果で京都地方其他熊本などは女の人口が多い、是の如く地方に依つて女子の超過して居る例がある、今後國外に移住が始まると、女が多くなつて男子が少なくなる事と思ひます

食物の次に人口の上に影響するものは地勢氣候であります、

地勢の人口に影響する事は、地理學に明白である故略して置きます、

氣候の影響

氣候が人口に影響する事も最も面白い問題で、近頃ダン／＼と研究の結果が分かつて居る、氣候の工合で成長發達の速力を異にする事は明白である、夏は最も物の成長する時です、春より夏にかけて非常に植物が成長しますが、動物の成長も、ヤ、ハ、リ、暑む時の方が能く成長すると云ふ事實である、日本人では著しく分かれぬが、歐羅巴の北の方の國、瑞典あたりで學校の小兒に於て試験した結果に依ると、夏は多く成長發達します、十一月の末より三月の末までは、小學校の小兒の成長が僅であるが、四月より十一月迄は非常に體量の増加がある、冬に比較すると三倍程體量が増すといふことである、此れは氣候の影響です、ソ、レ、から人口の性質に氣候の關係する事は、昔しより歐羅巴人の注意したことであります、歐羅巴の南に居る人は、餘程感

情的で北の方に居る者は氣候が寒いからかツツとして沈着である、南部の歐羅巴人に限つて非常に激動し易い、それは歐羅巴人一般認識して居る事實である、亞米利加も、ソ、ウ、です北米合衆國は實質に共和して居る、南亞米利加になると始終革命がある、尤も氣候ばかりの譯ではない、人口の性質が雜駁である故ですけれども、まづ中央亞米利加南亞米利加と云へば、始終政變革命が頻繁に起つて居る、西班牙或は伊太利の人民は、兎角、激動し易い、歐羅巴で暗殺する人間は多くは伊太利人である、

それから同じ社會に於きましても、氣候の影響が人口の活動上に影響する證據には、英米佛等の經驗に依ると、春より夏にかけては、神經病者或は自殺者が多い或は監獄癡狂院に居る人は夏が一番御し悪く、監督者の困難する時期は、春より夏にかけての間であるといふ風で、氣候が餘程人口の成長發達人口の活動に影響を及ぼすと云ふ事は事實である、最も著しきは、前に云通り赤道直下に居る人民は、労働の習慣が成立たず、熱くて寐て居つて、ヒ、モ、ツ、ク、なれば山に入り菓實を食ふと云ふだけである、又極北の地になると收縮して仕舞ふ、此も及人口發達の害になる、ソ、コ、で中帯は労働及び協力の必要ある處で、赤道直下は労働せぬでも生活が出来る故他人と協力すると云ふ必要も何にもない、極北では天然と競争することが第一の要件で、社會的競争と云ふ者は起らぬ、極北の地、極熱の地は社會組織を成立するには、不都合です、中帯の地は労働を要する、其結果協力があるから社會は、中帯の地に於て最も成長發達して居る、此れ皆な氣候の影響であります、

人口と最
少抵抗の
線路

それから、人口の活動も、ヤ、ハリ物理の原則に従ふもので、或る意味では物理法に依つて、活動すると云ふ事が出来る、物質は抵抗の少ない方面に向つて運動する、それで物体が地に落ちるのは、引力の強き方に落ちるのである、蒸氣力の如きは、引力には関係しない、前後左右、ド、ツ、チにても行く、蒸氣力の運動は前後に動く、兎に角抵抗の少ない方面に向つて動く、水の低きに流れるのも同様です、ソ、コ、デ人口の成長發達して運動する有様も、ヤ、ハリ抵抗の少ない所に行くのです、古代の文明社會に自然に下流に沿ふて居る平原に於て多くの人民が集まる、即ち人口の活動は食物の容易く得らるゝ處、交通の便宜なる處、人口の活動に障礙の最も少ない方面に従て行く者であると云ふ證據です、それから人民の性質も夫れに依つて定まる、前に云ふ通り地勢や何かと同じ事で、かの海濱に居る人民は、漁業に従事して生活するのは、矢張り抵抗の少ないからである、平原に於ける人民は農業をなし、高原に於ける人民は牧業をなす、即ち亞細亞の内地、亞刺比亞の内地の如き高原の人民が古來牧業に従事するに抵抗が少ないからである、人口は皆その抵抗のない處に向つて成長し活動の性質も之によりて定まる事が分かります、斯云ふ事は、物理法と同じである、

律動の原
則

モ、ウ、一とつ人口の活動に就て物質の運動と同じことがある、凡て物の運動は一直線に行く者ではない、抵抗がありますからして、多少螺旋線をなすものです、風が吹くと云ふても、いつでも強い風が打ち續けて吹くものではない、非常に吹いて来て又止みます、其處には、呼吸がある、水の動くのも同じ、始終一直線に動くものではない、波動的になると云ふのが物の運動の原則である、既に物質の運動は波動的である、即ち律

動的である、物の勢力の平均せずして互に衝突する時は必ず波動的になるものである、凡て二つの勢力が相戦ふ時には、一方は攻撃し一方は抵抗するから、自然と波動的になり原動と反動と一進一退するのである、今ま社會人口の活動にも間斷がある、一直線に活動する事は物理の原則に依つて出来ない、社會が進歩すると云ふても進歩のみあるのではない、社會は凡ての事に於て間斷なく、年々歳々進歩する様に思ふ人があるが、夫れは實際上出来ない、物理上の基礎を持って居る社會である間は、ドウしても波動的にしか活動することは出来ない、其の一つの原因を云ふと、第一の基礎たる食物は年々歳々平等に能く出来る者ではない、ドンナ豊かな土地と雖も不作と云ふことがある、或は水が多いとか少ないとか、雨の分量に過不足がある、或は暴風が吹く或は虫害があるなど、農作の年々同じ様に行かない理由がある、此の食物に依頼する社會の活動も、或時は繁昌し或時は疲弊すると云ふ事は、自然の結果である、經驗上に於て景氣不景氣のあるは、或る意味では自然の結果である、此を人為的に免るゝ事は或は出来るけれども、豫め景氣不景氣のある事に對して豫て覺悟しなければならぬ、物價騰貴して商工業一時繁昌するも亦その次には下落の時代がある、物價が騰貴すれば輸入が殖えて輸出が少なくなり、自然と多くなつた所の金が外へ出て行くことになる、ソ、コ、デ物價が下落する、戰爭中に償金などを取つた結果は非常に物價が騰貴し、其の後又た下落すると云ふのは自然の數である、此の原則は、精神界にまで及ぶものである人間の精神が、肉體を基礎として居る以上は、そこまで及びます、始終戦争ばかり續つく事はない、戦争の後には平和がある、進歩の中には革命となり、

又反動となることがあつて一進一退始終律動的に行くものです、それ故社會に處して行くには始終進歩ばかり望むは、非常の間違ひです、社會が進歩若くは失敗するのは悲しいに違ひないけれども、乍併始終成功ばかりして行く事は出来ない、時に依つては失敗もあり、困難も来る、其失敗に對し困難に打勝つて、ダ、ン、と進むので、ツ、マ、リ社會の活動は波動的に行く事を平素覺悟しなければならぬ、覺悟して居れば、如何なる變動に遇ふても害悪は少ない、此の原則は一個人の上で考へても同じ事で常に成功のみといふ譯にはいかない、種々困難した結果立身すると云ふ様に、社會の進歩も始終困難を経なければならぬものであるから、それに對して平素に覺悟を致すのが必要である、ソ、コ、デ此の律動的な作用と云ふ者は、自然に任かして置くと、其の變動が甚だしく非常な害悪を蒙るに至る事がある、自然に任かして置くと極端に走つて其の進歩する場合は一度に非常に進歩し、ソ、コ、デ又反動の結果で揺り戻され、社會の進歩が非常に遅くなる、それ故自然に任かして置くと社會の困難は極度まで行く故、ソ、コ、デ革命といふ事になる、自然に放任して置く事は社會の爲めに能くない此れ即ち、社會は有機體でない證據です、全く有機體であるなら「スベンサー」の説の如く社會に干渉する事はよくない、自由放任主義になる、即ち有機體説を主張すると放任になるが私は、有機體説は只た喩にするだけで自然に放任して置く事はいけない、社會の進歩は社會の智識で導て行かなければならぬと思ふ、若し自然に任かせて置くと社會の困難は極端に達し、いつも安全に進歩する事は出来ない、佛蘭西の革命は貴族等が非常に改革を反對した結果である、それで社會が非常に理想通りに進んだ様である

けれども、又跡戻りして拿破崙の専制政治となり、革命の結果揺り戻されて今日の様に佛蘭西國は歐羅巴に於て覇權を握る事が出来ない、斯の如く捨て、置くのは、ツ、マ、リ社會の進歩が遅くなるのですから、成丈此の社會の智識を進め社會の公共心を發達して而して律動的な作用の弊害を少なくせんければならぬ、人間は智慧のある動物である故、反對革命の勢力を極端に至らしめない様にするのが必要です、

第八 社會心理

今度は社會組織第二の條件たる社會心理を述べます。前には人口の事を申しましたが此度は社會組織の最も重要な條件たる社會精神と云ふ者は、如何なる者であるか、唯人口ばかり有ても、未だ社會とは云はれません、人と人との間に、同情もなく何にも關係のない人間が集まつたのみでは、未だ社會は成立ぬ、ツ、マ、リ人口は社會の要素であると云ふだけです、其人口の中にそれ／＼精神的組織が成立して、始て社會と云者が出來ます、社會の組織は全く無形なるものです、社會に一定の外形なしと云ふは即ち社會の組織が無形である故です、ツ、マ、リ人と人との關係には、種々なる生理上の基礎がある、即ち親子の縁とか、或は男女の關係とか云ふ者が有ります、されど、其れは只其の基礎となる所の生理的要素であつて、其の基礎に基いて、一の精神的組織が成立たなければ、社會とは云はれません、家族にしても、只男女の關係を通じ子を生んだだけでは、恰んど動物と状態が同じである、けれども人間の間には、自然と夫婦の倫と云ふ様な、無形の者が出来る、即ち家族の間には夫婦の愛情とか、或は親子の義務責任と云者が成立て来る故、家族と稱することが出来る、

社會は精神的組織なり

る、最も家族の組織の如きは、生理上の基礎に基いて居る、或學者は是は社會の基礎であるけれども社會とは云はれぬと云ふ人もあります、然れども私は家族は社會と云ふ事が出来ると云ふのは、其の生理的基礎の上に、精神的組織が成立して居るからである、即ち家族は尤も單純なる社會であると云ふ事が出来ます、ソコデ、或人は家族を以て社會の單位と云ひます、成程或意味に於て家族は社會の單位、殊に文明社會の單位である、文明の社會は家族を以て根本となし單位として居るものです、家族相合して、而して文明の社會を成して居るは、今日社會の通則である、現在の社會的狀態に就て云へば、家族は、社會の最も單純なるもので、根本になる所のものです、唯男女の關係親子の關係と云ふだけでは、未だ社會にはならぬ、他の動物にもそれだけの關係は成立して居る、然らば、ドー云ふ精神作用が社會組織の根本的作用になるかを研究するのが問題であります、ドーして二箇若しくは二箇以上の精神が、互につながつて關係を通じてくるかが問題で其の機會となるものは、第一男女相慕ふ所の天性である、是は自然に有る所の天性で、孤立して其の目的を達せられぬ所のものである、人間は孤立すると、一人前の人間となる事は出来ない、不具者である、ドーしても男女相慕ふ事は自然の情であります、又親子の關係と云ふ事が、自然成立してくる、前に云ふ通り、唯だ生理上の關係、若しくは動物の天性に本いた結果だけでは未だ社會とは云はれぬ、「ギッチングス」も家族は男女及男女の間から出来た子供しか含まぬのだから、家族とは社會と稱するに足らぬと云ふて居る、家族以外の者も家族の中に這入て来るやうになり、即ち下男と下女とか云ふ様な者が這入て一家族の中

に異分子が入り来れば、それは社會と云事が出来ると云て居るが、即ち多少有機的作用、或は單に親子の關係と云ふ關係以上の者が密接に成立てこないと社會とは云はれぬ、即ち家族以外に膨脹して、家族以上の關係を組織する事が出来るには、家族の中に家族以上に膨脹してゆく所の元素たる精神的要素がなければならぬ、

社會學者
の諸説

其根本的作用は何かと云ふに、社會學上の定説は未だ十分確かでない、或人は生存競争を以て土臺とするのである、自然と團體が出来てくる、ソ、しますと、團體と團體との衝突が起り、競争が起りて一の團體が、他の團體と衝突する際、ダ、と結合同化する事になる、即ち社會學の根本的問題は、團體の競争であると云ふは埃太利の社會學者「グンプロウイチ」の説です、ツマリ異種類の團體が衝突し、而して結合し、ダ、と同一化してゆくと云ふが、社會の状態であると云のです、コ、云ふ人は惟ふに競争と云事は、先づ社會學の根本的要素と論ずるのです、又或人は、人と人との關係は所謂一種の接觸である、一種の交接である、自然と人と人との間に接觸交接した結果、必ず契約を結ぶ様に成てくる、人と人との關係は、契約の關係である、社會の進歩は、契約の進歩である、契約は社會組織の要素である、是は「ベルギー」の社會學者で「デ、グレンフ」の説である、又た佛國の「チュルケーン」の社會學說に依ると社會組織の要素と成る者は、一種の壓迫である、多數の人間が相集まる結果、多數の思想多數の感情多數の習慣が積集してくと、一個人の精神上に非常なる勢力を以て壓迫する様になる、即ち社會は一種の壓迫である、其一種の壓迫に對し

て個人が服従することは、社會組織の根本的要素であると云ふのであります。社會は、*ドール*しても一種の壓迫です。個人は其壓迫に對して服従する事になり、それで社會的秩序が成立ち、種々なる制度が成立てくる、それから佛國の「*タールド*」の原則は、模倣と云ふ事で人と人との根本的精神作用であると云ふのです、人と人との關係は、*ドール*して出来るかと云ふに、其根底を穿つと、一人が他人を眞似するに外ならぬ、眞似する事がある故、始めて社會が組織せらるゝのであります。殆んど社會萬般の現象は、此の模倣の原則で説明する事が出来ます、即ち今日我々が用ゆる所の語は何かと云ふに、是れは祖先以來學んだるもの即ち眞似で得有したるものである、即ち言葉は、模倣の結果で得た所のものである、又我々が今日爲す所の道德行爲は、何にかと云ふに、此模倣の結果によりて教へられたる所の事を、又繰り返すのである、それで人間の思想人間の行爲、凡べて其根本は模倣に外ならぬ、新發明は模倣の變化した者である、人は、無より有を生ずる事は出来ない、即ち蒸氣船の發明は即ち眞似である、模倣の結果である、で、蒸氣船の出来る前に、一方には船あり、一方には蒸氣機關が發明されて居る、即ち船は昔より有り、蒸氣機關は十八世紀の後半期に於て發明せられたので、ツマリ蒸氣船は其二ツを結合しただけのことである、其れを蒸氣船の發明と云ふのであるが、實は模倣の變化したのである、只眞似する間に多少、*ソコ*に考へ付いて工夫を廻らすのが新發明になるのである、又鐵道の發明の如き、是も原因があるので、第一蒸氣機關があり、次に車があり、それからレールを敷きて其上に車を推せば速いと云ふことは元より分つて居る、此の三の原素を別々に眞似せず、一處に

眞似て、三つを結合したのが、鐵道蒸氣車の發明と云ふ事になる、それから今日の文明を考へて見るとこれまた模倣に外ならぬのである、今日歐米の文明を分析すれば、希臘の文明を眞似して居る、今日哲學法律科學等は古代の學問より來て居る、即ち哲學科學は希臘より來て居る、文學美術も希臘より來て居る、法律は羅馬より來て居る、宗教は西洋であると猶太から來て居る、之を東洋と云ふと、從來は印度支那の文明を眞似て居る、宗教は即ち佛敎儒敎を眞似する間に、少しく混合し、或は變形せしむるだけである、然らば將來の文明は、*ドール*かと云ふに東洋と西洋の文明を眞似し西洋は東洋の文明を模倣する事に成て、一種の新文明が將來出来るであらふ、是れも模倣の原則で説明せらるゝのである、「*タールド*」は、すべての社會的現象を模倣の原則で説いたのである、それから米國の「*ギッチングス*」と云ふ人は模倣の法則は、社會現象を説明するに有力な法則であるけれども、まだそれでは、*チト*不足であると云て同類の意識と云ふ事か社會組織の精神的根本であると云ひました、即ち二個の人類が相互に仲間となりて相知り合ひ、而して互に同情をもつ様になると、仲間である同類であると云ふ意識が成立て、*ソコ*始めて社會に成て種々の組織が出来る様になると云ふのです、即ち此の同類の意識が根本であると云ふ説です、斯様に社會學者は、皆根本が定て居ない、すべて他の科學では根本の原則だけは一致して居る物理學にしますと、必らず引力の法則とか、何とか云ふ様な事は、一般物質の作用の中の根本であると云ひ、化學であると、元素と元素と抱合する所の作用が根本的作用として認められて居るが、人間社會の事は一般密接して居るのみな

らず、又内情を探る事が出来る、外の者は客観的でないと分らぬので客観的觀察しか出来ない、即ち酸素と水素と化合して水となると云ふ事が客観的に觀察せられる、然しながら化合するときは、酸素と水素との心もちはドーであるか、少しも分らぬので、人間の方より推察する譯にはいかぬ、草木は生長發達して花を開き實を結ぶ事は客観的に分るので、即ち一の目的に向て進む様であるが草木の意如何と云ふ事になると分らぬ、人間以外の事は客観的側面しか分らぬ、人間社會の事は自分の精神作用の結果なる故、實は主観的側面迄も分るので、歴史と他の學問とは違ふが、歴史に依ては客観的事實を證明すると同時に主観的側面も證明する事が出来ます、例せば家康が天下を統一したと云ふ事に就いては、家康の意はドーであつたか分かる、或は楠正成が忠義を爲した事も分ります、客観的事實ばかりでなく、主観的事實までも分るので、人間社會の事は余程明白でなければならぬ筈である、ですが却て吾々は燈臺下暗して社會の根本作用が十分に解釋せられて居りませぬ、彼の太陽の運行や、日蝕や、月蝕の事は、昔から支那でも豫言する事となりて居るが、人間社會の事は明日の事でも豫言は出来ない、ソマリ、社會の事は複雑で余程考へても、却々分りにくい、今の社會の根本的作用は何にかと云に社會が組織せられる根本的作用如何と云ふ事に付て社會學者は一致しない、即ち「ギッチングス」は「タールド」の説を駁し「タルド」は「デュルケイン」の説を駁し「デュルケイン」は「タールド」の説を駁すと云ふ様に成て居る、而して是等の學者の説は社會組織の原則の一部分を見て居る様に思れます、

模倣の原則

私は以上の諸説を綜合して社會組織に至る精神作用の順序を云ひますと、第一模倣を思ひます、先づ「タルド」の模倣の原則は、根本的作用に近い、其模倣の中「デュルケイン」の壓迫も入れなければならぬ、模倣の客観的側面は「デュルケイン」の壓迫と思ひます、即ち外より壓迫して來るけれども、又た、自然と内より眞似する性質が有ります、猿の如きは尤も眞似する動物で有ります、人間の天性も、大概他人のする事を眞似する様です、其の際に自然に同情を表すると云ふ事になるのです、是れは心理學（サイコロギー）の問題である、即ち社會心理學の問題である、夫れ人は一の感覺が起ると、直に其感覺を實行する傾向がある、一の思想が腦中に浮ぶと直に其思想を實行すると云ふことは心理學の原則である、例せば花が見へると、外に何の感覺もないと、小兒は、モウ直にそれを取ると云ふ事になる、又若し茲に水があると云ふと、直に呑むと云ふ事になる、即ち感覺思想は、直に實行に到るの傾向を有つて居る、是れは人間の天性です、梅と云ふものを考へると直に唾が出ます、單に思想だけで梅を食たと同じ様になる、昔曹操は戰場に於て梅林ありと叫んで兵卒の、渴を止めたと云事があるが、即ち思想が起ると、其思想に伴つて作用が起る、梅と云ふ觀念が起ると、酸いと云ふ考へが起る故、忽ち唾を發して渴を止める事になる、斯の如くして一人の行爲は自然に刺激となりて其の行爲を人から人に傳染せしむる傾きがある、演說會で、聽衆の或者が手を打つと何つの間にか全會一致て手を打つ事になると同じことである、又數人談話して居る時に、夢中になつて居る時に一人が茶を呑めば他の者も茶を呑み、一人が煙草を吸へば他の者も皆煙草を吸ふ事になる、又一人の者が欠伸をすれば、他

の者も欠伸をする事がある、是は人間の天性に模倣の原則があるからである、心理上思想及び觀念は直ちに運動神系を動かす力が有る、普通は意思の力を以て之を抑ゆる故に、直に其思想や感情が直に實行せらるゝに至らぬ、元より思想はあるけれども、是は實行していけないと云ふ他の思想があると、實行する迄には至らない、例せば非常に腹ると云ふ感情が起ると自然と手が動き、イッの間にか人を打撃する事になる、然し他の思想が起り、ドゥモ、是は義務に反するとか、不道徳であるとか云考へがあると、縦ひ腹念を發したにもせよ、人を打撃しないで済む事になる、大概一の思想が腦中に起ると運動神系に感動を傳へるものです、ソウ云ふ性質ですから意思の作用に依て、一の觀念を他の觀念が制すると云ふ事で、漸く社會が無事に行くのです、人が皆自分の腦中に浮かんだ事を悉く實行することになると、社會が亂秩序に成る、尤もソコハ、社會の制裁種々の組織有て、制する様に成て居るけれども、棄てて置く人間は感覺のある方に走て仕舞ふ、子供の如き自ら制する力がない、故に花を見ると花の方に行き、蝶を見ると蝶の方に行き、或は水があれば水に入ると云ふ様に、遂には停止する所はない、自ら制する作用がないとソウなります、先づ多くの人が集ると第一模倣と云ふことを原則としてよからうと思ひます、

同情の原則

しからば模倣だけで、社會が組織されるかと云ふに、模倣は本能的である、無意識に出来る者です、最初の模倣は無意識的であるが、其次に模倣して來ると自然に同情が起ると思ひます、私は同類の意識とは云はぬ同類と云ふは抽象的である、同類の意識と云ふは社會組織の結果として出来るけれども、社會組織の原因に

なると云ふ事は困難である、同類の意識と云ふは、單純な者でない、余程分拆を要するものである、同類と云ふ觀念は高尚で複雑です、社會組織の元則と云ふことは云へない、けれども同情と云ふは模倣と同様に單純な者です、或意味では生理的に起るものです、模倣と同情とは何れも單純な者です、「アダムスミス」は同情を明白に其の倫理説に論じて居る、私は其れを土臺として社會學の上に適用すると宜敷いと思ひます、同情は或意味では根本的で、自然に起るものです、眞似する作用が起ると自然に同情が一度に起る事になる、例せば一人が何にかして居ると、自然に無意識に模倣するのですが、其間には自然と同情が發するのです、其同情と云ふ事は、或意味では有機的に起る、例せば目の悪い人を見ると、自然に目が痛くなる、是れは有機的に同情が起ると云ふ者です、其れに就て「アダムスミス」の例に最も面白い例がある、藝人の綱渉りを見て居ると實に手に汗を握るコウ、云時には人間の精神は利己主義で働くものでない、自分が後に綱を渉る時に同情を表して貰はふと云考へも何にもない、而しながら其の危険な所を見ると、自分の手に汗を握りて共に同情を起す、此の同情は全く利己を離れて、自然に起るものであると論じて居る、模倣と同様に同情は自然に人間の精神に起るものと思ひます、只模倣だけでは社會的感情は起らない、自然と互に眞似し眞似する中に、同情が起り其れでダンクと同類と云ふ事を感じる様になると思ひます、眞似と云ふだけではよくない、敵の眞似をする事もある故、只眞似だけでは、社會を組織する事は出来ない、若し一人の者が握り拳を以て、向て來ればそれに対して此方も拳を以て打ツと云事では其れでは何時迄模倣して居ても社會は成立ぬ、然し

眞似は眞似です、又突然途中で面を打つ者があるとするれば何の爲に打ちしや分らないでも、此方でも、防禦の必要上眞似て手向ふ事になる、戦争は敵味方兩方眞似して居るので、上手にやつた方が勝つと云ふので、戦争も或意味では眞似です、一方に鐵砲や大砲を放てば此方からも眞似して鐵砲や大砲を放て始終眞似するが、然し夫れだけでは社會は成立ぬ、ソ、コに一の同情が起りて、是は同類であると云ふ意思が起らなければ社會組織は成立ぬと思ひます、て、先づ社會組織に至る根本的要素を云ふと第一摸倣第二同情是れは根本的の要素と思ひます、摸倣同情を相合して一の原則とする事が出来るかも知らんが、今日の所では、第一摸倣第二同情夫れより第三協力と云ふ事に成ると思ひます、これで組織的社會が出来る、

協の原則

摸倣同情だけでは單に主觀的社會しか成立ぬ、何にも一定の關係がない故、只同類であると云ふ意識が少し出来かゝつて居るまで、ある、ド、ッとして同じ仲間として同情を表する様になるかといふに、向にか外界の機會があるのです、猛獸にでも出逢うと、同じく其害を除かなければならぬ、或は敵がやつて来た時は自然と協力します、即ち摸倣同情より自然と協力となるのです、例せば、大水が出たと云ひ、或は火事であると云ふ場合に、社會の人は、直に火事の方にゆく、即ち一人がゆけば眞似してゆくと云ふ様に摸倣の原則でゆく、而して初めは只、ソ、ウ云ふ風で水や火を見物にゆく、ソ、コに摸倣及同情が有ります、所がダン、と火事或は大水が自然我が住所の方へ接近してくると、初めは摸倣同情だけで有た人間、即ち初めは見物に行きし所の者がダン、に自分の町内に火や水が逼つて来ると何つしか協力して居る、一人が水を運ぶとか一人が道具を

出すと云ふ風に、ダン、と協力する様になる、即ち摸倣同情の最後の結果は協力する様に成り、夫れから先は分業が行はれる様になる、協力は即ち分業の初めで、分業は協力の複雑なる形式をなしたものであります、凡べての事をなすに、例せば大きな家を造るには、互に協力して分業せなければならぬ様に成て来ます、ソ、コ、デ始めて社會が組織せらるゝ様になります、即ち社會心理の原則として第一が摸倣、第二が同情、第三が協力、其協力が永久になり、分業が起り、夫れが又永久になれば社會組織が永久に成て来る、是だけは原則として動かす可からざるものであります、

原則の定式

摸倣の原則に就てはター、ルドの定説があります、即ち平等なる團體に在ては、其中に一の摸倣が生ずると等比級數の順序に依て蔓延するのである、社會が平等同類の團體であると、其團體中に生ずる新摸倣は非常な速力を以て團體中に蔓延するのである、(此等比級數と云ふ事は例せば二から四、四から八、八から十六、十六から三十二と云ふ比例によつて進むのです、又等差級數と云ふ事があるが夫れは二から四、四から六、六から八、八から十と云ふ同一の差によりて進むのです)摸倣の速力は早いです、實に流行の速力なる事を考へて見ると、此原則は余程當りて居ると思ひます、それで平等な團體であると、新摸倣即ち一の手本を誰か一人出すと其手本に二人摸倣するものがありましよう其の二人に又各々二人宛の摸倣者があると早や四人の摸倣者を出し其四人に又二人宛の摸倣者があつて爰に八人となり、又其次に十六人となります、其は平等な團體でなければならぬ、例せば此中に演説をする者がありて或人が手を打つて喝采する時に、其演説の能く分

らぬ人が澤山あると、ソウ云ふ譯にはゆかない、中には言葉の分らぬ西洋人がありて、通辯した後に手を打つ
 とになるとすれば大勢の手を打つ時の間には違はぬ、斯様に異分子が居ると、模倣の法則が餘程遅くなる、
 民族が平等で開化の度が同じく、知識の度が同じと云ふ様な人間の間には思想が速かに蔓延する、演説者が
 演説を聞く人と餘り知識の程度が違ふと同じ民族であつても、精神思想が似て居らぬ故、半分は分らぬと云
 ふ風であるから、ソウ云ふ社會では一の模範が出て、其模範は或部分の有志の間には蔓延しない事にな
 る、幸にして日本は民族も平等で力も餘程付て居り、普通教育は徳川時代には不足であつたけれども、ハ
 各藩には學校を設け、又平民の間には寺子屋がありて多少普通教育をして居たので、平民士族等の區別は有
 たけれども、日本の社會は先づ民族平等で、且知識が餘程平等に行涉て居た故、早速の間に、開國の思想と
 云ふもの一般に蔓延して四五十年ならずして盛大を見る様になつた、非常な速力である、支那はソウはゆか
 ない、人種が多くて蔓延するにも四億と云ふ人民になると容易でない、殊に四億の人民中には言葉が違ひ東
 西南北と離れては、中には民族が大に違ふと云ふ風ですから、四五十年では進歩することが出来ない、人口
 が日本の人口より多く民族が多いだけ遅くなるは自然である、且つ人民は多少不平等の者であるか
 ら模範が平等には傳播しない、それ故途中に於て屈折する、同じ人民の間にも多少東京から流行することも
 上方邊にゆく風が變つて居ると云ふ事になる、同じ佛教でも印度より支那に傳はり日本に來ると、其土地
 の境遇に依て變遷屈曲する、同じ基督教でも埃及にゆき羅馬にゆき希臘にゆくと、其國に依て模範が變はる

ので、少し性質の違ふ人民から他の人民に移る際に屈折變化します、

次に同情の原則の定式を申します、同情の原則は少し模倣の原則と違ひます、模範は模倣者が多いだけそれ
 だけ勢力を増加するものである、即ち一人が真似すれば二人が真似し、真似する人の多い程、傳播の功が強
 くなつてゆく、それで非常に個人に對して壓迫的勢力を及ぼします、多數の壓迫は、自然に模倣の間に起て
 來る、多數が真似すると云ふと余程獨立心がある人でなければ真似せすには居られぬと云ふ風である、同情
 はソウはゆかない、模倣は斯の如く非常に蔓延するが、同情は蔓延する間に薄くなるものであります、即ち
 同情の範圍は廣くなるに従て、其力を薄弱ならしむるものである、一家族の間であると、余程同情が篤い、
 すべて同情の範圍が狭いと、互に似依て居る所が多い故、夫れて同情は切なのである、同情は互に相知り、
 互に相同じ心に成て居る所から起るのですから、互に知る所が少く、互に心を同じくして居る點が少いと、同
 情は薄くなる、即ち人数が多いと相知りて心を同うする事が少くなる故、同情は薄い、同情は範圍が廣くな
 れば、なる程薄くなるのであるから、國民全體になると一地方の同士程には同情がないと云ふことになる、
 ダン、と範圍が廣くなると薄い、即ち一家族に對し、同郷人に對しては同情が篤いが、同國人になると少し
 薄くなる、同人種になると又薄くなる、それから世界、若しくは人類に對すると非常に薄くなる、けれども
 ダン、と人間が相知り相交るに従て、同情の範圍が廣くなる故、社會組織が膨脹する事になる、同情があ
 るとダン、と協力する事になりて進むのです、協力の原則の定式は單純なる協力と複雑なる協力との二種

あることである、後者は即ち分業の事であります。

是の如き根本的作用の結果、社會精神が出来、同類の意識が成り立つ様になります。

第九 社會組織

其れて前には心理上から社會的組織の根本となる精神作用の起りは、摸倣同情と云ふ事、其摸倣同情と云ふことが或場合に從て境遇に應じて、同心協力となる事を申しました、人間は自然と自分の周圍の外物に慣れて來る性質がある、又自分が常に經驗する所の外物殊に動物の舉動の如きは殊に人間が之を眞似する、又之に同情を表する性質がある、野蠻人の尤も快樂とする踊りなどは、何の踊りかと申すと眞似です、何の眞似かと云ふに、多くは獸類の舉動を眞似て居る、例せば濠太刺利亞の様な所になると、奇態な獸類がある、カンガルーと云つて、日本では之を袋鼠と云ふ、ソウ云ふ獸類の舉動を土人は眞似して踊り、多く子を抱いて飛て行く様な事をする、又た雷の眞似などをする事である、人間の性質は人ばかりを眞似するのではない、獸類或は自然の現象を眞似ると云ふ性質が有て、其れが段々發達すると、戦争の眞似とか、或は凡べて人間界に於ける事件の眞似をする、通常子供の遊は、父母其他大人のすることを眞似して居る、モ、一步同情の根據を進めて行くと、自己を愛する所の觀念が、己を愛するの力なき周圍の事物に移り心なきものまでが何となく可愛く成て來るのである、是が人間の天性です、自己は自己を愛する情がある隨て自己の周圍の事物まで愛らしく成て來る、

住めば都と云ふ諺があるが、初めて都會の人が田舎へ行くと云ふと是では住はれぬと思ふが、田舎に二日なり三日なり乃至一月二月たつ中には、第二の故郷と成て來る、私などは貧乏ですから度々穢ない家などに轉宅する事がある、轉宅すると私は一瞬神經質であるから、初めは何となく眠られぬと云ふ事がある、ソ、五日後過ぎ十日とたつ中には、ソ、が自然と愛らしく成て自分が安心して寐られる所の家と成ります、貴族の家に行くよりは縦へ穢ない所でもそれが住みよいと云ふ様になる、自己を愛する感情は、自己より自己以外に及ぶのである是は心理學的に分拆して見ると、社會的精神作用の起る根本と思ふ、ソ、自然と我周圍の者に愛が及ぶ、自己と云ふ觀念は身體は自己の一部分で殆んど足の爪先より頭の頂上に至る迄其一部分であるから大切である、我足を踏む者あれば我は怒を發して之を容赦せぬのである、ソ、云ふ様に自己の範圍は肉體の下部迄敏捷に及びます、次には其の自分と尤も血肉の關係ある家族、或は部落と云ふ様なものが出て來るが、自己に對する感情自分の家族全體に及び、又其家族の最も關係ある部落種族全體に及ぶのである、段々と自己に對する感情が、自己以外に及ぶ作用がある故、ダン、と摸倣の範圍及び同情の範圍が博く成つて來る、ソ、摸倣と云ひ同情と云ふは大概我が愛する所の者若くは我より上の者を眞似るのである、又同情も先づ自己に類し自己に關係あるものに及ぶのである、始終慣れて居ると云と禽獸に迄及ぶが人情である、それは佛教信者でなくも、苟も犬猫を飼て居る者は經驗して知つて居ることである、自然と同情が禽獸に及びます、始は好まぬものでも好む様になる、私の經驗で申すと私は猫は嫌ですけども、鼠は猫よりも

嫌である所から、猫を始終飼て居る、ソウすると後には家族の一人の如く思ふ様になります、天性猫は嫌であるけれども遂には可愛くなり、若し猫が長く歸らぬ様になると心配する様になります、夫故友達がなければ人は猫は勿論鼠でも友達にするやうになります、佛國の國事犯で或貴族が長い間牢に這入た時に鼠を友として居たと云ふ事である、ソ、ソすると獄卒が夫れを見て鼠を殺したと云ふことであるが其時彼は非常に悲しき思ひを爲したと云ふ事である、斯様に同情と云ふ者は人間界に及び自然界にも及ぶものである、況や自分と同様な人間であると、尙更相接し相知るに従ひ相摸倣するに従て同情の起るは自然である、

同情の進
化

此同情は博愛とは違ふ、尤も後には、ダン／＼と生長發達して博愛になるけれども、初めは極めて範圍の狭小者で自分の身邊より起るのである、第一家族を共にして居る者に同情がある、それから次には同一の民族に對して同情が及ぶ様になる、或は同地方同郷の人とか或は同種族と云ふ様にダン／＼廣く成つて同し顔色の人種、即黄色人種とか東洋人と云へば相互に同情が多い、即ち西洋人に對するよりも同情が多いと云ふ事に成る、他の原因がないとすれば普通の場合にはソウです、西洋人にすれば又た西洋人同士の方に同情がある、尤も中には白人同士でも仲の悪い者もあり、又白人にして東洋人に信用を持って居る者もあるが、兎に角顔色の同いと、自然と同情を表する、自分が色が黒いとすれば同しく黒い方の人に同情を表します、黒人の如きは、ヤ、ハリ、黒人同士で仲がよい、白人は白人で仲がよい、最初同情は外部的類似的の點に基く者で血統を同じで居るとか、或は皮膚の色が同し事て同情同感があります、ダン／＼と文明に進み知識が進むに従ひ、

其れでは同情を表せられぬ事に成る、成程同情は無くならないで、イツ迄もあるが、モウ知識が發達すると精神上の類似と云ふ事に重きを置く事に成て來る故、志を同して居ると云ふ點に重きを置く、知識の程度が同いと道德上の品格が同類者で有ると云ふ様な事て、ダン／＼と摸倣同情協力が成立て來る、最初は極めて分り易い血族の關係とか親子兄弟の縁とか親類の縁とか云ふ者で摸倣同情協力が成立て居る、古代の社會は皆此縁に基くのである、最古代の社會、若くは古代歴史の最初になると、列國皆族制制度である、即ち血族の關係で社會が組織せられて居る、其れから近世に成て來ると、血族の關係は矢張りあるけれども、それだけに限らるのである、今日日本歐洲諸國、米國等には、ヤ、ハリ、血族の關係がある、日本では大和民族と云ふ者が基礎に成て居るが、日本の國家を維持するは、今日夫に限る必要はない、夫故歐米人でも飯化する事に成て居る、即ち飯化法が出来て歐洲人でも米國人でも日本人に成る事が出來ると云ふ風に成て、精神上的類似、知識及び道德上の同類者であると云ふ事を基礎として一致協同して行く事が出来る様に成る、即ち元の血族には拘泥しない、精神上的類似に基きたる同情同感で社會が組織せられる事に成て、即ち古代の社會より現今の社會は高尚であると云ふ事が出来る、元の血族の關係も無視しては居ないけれども、精神上同化したる同類者であると云ふとで社會組織をなす事に成て來た故、ダン／＼と進で居る譯です、即ち是れ社會が組織せらるゝ所の精神的作用であります。

社會精神
の實在

斯の如く摸倣し多くの人が相習ひ、相真似て互に同情を持ち互に協同戮力する様になると、其間一種の社會

精神と云ふ者が出来て来る、單獨孤立の人間の精神に發現せざる所の意識状態が出来て来る、即ち社會の組織が永久と成て来ると、同時に其組織を維持する一致協同の精神が進んで来る、其組織に従て祖先の知識祖先の經驗を社會的に遺傳して、後代の人に傳へると云ふ風に成てくる故、ソ、コ、デ古人の精神は其生命と共に亡びる様に見へるけれども、それは肉體の生命が亡びる丈けで、個人の精神中社會的に成てくる、部分は永世不滅の者である、其の社會存在する限り一種の社會精神とが存續するのである、ソ、コ、デ社會學の上より觀察すると日本魂と云ふは是れ決して名稱のみとは見爲さぬ、日本魂は具體的の者で事物と同一に眞實である、即ち日本と云ふ社會が出来てから其社會を維持する衆個人の精神は社會的に成て居る、而して一種の特色を帯びた精神である、是は無形であるが實物と見爲して社會學では具體的のものと致します、それで分拆して見ると社會精神と云ふは個人を離れては居ない、社會精神と云ふは數多の個人が一致團結して有つて居る所の精神的作用である、個人を離れて社會精神はない、只單獨孤立の者として見れば個人の精神より外には何にもない、けれども數多の個人等の精神が相接すると一種の作用が起る單獨孤立では其作用は起らない、それで今此作用が起ると互に數多の靈魂が摸倣し同情する事に成るが、離れて居る時は精神が丸て遠て居る、是は、ドレ、ダ、ク違ふかと云ふに友人と出逢た時の精神と一人で居る時の精神とは違ふので分る、自分が一人て考へて居て天然の光景でも眺めて美麗を感じる時と、自分の愛する友人と會して喜ぶ時の精神作用は其色あいが違ふ、又太陽が没する光景を見て美妙の觀を起すと云ふことは、是は立派な感情に違ひないけれど

ども、友人と相逢て二人で相互に喜び相對した時の情と云ふ者は夕日の景色を見て麗しいのに見惚れて居る所の美の感情よりも更に麗しい所のものである、即ち愛情が起るのである、況や親子の愛情と云ひ、夫婦の愛情と云ひ、又は種々雜多なる高尚なる社會上に思想を以て居る所の人々の相會した精神的作用は中々高尚に成て居る、離れて居る時には起り得ない所の精神作用が同情同感で起て来る、其精神作用は一時的でなく永久である、ズット其れが続いて一代の間ばかりでなく子孫に及ぶのである、此の社會的精神作用と云ふ者は一人一代には限らぬ數代に續くものである、獨逸の心理學者「ヴント」は下等動物の意識には前後の連絡があるのみである、即ち前の時間と後の時間と直接の間には意識の連絡があるけれども人間の如く代々連絡する所の意識はないと云つて居る、犬と云ひ猫と云ふても、ヤ、ハリ自分の住家を記憶して居り自分の主人は記憶して居る故、ハリ全く意識の連絡がないと云ふ事は出来ない、イツモ猫の聲が出るが私の飼て居る猫に致しても二三月も居らない事があり、人に取られたかと思ふて居ると、又歸りて来る例がある、即ち多少記憶して居て道を探して歸て来るのである、動物の精神は或は一代だけは續いて居るかも知らん、一生涯の間は動物の精神には前後心の紐で繋いだ様に意識の連絡があるかも知らんが、けれども前代の動物と後代の動物との間に精神が繋がれてあるかと思ふに是は下等動物にはない、多少生理的に遺傳する故、親動物の經驗即ち其生理的分子だけは遺傳せらるゝだらうと思ひますが、心理的に傳はりて行く事はない、下等動物も各社會がありて多少音信を通るので有りませう、ソ、コ、云ふ例がある故、多少は正しく心理的連絡がないとは云は

れんかも知れんが至てそれは僅である、人間に致しますと親の精神が子に傳はるものです、又全身に社會精神があつてゾ、ト、代々傳はります、故に社會精神と云ふは具體的の者で、一種の特色を有つて居る、日本人の精神は今日俄に變へる事は出來ない、俄かに非常に違つたものになると云ふ事はない、英米人皆ソ、ウ、です、皆祖先の精神が乗移り生移りして行くのです、即ち宗教上て云ふ輪廻の説は社會學の上では事實と見爲す事が出來ます、親の精神が子に移り子の精神が孫子に移ると云ふ様に、即ち一社會の精神が始終次の社會に乘移りて傳染して行く、輪轉して行く間に、多少變化して生長發達する事になる、元より交通が頻繁になるに従ひ一の社會精神中に、他の社會の精神も多少傳播し來る事になるけれども、先づ重なる分子は祖先より次第々々に傳はり専ら教育の結果て傳はり行く事である故、多少地方々々で社會精神の特色が違ふ、即ち日本魂とか米國魂とか英國魂とか云ふ特色がある、多少各人民の性質に依て色あいが違ふ、けれども又、ダン、と共通の分子がある、日本人米國人英國人でも皆共通の點がある、それで人類的精神と云ふ者は各國民中に共同普通の點あることを云ふのである、凡べて各國の人民は歴史的に發達して居る故、日本は日本、英國は英國の特色の精神がある而して其間に又た共通の點がある、畢竟國民的精神の外に別に人類的精神があるのはなく、國民的精神の中に人類の精神はあるのである、心理學者は個人を研究の目的物とするが社會學者は民族的精神を其研究の目的物とするのです、社會學研究の單位を分拆すると心理學と同様に個人の精神になるけれども單獨孤立の精神ではない、始終團體的に働く精神を研究する者である、ツ、マリ、社會精神を

研究するのが社會學の目的である、

社會精神
の程度

此の社會精神と云ふ者は、ハ、リ個人精神の發達と同様の順序で發達する、初めの間小兒の時に於ては個人精神は盲動的である、若くは反射的作用である、此の反射作用は自然に人間の肉體を保護する目的を以て居る、例せば眠て居る時に足の先に物がさはると直ちに足を退く之を反射的作用と云ひます、目の側に突然物が來ると考へる暇のない中、早や目を閉ぢてしまふ、目を開たり閉たりする事は多少自分の意思で出來るが、迅雷の場合に當ては考へる前に早目が閉ぢて居る、眠て居らぬ時でも同じ事、手の先に痛い者が當ると云ふと考へない間に手を退てしまふ、是等も反射的作用である、反射的作用は無意識であるから時どすると却て之が爲に大なる害を受けることがある、矢張り盲動的であると云ふことが出来る。小兒は之を制する力が乏しいのである、それから何にかなしに働くのは小兒の常である、四支五體が實にモ、一生長發達せんとする所のものある故方向も目的もなく始終動いて種々のものに引かれ、音が聞ゆれば直に其所に行くと云ふ様に凡べて小兒の精神的作用は反射的又盲動的である、其れからダン、と教育の結果經驗の發達に従て一種の習慣で出來て來る、ソ、ウなれば自然と小兒が其習慣通りにすると云ふ風で多少規則が立て來る、其れから遂に道理を考へて臨機應變の作用を爲す様に成ります、初めは猥りに盲動し其れから習慣的に成て多少順序あり規則ある様になり成たけ手本に従て事を爲す様に成る即ち模倣的同情が出来るのである、自分の親兄弟であるとか或は先生などの眞似をして其形式に従て行く、何事も例を踏んで行く故する事なす事形式的になる、其れから

ダン／＼と個人の精神が合理的に働いて来る。道理を考へて、コウ云ふ形式に従ふのは、コウ云ふ理由である。云ふ事を知りて行ふのである。ダン／＼と道理を考へて行く様に成るのは大人オトコの精神的作用である。社會精神もコウ云ふ風に生長發達するので、初めは幼稚で有て盲動的又た反射的である。其次は習慣的形式的である。今日は余程歐米の進んだ所だけは輿論或は自由討究と云ふ事が行はれる故、社會精神が合理的に働くと云ふけれども世界の多くの部分は未だ反射的盲動的社會精神の時代に居るのである。習慣的形式的の時代に居る者が多い、歐米の文明諸國でも多くは習慣的形式的社會精神である。多くは摸倣的又た感情的である、合理的に成て居るのは、米國の東部、英國、獨逸、佛國等である。スペインと云ふ所になると、其の社會精神は殆んど習慣的形式的の尤も甚しい者で盲動的に近いのである。東洋で申すと日本は合理的に成て來て居るが支那朝鮮になると殆んど盲動的である習慣的形式に止て居る事が多いです。

社會組織の二方法

夫から社會は實際、ドウ云ふ風に組織せられる者であるか、社會精神の作用の結果社會組織は、ドウ云ふ方法で成立て來るかど云ふに二通りの働きが有ります。一は自然的膨脹の方法で社會が組織せられるです、即ち今日の社會で云ふと最も單純な所は家族です、家族は即ち社會の尤も單純な者である、現今の家族は社會の最も古い者である云ふ事は云へない、少し言ひ方を易へなければならぬが、而し家族の意味を廣くして、兎に角、男女の關係や親子の關係と云ふ者を廣い意味で言へば家族は即ち社會の根本になる今日に見る様な家族は進化の結果で出來たので始より有るのではない、然しながら廣い意味で云へば家族は人間社會の本です

進化的に云ふと古代の家族の意味は少し違ふけれども、今日の場合で云ふと、ツマリ家族が多く集て町村を成して居る、又た町村が澤山集れば郡縣をなし郡縣が多く集れば一國を成すのである、社會組織を分拆して見ると、一方では、ソウ云ふ風に成立ち自然と家族が膨脹すると一國を成すと云ふ風に考へらる、是が社會組織の二方法です、自然と單純の社會がダン／＼と膨脹してソウして大社會をなす、即ち家族より親族それから郷里郷里が多く集て郡縣とか州とか國とか云ふ者になる、即ち人口の繁殖に従て膨脹するのである、是は多くは血族の關係より膨脹するのであるが中には他郷より移住するものもある、即ち今日の世になると移住する者と土地に生れる者と此二者の作用でダン／＼とコウ云ふ社會が膨脹するのです、是を「キッチングス」はソシヤルコンポジション(Social Composition)と云ふ早稻田叢書にある社會學の翻譯には社會結合と名けて居ります、私は寧ろ社會合成と云ふ方がよいかと思ひます、合成は家族が多く合して村になり多くの村が合して郡をなし、多くの郡が合すると即ち州をなし國を成すと云ふ風に行くのである、それからモ一は此合成社會の中に特別の目的を以て其の目的の爲めに社會を構成する作用がある、之をソシヤル、コンスタチューション(Social Constitution)と申します、前の合成社會は家族が寄つて一の隣里をなし町村を成しダン／＼と勢力が膨脹するのである、夫で社會と云方は一部分が全體を爲し獨立し得る質を有つて居る、家族は親族なしと雖ども獨立し親族は郷里なしと雖ども獨立し、それから郡は縣なしと雖ども獨立し、縣は國なしと雖ども獨立し得るのである斯の如く上の方がなくとも下の部分は獨立し得る者です、家族の中には既に社會の分子が皆備つて

居る即ち男女が居る故家族は永久に相續する性質の者です、一の家族があれば他の家族がなくとも子に孫に續いてゆくことが出来る、即ち夫婦があれば子の有るのが通則である故、一の家族あれば家族以上の親族はなくとも獨立の生活が出来ます、親族も亦町村郡縣なくとも親族だけで獨立の生活が出来ます、町村は郡縣がなくとも獨立し得る者である、社會合成と云ふは、ソ、ウ云ふ風である、社會は、コ、ウ云ふ風に一方では即ち家族親族町村郡縣と膨脹する間に特殊の目的の爲めに今度は故意に社會を構成する作用がある、私は之を社會構成と名けます、構成は一の目的の爲めに社會を組織するのである、會社とか組合とか政黨寺院學校と云ふ者は特殊の目的の爲めに血族の關係でなく、或は地方的關係によらずして組織せらるゝのである、構成社會になると、ソ、ウ云ふ條件に係はらず目的を同くする者は結合するのである、社會合成に方では男女必ず無くしてはならん、男ばかりでもいけないし女ばかりでもいけないが、構成社會の方は男ばかりでもよく、女ばかりでもよく、或は男女の差別なく構成せらるゝこともある、會社の如きは多く男子である、夫から政黨も男子である或は將來女子も政黨に入る様になるかも知れんが先づ男である、學校の如きは是は男子でも女子でも其目的を同ふし資格のある者は同じく學校の教員生徒となる事が出来る、夫から寺院の如きは、僧院と云ふ方は男ばかりで尼院と云ふ方は女ばかりでなければならん、即ち社會の組織と云ふ者は一方では合成的に成立し一方では故意に一の社會の爲めに社會を構成するのである、普通合成社會と云ふは無意識的に自然に出来る者です、構成社會は有意識的である、目的を以て組織せらるゝのである、

合成社會は目的を知らんでも自然と組織の出来る者であるが、構成社會は必ず其目的を知らなければならん、と云ふ風です、

家族と國

然して合成社會の尤も單純で、尤根本的なるは家族であります、構成社會の尤も大なる者で又尤も凡ての社會の上に影響をなす所の者は國家である、國家は構成社會に屬する者であるが、然し是は非常に社會の大事なる者である、家族は合成社會の尤も單純なる者であつて又た社會組織の根本である、丁度合成社會の家族と構成社會の國家と云ふは社會の二柱となりて居る合成社會の根本は家族で、此家族は社會の親柱の一つである、構成社會にも種々有ります、會社學校寺院等種々有るが其中で尤も重要な者は國家であります、此國家組織は他の構成社會とは余程性質の違ふ者で此國家的生活を爲すまでに人間が發達しなければ人間の目的を完全にする事は出来ない、人間の目的を達するには國家が必要である、然るに社會を維持して行き、社會を完全にして國家的社會を、マン、マンと生長發達せしめてゆく根本には、合成社會中の家族と云ふ者が尤も完全に發達しなければならぬ、家族と國家と此二は他の種々なる社會よりも、尤も關係の大事なる者で有て、是は社會の二柱の基礎である、此の家族と國家と云ふ者を破毀すると他の社會は維持が出来ない様に成て来る、殊に國家と云ふ方は家族制度をも維持してゆく所の者で國家は社會組織の最も大なる最も高尚なる者である、國家の爲めに盡瘁し、國家の爲めに個人の生命をも犠牲にする事は、ソ、マリ國家の目的は人間終極の目的を成すに必要であると云ふ意味を含だ者である、尙此後に少しばかり社會進化の事を申し述べて、而して社會の進

化は如何なる目的を有するかを説き、人生の價値は社會生活にある事を辯じたいと思ひます。

第十 社會進化又次社會の目的

從前の社會起原説

社會の進化と云ふ事に付て述べますが、時間がないから簡単に社會の起原を述べて、それから社會の目的と云ふ事を終りに一寸付加へて、此講義を終る事に致します、それで社會の起原と云ふ事に付ては、主觀的側面は既に申上た通り、即ち心理的に社會組織の起る状態は社會心理と云ふ中に畧ぼ申上たつもりである、夫れが客觀的に現はれて來る所の状態は如何であるか、社會が客觀的に起り、*ダンク*と生長發達するに付ては如何なる蹤跡があるかに就て今少しく述べたいと思ひます、從來社會の起原と云ふ事に付ては、大概現在の状態を推したのである、現在は家族が社會成立の單位の様に成て居る、家族が合して即ち一町村を成し數町村が合して州郡を成すと云ふ風に實際に成て居る故、*ヤハリ*進化的にも元來家族が本であると云ふ風に推論せられて居たので有ります、歴史的に研究する人は、*ソウ*云ふ風に觀察を下したので、家族は現世の社會では最も單純である故、昔に溯りて見ても家族が本である、家族より、*ダンク*と成長し、それから膨脹して今日の様に成たと歴史的に社會の起原を説く人は説いて居たのである、それから哲學的に社會の起原を説く人は十八世紀即西洋の百年前迄の學者は非常に抽象的に議論をしたのである、哲學的に論ずる人は殆んど家族を眼中に置かんです、即ち個人が先づ最初に居る者と見做しました、家族を分拆すると個人に成ると云ふ所から哲學的に研究する人は、個人を單位に置いたので、個人は元來最初は即ち天性平等である所か

して最初の人間は天然の状態、自然の状態に生活して、殆んど單獨孤立の状態に居た、即ち政府なし社會なしと云ふ有様であつたと見做しました、家族といふ様なものなくては個人は無い譯ですから家族はあるものと假定するのでせうが、兎に角、哲學的に論ずる人は個人が平等だから個人と個人と契約して殊に社會を立て様ではないか、即ち動もすれば平等獨立なる個人と個人との間は戦争の状態で、*ドウ*も不安心且都合の状態である故、各人が自主獨立ではいけないから、其各自の自立獨立をやめて、誰にか一の權力を付與して御互に其者に付隨して行かうではないかと云ふ相談をなし社會を建設したといふ説がありました、即ち民約説と云ふ哲學的解釋が凡そ百年前迄行はれました、又た他の一方で實際的に説く人は家族の起原と云は、*ヤハリ*「バイブル」の初めにある通り、男女即アダムエブと云ふ者から、*ダンク*と人類が繁殖した者であると云ふ風に説きました、兎に角、實際的に論ずる者は今から四十年前迄、即ち千八百六十年頃迄は大概人間社會の起原は家族が本で、家長所謂家の父たる者が其の君主の地位を持つたのである所謂家族より親族となり、*ソウ*して宗家の長たる者が自然に全種族を支配し、所謂家長制度と云ふが、最初の國家制度である、一番大本にゆく家の父及び其の一家である、社會の起原は家に在て家長制度酋長制度は其本であると云ふ所迄、進んで居た、先づ今から四十八年前迄は、其位の説明で有りました

社會起原の新説

所が丁度千八百六十年獨逸にバツホーフエン(Bahofen)と云ふ學者が起り、此人は母權論と云ふ書を著し次て一千八百六十五年英國の學者「マツクレンヤン」と云ふ人も古代結婚論を著して又同様な説を立てまし

た、尤も是は兩方知らずして説たので、其の研究の結果で見ると最下等の野蠻人になると父と云ふ者を無視して居る、母を社會の基礎に立て、而して其系統を正すにも又財産の相續をさせるにも皆母の系統で立つて居る事實を發見し下等なる野蠻人の社會に關する事實が分かり、從て進化説の順序で行くと古代の社會は尤も今日の野蠻的社會に依て代表される譯で、それで古代の社會に付ての考へが一變する様に成りました、進化的に云時には社會の起原は今の家族にもあらず又個人にもあらずと云ふことになり、此家族とか個人とか云者は歷史上では最近の産物である、元と個人といふものは殆んどない、人は皆種族の團体に屬した者で獨立の個人は認識されない、一番最初は家族も獨立の家族としては認識されて居ない、家族と云ひ個人と云ふは極て近き古代に起つた者です、尤も家族は余程古いですが家族の起原と國家の起原は同一時代である歴史の證明する所に依ると大概西洋でも支那でも國家の統一者國家の創業者は結婚の儀式婚禮の制度を立てたと云ふ事が皆歴史に載て居る事です、それで今日でも家族の制度を維持して行くには國家の主權を維持して居ると云事が分る、今日でも法律がないならば幾多の家族は瓦解して仕舞ふ、即ち中には表面夫婦で有ても中の悪い者で有ると若し法律がなければ離縁したいと云者もある、今日家族の制度を維持する事は國家の法律が有て家族はコウしなければならぬと道德の上で抑へて行くばかりでもない、法律で抑へて行くこと云ふ様になり、茲に始めて社會に於ける家族をなし段々と社會組織を發達せしめたのであります、即ち家族制度を土臺としなければならぬと云様に成て、茲に家族が分立する事になる、ソコで歴史的に云と社會の單純な所は、

一の家族ではない、即ち一の群をなしたる群族と云ふ者がある、是が歴史的進化的に云ふ最も單純な社會です、英語及獨逸語ではホルド(Horde)と云ひ、即ち是れ、ムレと云ふ意味です、即ち群がつて居ると云ふ事です、昔は祖先にアダムエフがなければならぬ様に思ふたが、夫れには學術上の證明がない、進化論より云ふと下等動物がダンク人間と漸次に進化して來ると云ふて居る、初めから人間は澤山居る、僅か二人又アダムエフが有つて其から人間が繁殖したと云ふ事ではない、但だ人間は同一の種類から出た者であると云ふことが出來ます、下等動物は、イツの間にか漸次に人間に進化する故、多分一番最初の間は僅か二人の男女ではなかつたと思ひます、歷史上に溯りて見ても其の證據はない、又た理論上一男一女が人間の本であると歸結する必要はない、歷史上で尤も單純な社會は、此ムレより成立つのである、大概今日最下等なる野蠻人の社會で有ても、一のムレには二十五人多きは百人迄の人口がある、

濠洲内地の土人

此のムレと云は、一の家族をみた様な者です、家族と云意味を廣くすれば、イツでも家族は社會の本であると云ふ事が出来る或は下等動物にも家族があると云ふ事が云へる、尤も今日の如き夫婦あり親子あると云ふ様に即ち一の獨立した家族を意味するものなれば、古代のムレと云ふ者は今の家族とは大に違ふツマリ一のムレと云ふ者は、其の最初の所は能く分りませんが、最下等の野蠻人即ち濠洲の中部に居る土人の生活の如きになると、ヤハリ支那の風俗と同じく同姓相娶らぬのである、野蠻人は中々規則が嚴重です、同姓相娶らぬと云ふが通例ですが濠洲の土人の姓と云ふ中には種々の姓がある地方動物の名或は植物の名が付て居る、即ち

蛇とか袋鼠とか云ふ様な獸類の名を付て居る、同姓相娶らぬと云ふ事は、支那でも今もソウですが支那今日の制度は昔の制度より變遷して、唯形或だけに成て居るのである、濠洲の土人中には相娶てよい姓と然らざる姓のものがある、例せば甲の姓を持つて居る所者が乙の姓を持つて居る者を娶る事が出来るとすれば、我姓に屬する所の男女を妻又は夫にする事は出来ぬ、乙の姓に屬する男女を妻とし又は夫とするの規則である、所て其の結婚の風は、甲姓の男子が乙姓の女子を娶り乙姓の男子は甲姓の女子を娶る事に成て居るからソコで夫婦が有るが其夫婦の關係と云ふ者は唯だ其の男女だけに限らぬ、すべて甲姓の男子は乙姓の凡へての女子を妻として居ると云ふ理想に成て居る、元より凡へての女を妻にする事は出来ぬ故、實際夫婦があるのです、甲姓に屬する一人の男子は通例乙姓に屬する一人の女子を妻とするのである、是は事實上の夫婦で有て理想上の夫婦ではない、理想上の夫婦は即ち甲姓の男子は乙姓のすべての女子と夫婦である云ふ關係に成居る、夫故此の十人の言葉には從兄伯父伯母と云ふ様な言葉はない、唯父母、兄弟、姉妹とか夫とか妻とかと云ふだけの言葉で、それで社會の關係を云ふ時は事は出来ぬ、で甲姓の男子は凡へて自分より年上の男女を父と云ひ母と云ひ、現在自分を生んだ母ばかりを母と云ふのでなく、母と同年齡の婦人は、すべて母と云ひ又自分の父と同じ年齢の男子は皆な父と云ふ風に成て居る、一寸考へるにも考へにくい様ですが先づソレ關係である家族と云ふは非常に大いので社會と家族とが一ツに成て居る、是は社會主義の理想には非常に契ふて居る、社會主義が極端に進んだ時には私の夫婦を否定するのである、即ち人間は皆兄弟姉妹である故、其

兄弟姉妹の最も親いのは夫婦である、ソマリは其妻主義となるものです、ソウ云主義が彼の土人中には實際行はれて居る、歐洲から參つた所の宣教師が傳道の方便として自分の下男の紹介に依て其の下男の姓に屬する事と成た(姓に屬すると云ふのは養子になる事である)ソコで其認識が濟た故、宣教師は自分の下男の妻に對て今日よりは御前と兄弟であると云ふと、其女は答て云ふには、ア、ナタは私の亭主であると云ひました、是は夫の姓に屬する男子は凡へて妻よりは夫と見なすと云ふのであるからです、先づ結婚の制度では一番残つて居る社會組織の中の古い所である、濠洲と云ふと先づ動植物よりして古い所です、即ち他と孤立して居る大洋の洲であるから人間社會も最も古いものが残てある様に思ふ、

異姓結婚の理由

但し異姓相娶ると云ふ事は始よりは出来ぬ、一番始めは同姓相娶ると云ふ事が必要で有たらうと思ひます、それがイッしか異姓相娶ると云ふ事に成たのでありましょう、それで尤も古い所の原則は同姓相娶ると云ふ習慣であらうと思ひますが、人間の天性として近親族の結婚を嫌ふやうになつたのと思はれます、下等動物でも同じ巢の鳥は夫婦に成らぬと云ふ性質がある、人間も同家族のものは結婚する事は好まぬ、而も其結果が能くない事を経験に依て知る様に成たのであらふかと思はれます、斯くて異姓結婚制となり、最下等の社會に成ると社會が一の家族です、夫婦の關係は事實上の夫婦だけに限らぬ、其妻と姓を同くして居る婦人又夫と姓を同くして居る男子は理想的には妻なり夫である事に成て居る、人間最初の社會組織は家族の大いなる者です、今日見る様な家族はないのです、ソウして姓を相續するや、即ち母が本になる、母の姓を相續するの

てす、父又父の姓はソウいふ云ふ社會では無視されて居る皆母の姓を本にして傳へてゆくの、今日の様に父の名を名乗らぬ、それで財産の譲り渡しにしても父が子に譲る様な譯ではない、姪に譲る事になる、即ち子が母の系統を續ぐ事になると自分の子は妻の姓に屬する所の者であるから財産を自分の子に譲ることは出来ない、即ち之を相續する所の者は我が兄弟か或は自分の姉妹の子です、即ち父は子に其名と財産を譲る事が出来ない、一寸今の文明社會の制度では想像の出来ない所がある、所で異姓相娶る様な事は、一の群と他の群と仲がよければ出来る、仲が悪いとドウするかと云ふに仲のよい時には異姓相娶て行く事が出来る、即ち通常甲姓の男子は大概乙姓の方に這入込で居る即ち婿入して居る最下等の野蠻人に成ると、女を我が方に迎へて置くのでない、男の方から妻の方へゆくの、それで男子と云ふ者は妻の社會に行いて食客をする様な者である、何にも權力はない、夫故濠洲の土人間に戦争の起た時には變な工合に成て、父と子が戰場に見へる事が有り勝ちです、即ち子の社會と父の社會とは別に成て居る故ソウ云ふ關係に成るのである、

母系及び
父系制度
の起原

それで甲乙常に戦争をして仲が悪いと云ふと、ソウ云ふ社會には掠奪結婚と云ふがある、互に婦人を相奪ふ事が行はれて居る、掠奪結婚が自然と一般に行はれると、今度は父の方が本になる、掠奪した女は夫の所有物になる故、其の妻の生だ子は父の姓を名乗ると云ふことになる、此掠奪結婚の結果で自然に女系系統制度がダ、ン、と男系系統に移る順序に成て居る、野蠻時代に於て男子が遠方に移住する場合には、男子が頭と成て妻子眷族を引き連れて行くのである、ソウ云ふ場合にも、又父が本になる、それで人間の最初は母ある

事を知て父ある事を知らずと云ふ事は支那の古書にも出て居る、西洋の歴史にも古來其の痕跡がありました、是は最近五十年間の研究で其道理が明かに成て來たのである、

夫が妻の方に行て食客に成て居る習慣は現在シイロン島の土人間に行はれて居る、之をシイロン語に基づきピーナ結婚制度と申します、即ち女系制度で凡べて母が社會組織の本に成て母の姓を名乗るのである、ツマリ最下等の野蠻社會では父は的にならない、即ち漁業時代狩獵時代には男子は遠征を試みて不自由な生活をして居る故、一人の妻を守る譯に行かない故、自然と遠征する時には他の妻を娶る事に成る、それで女姓を立ることは確實であるし、女系は社會を組織するに確實である、必しも父は分らんと云ふ譯ではないが、經ひ分りて居た所でソウ云ふ野蠻人の時代では父の職業が不確定である故、男子は的にならない、それで人間は生れながらにては二足の動物であるのみである、或人は耻と云ふ事は人間の天性であると云ふけれども、其れも事實ではない、文明人の小兒を見ても分る、只人間は高等動物と云ふだけの天性があるのみである、それで下等動物に異なるのは人間と云ふ動物は將來に人格を具備するに至り得る能力を持つて居ると云ふのであるか、然し只能力を持つて居るだけでは未だ人間ではない、狂人でもなほれば復び元の人間に成得る能力は有るが、それだけでは人格があるとは云へない、人間と成るのは全く社會生活の結果で、社會に對して義務を守り責任を盡して、始めて始めて人間となるのである、

アリスト
ートルの

夫故古代の「アリストートル」は、人は天性政治的動物なり、人は天性國家的動物であると云て居る、是は

原則

國家は人間社會の初より有りと云ふ事ではない、人間の天性を完全ならしむるには政治的生活が必要である、即ち國家的生活を爲すに非ざれば人間の天性は完全ではない、「アリストートル」の意味では人間の最も發達したる状態を天性と云ふので、ツマリ「アリストートル」の本意は、天性は充分初より現はれて居るのではない、例せば花が咲き實を結んでこそ植物の天性と云ふ者が爛熳として分ると云ふ譯で、人間も、ダグ／＼進んで、初めて文明社會に成て其天性が爛熳と現れるのです、人間最初の状態が其の天性であると見るのは誤りである、人間の本性は昔の野蠻時代よりも文明に進んで、来て初めて現れる者です、ソユデ人格は即ち獨立の資格一に他人に對して義務を守り責任を盡す上に具はるのである、即ち社會の教育で、ソウ成るのである故、社會を離れて到底人間と成る事は出来ない、「アリストートル」の云て居る語に偶然に非ずして社會生活を爲す事の出来ない者は、それは人間以上若くは人間以下の者である、人間である以上は、必らず社會的生活を爲さなければならぬ、即ち自分だけでも充分であるから社會を要せぬと云ふ者は、其れは禽獸であるか若くは神であると云て居る、禽獸は、縦ひ一匹でも動物たる事を得るものである、彼の猿の如きは社會的動物であるが、猿一匹をばなして、ドウかど云ふに猿の性質は變じない、唯だ愉快を感じない位である、牛の如きも社會的動物であるが、是も牛一匹はなして棲はせても牛の性質は變らぬ、けれども人間は社會から引離すと云ふと、ダグ／＼と人格が薄く成て滅するるのである、即ち智慧が少く成る、社會的の生活をなさない者は愚鈍に成る、夫故長く牢屋にても這入て居る者は、ダグ／＼馬鹿の様になつて來ると云ひます、又田舎に片住ひし

社會生活の價值

て山の中に生涯を送る者は自然と愚かに成て來る、夫故若し人は社會的生活を爲さずには置たならば、本心もなく、名譽心もなく知識もなく、只、モウ動物として醉生夢死する所の者に過ぎないのである、然るに此の人格を具ふると云ふのは正しく我々が社會的生活を爲すの結果です、さて其社會と云ふは非常に窮屈の様であるが、我々は社會に於て初めて自由を得るのである、野蠻人の生活は優勝劣敗で弱者は強者の奴隷に成て仕舞ふ、若し動物の自然の状態に任して置けば我々は生れながらにして自由を得ないのでみならず、到底權利と云ふ者は得られない、若し社會的生活が出来ないとすれば、それは野蠻人の状態に近いので遂には生命財産皆強者の思ふ儘に亂されて仕舞ふ、折角好い女を妻に持た人でも他の強者に奪はれると云ふ様な境遇では、兎ても財産の權利と云ひ、夫婦の權利と云ふ様な者は成立ない、されば人格と云ふこともソウ云ふ状態であると成立つ所ではない、今我々が人格を得られるのは全く社會生活の恩恵である、夫故佛教に於ても四恩と云ふ事が説てある、即ち父母の恩國王の恩三寶の恩衆生の恩とある、其中衆生の恩と云ふ事は即ち社會の恩で或意味では人間に取て最も大切で、即ち衆生があるからして佛と云ふ者も出來てくるのである、佛教で成佛と云ふ事を云ふが之を倫理學、若くは社會學の語で云ふと人格を實成すると云ふ意味になる、人格實成と云ふ事は今日倫理學の目的である、井上博士は自我發展と云ふ語で之を言ひ表はして居る、それでもよい、即ち人格の發達と云ふ事を云ふので、ツマリ佛教の成佛と同じと思ふ、社會は衆生によりて組織せられ其中からダグ／＼衆生を救ふ所の偉人が出るのである、偉人は社會か

ら出るのて、此の偉人のある爲めに社會が進むのである、釋迦の如きは亞非利加より生れては來ない、孔子も南洋からは出て來ない、ヤ、ハリ孔子を生み釋迦を生むにはそれだけの社會的要素がなからねばならぬ、其社會的基礎が有て其中から偉い人物が生れると其社會は、モウ一步進んで行く故、ソウ云ふ豪傑聖人君子の社會に於ける恩義と云ふは非常な者です、英國の「カーライル」の如きは英雄豪傑は社會の造物主と云ふて居る、それは云ひ過ぎて居るでせうが、或意味では其の通りである、少なくとも社會の進歩するのは偉人の御蔭です。其他文明開化の上で言て見ると種々なる發明種々なる學術上の研究は全く偉大なる人々の恩義で我々初め之が爲に救はれて居るのである、然し乍ら其偉大な人物を生み出だすのは又た我々衆生の力である、社會の力である、ツ、マリ社會の恩と云ふ者は、終極の一番大事なる者になる故社會の爲めに生活することは、益々社會を研究すると興味が多くなり、社會の爲めに盡すと云ふ事は餘計な事厄介な事をするのでなく、眞に我々が人格を發達して行く所の方法である、此の人格を實成すると云ふのは是れ即ち人生終極の目的である。而して社會に完全なる所は即ち國家をなすのですから、國家的生活をなすに至らなければ、人格を充分に發達せしむる事は出來ない、如何に我々が社會に負ふ所あるかは我身を考へて見ると分ります、外形から云つても此頭に冠る所の朝の足に付ける所の下駄靴に至る迄、實に社會の恩に依らぬ者はない、自分が作つた者は何にもない位な者である、文明人になるほど益々そうである、自分の腦中にある所の思想、或は我々の品格皆何れから得て居るかと云ふに誠に自分の發明と云ふ者は僅かしかない、即ち大概は先生から習ふと

か或は長者から聞いたとか、或は父母の感化に依るとか凡べて先人の恩恵から成立て居る、皆我々のする事なす事、身と心に付く所ものは社會の恩澤に依て居ります、夫故益社會の爲めに盡さんければならぬと云ふ歸結に成て、自然とそれが社會生活の終極目的と成るのである。社會進化の目的も亦た此の人格を實成するといふことに外ならぬのである。是れからが應用社會學の範圍であつて社會學中的一部分として殊に其の研究の終局目的として最も必要な所以であります。

社會學綱要終

倫理學綱要目次

| | | |
|-----|---------------|----|
| 第一章 | 倫理學てふ概念及其變遷 | 一 |
| 第二章 | 倫理學の二大立脚地及其得失 | 八 |
| 第三章 | 倫理的研究の方法 | 一八 |
| 第四章 | 倫理學の職分範圍 | 二八 |
| 第五章 | 道の發達論 | 三二 |
| 第六章 | 標準論の中の他律說 | 四五 |
| 第七章 | 自律的の諸學說 | 五五 |

倫理學綱要

中島德藏氏講述
(文挾廣文筆記)

第一章 倫理學てふ概念及其變遷

偕て此暑い時節にも係らず倫理學を御研究になるに就いて、自分が大要を御話し申す事に成りましたが、倫理學も中々七席位でも話し申すと云ふ譯で有りますから、ホンの大體に過ぎない、それて今日は此倫理學とは何であるかと云ふ事に付て申します、即ち倫理學の本質如何と云ふ此問題が一番初めで御座りますが中々疑義の多い點であるのです、御承知の通り今日の有様では倫理問題と云ふ事が頻りに喧く成て参り、殆んど倫理教育と云ふ學問が尤も多く流行する時代で有ります、現に諸君方に致しても御自分の方で脩身の教を有るにも係らず、我々俗人の方の倫理と云ふ問題に付て少しでも味ふて見様と云ふ有様である、其れはドウ云ふ譯でソウ成て來たかと云ふに、是は日本ばかりの事でない、西洋でもソウです、倫理問題は頻りに喧しく論究されて居ります此倫理學とは何ぞやと云ふ問題に付ても、一定確然たる答がないと云てもよい位です、是は今日喧く成て多くの實際の問題が生じて來て、それで今迄に解釋されたのも有るが、却々倫理では解釋

が付かぬ程即ち昔の倫理では解答を與ふる事の出来ぬ事情が生じたと云つてもよい、例へば手近に御話すると日本の事情でも色々の實際問題が有て、昔は主従の間の關係の如きは殆んど君臣の様に情誼が厚かつたが、今では名のみにして主を主と認めない、即ち主たる主人も一個の人間であれば、自分も一個の人間であると言ふ様に四民平等を言ひ出して色々と言ふ様になり、下女は奥様と同様に考へて居り、又家臣と言ふ様な者でも昔は絶対的に服従した者であるが、今では中々ソウはいかない、彼も一個の業務があらうが、我も又相當の職務がある、我と彼とは何にも變らんと云ふ様な議論が行はれて來た、田舎へ行て見ても昔の様に小作人は地主を敬しない、即ち地主は何者ぞと云つて、表面には現さないでも、其精神は心の中に満されて居る鹽梅でイヤと云へば取て抑へると云ふ様な有様である、學校にしても、其生徒の多くの考へは教師是れ何者ぞと云ふ考へで場合に依て教師に喰て掛り、ストライキでも起そうと云ふ事が行はれる、そこで當時は何でも斯でも昔の標準から云ふとストライキ的に成て居る、此ストライキを鎮撫する所の教は六ヶ敷い、それを抑え付けるには昔の様に武士が力を以て赫し付けるとか或は頭からして、生意氣な事を云ふなど怒鳴り付て腕づくでやると云ふ様に出來ない事もないが、此も或程度迄は出來るでせうが、けれども其れはソウ抑へ付ては所謂心服するのではない、夫故、又陳涉吳廣の徒が起り來るか計り難い、先づソウ云ふ様な譯で、諸君方は世の中を濟度する御方である、ソウ云ふ人間に向ても或はストライキ的連中かある、又奥様に向て謀反をする下女、檀那に向て謀反をする下男、日本は君主に向ては謀反はないが、凡べて長官に向て

謀反をすると言ふ事は今日少くない、ソウ云ふ人間を濟度するに諸君は、ソウ云ふ風に濟度の仕方をするか、諸君は劍を以て濟度なさるゝではない、或程度迄では、諸君の徳を以て濟度なさるゝには相違はないが、徳は言葉ではないが或程度迄は言葉を以てすると云ふ事がある、學理を以てし言葉を以て濟度する事は諸君が説教する事である、其説教の根本に潜まつて居る者は何にか、其言ひ條が悪いと云ふと人は心服しない、成程、ハ、と聞き分ける様にして行かなければ、下男も匹夫も言ふ事を聞かない、夫故匹夫匹婦の心からして納得させる様なやり方ではなければならぬ、即ち頭から神と云つては其れを悟らせる事は出來ない、そこで倫理とか宗教と云ふ様な者は、ソウ、其れの口實と云つては少し語氣が悪いが、ソウ、其最後の道理を、凡べての者に解らせて、従ふべき者は従ふ様に、それから主張すべき者は主張する様に各々の人をして精神的に處を得せしむる事の出來る様にする道理があるのであるから、其道理を見付る所の學問と成て居るのです、今日の世の中は夫故昔と違つた所の要求が人間の心に新しく出來て居るのですから、其新しい者を欲いと云ふ心持が天下に満て居るのである、其心持に當てはめて根本の道理を知る事が必要で、其れを知る所の學問があれば之を先づ倫理學と云ふ様に申すです、デ、是は何にも昔から變た事はない、大學にもある通り大學の道は在明明徳在新民と云ふ事がある、明徳は即ち智徳を明かにするのであるから人間の行つてゆくに付て無ければならぬ所の道を明らかにする意味で、大學に一番初めに書いてある、今夫れと同様な譯で倫理學は、ソウ人間に身行をして、所謂入用な道を求むる學と申してもよい、デ、其道理は分りました所で、初めて其道理

を用ゐて而して此の實地の世の中に付て、人が身行ひをする上に應用し、匹夫匹婦に對して下女下男に對しても凡べて人々の納得が出来て、此の世の中を無事に送て行く様に根本の原理を求むる事になるのです。夫故一言で申せば倫理學は道を明らかにすと云ふ様に申してもよい或は道德の標準の學問と申してもよい、道と云ふ事と道德の標準とは變つた事はない、道の學、道德の標準善惡標準の學と云つてもよい、西洋學者の定義を御紹介申すと種々有るが、初めて倫理學を學ぶ人には頗る混雜を招くのみである、縱へば「アレキサンダー」は判斷の學と云ひ「マルチノー」は人的資性の學と云ひ「パウルセン」は道德的事實の學と云ふ風に云ひます、或はグリーン派の人は人間行爲の學と云ひます、定義だけを云ひますと六ヶ敷くないが益にも立ちません、先づ大略道を論ずるの學と思へばよい、それはホンの大略の話です、

然しながら道とは何ぞと云ふ根本問題即ち善惡の標準を立つる道、其標準は、ド、ン、な者かと云ふ事に付ては大なる困難が伴ふて来る、其道の考へ方如何に依ては倫理學の種類が幾くつにも分れて來ます、昔から道を、ウ、云ふ風に考へて居たか即ち男女の關係、主従の關係、君臣の關係、朋友の關係と云ふ者を其れに付て斯様にせよと云ふ事を教へる、其教へ方に種々有りました、其れが昔と中古時代と近世とでは餘程變りて居る、倫理從て學の考へは、ド、ン、な者かと云ふ考へは昔と中世と近世と變て居る、昔のゾ、ット、昔は能く人の道を善惡の標準を以て論ずるが、宗教と哲學と少しも離れて居ない、言はゞ宗教的哲學的、倫理學と云ふ者で有て、此三は混して居た、例せば此方の例に付て云ても、ソ、ウ、です、虚言を吐いてはいけないと云ふ事を教へるに付て、

今日世間の太古の人とも云ふべき人は、何と云ふかと云ふに、是を宗教的に問答して居る、即ち地獄に入て閻魔に舌を抜かれるとか云ふ様に地獄や閻魔を持て來て、所謂未來世界を持て來て話しをして居る、ユ、ム、云ふ虚言を申して居る、ツ、マリ、方便的に信すればよいが、其れを正當に信じて居る、一寸門の外へ出れば、ソ、ウ、云ふ人間が澤山居るです、又身体を清淨にせなければならぬと云ふ事に付て、何故に清淨にせなければならぬかと云ふに神が嫌ふからなどと云つて居る、或は豚の肉を喰ふてはいけなとか、牛を喰ふてはいけなと云ふ、それは神が嫌ふ神が當ると云ふ、是等は宗教的のです、通例の人は太陽に向て唾をしてはいけなと云ふ唾をするとか罰が當ると云ふ、罰と云ふ事を宗教的に信じて居るのである、ユ、ウ、云ふ所には何にか倫理學であるか何にか宗教であるか何にか哲學であるか云ふ考へはない、唯此三が、ゴ、シ、ヤ、ゴ、シ、ヤ、と塊り付て居る、何れの野蠻人の所に行て調べても、ソ、ウ、です、此三が塊り付て居て、ド、レ、が宗教であるか哲學であるか倫理學であるかと云ふ事は分らんです、是等は人類學に付て、調べると能く分かる、多く野蠻人は太陽を持て來ては人間に倫理的關係を説いて居る、ソ、コ、で此時代が段々過ぎて、ゾ、ット、西洋に付て云ふと、コ、ー、云ふ順路に成て居る、其の本據を分つなければ倫理學哲學宗教學と分るべき者が一處に成て居た、其三が、ド、レ、が勝つたかと云ふに威勢のよいのは人に目の付く様に成る者である、ソ、コ、で宗教が一番威勢がよくて遂に勝を占めた時がある、一切萬事の事柄は宗教で説明する様に成升た、恐らくは印度支那に於ても日本に於ても同じ經過を通りて居ると思ふ、御承知の通り西洋では耶蘇教が凡べてを壓倒して倫理學科學政治學と云ふ様な學問を自分の

家臣や弟子にして仕舞て、其れで宗教が一天萬乗の君主となり、時めいた事がある、羅馬法王の權力の偉大で有たのは諸君が御承知の通り、ス、ペ、ラ、シ、キ、者であつた、帝王の上に立て居て、政治學倫理學哲學等皆宗教の隨使の下に働かなければ生存を保つ事が出来ない、此時に於て紀元千四百五十三年、近世の文明開けて來る間は宗教が壓倒して居た時代で、凡べての者は其脚下に服して居た、夫故只今私が紹介する所の倫理學も其當時の宗教の前では息を殺ろして蔭に潜んで居た、羅馬法王の一言が無れば、ト、テ、モ、飯を喰ふ事も寝る事も出来ない、全躰が凡べて一の羅馬法王の意志に依つたと云つてもよい位です、夫故一番初めに三が混合した時代から一變して、中世紀に宗教的の倫理學が出來て來た、ソ、コ、デ、今日ド、ウ、か、と云ふに今日は西洋でも又反動が來まして近世紀に於て、英國には「ベ、イ、コ、ン」が出て（此人は物理學政治學論理學等に於て有名な人で、す）此人が經驗を尊んだ、目で見たり耳で聞たり其他口に味ふたりする事の出來る者は之を經驗的と申しま、す、例へば茲に「コ、ツ、プ」がある手で觸れ升、即ち觸覺で知る故「コ、ツ、プ」が有ると知る、それから向ふに時計が有れば音が聞えるので知れると云ふ如く、凡べて此五官で承知し得る範圍内に於て知り得る者を之を實物と云ふ、其實物的經驗的でない者は其他は迷であると教へた、神が「ド、コ」にあるか神は直接に見た事も聞た事も無い、是等は經驗的でないとして、此經驗的でない者は迷ひに入り空想に陥入ると云つて、何でも經驗的實驗的で五官の上で證據を立つる事の出來ない者は倫理學の範圍でないと云ふのである、神などは、ソ、ウ、云ふ人が聞くとも必要の様になつて來る、

兎に角大躰に於ては實驗と云ふ見解から、又此人間の行ひをする道と云ふ事を論ずるに付ても、世間の方へ引戻した、丁度初めは何にも彼も宗教哲學倫理學と一處に成て居た時代から、夫れから後は宗教が中世全盛を極めて、哲學も倫理學も有るか無きかと云ふ時代に成つて仕舞つた、近世に成つては次第に倫理學が出來て盛になり、宗教は少しく暗く成つて來た状態です、「ベ、イ、コ、ン」によりて始められた思想の傾向は必ずしも宗教や哲學を亡ぼしは爲ない、神の前に行て氣に入らるゝ道は何と云ふかは宗教家に聞かなければならぬ、又世界の本躰と云ふ者は如何なる者か其道は哲學者に聞かなければならぬ、然るながら此世の中に於て朋友の關係、夫婦の關係、君臣の關係と云ふ様な工合に人と人との關係を定める間に人の納得の出來る道は、何ぞやと云ふなれば之を出世間に求むるは誤りである、世間的に飽く迄も「ベ、イ、コ、ン」の立脚地に立つて人間の經驗の範圍内に於て確實な證據のある者を本にして教を組立なければならぬと云ふ事に成つて居る、此點に於ては宗教界に於ても哲學者に於ても反對しないであらう、即ち誰れでも世間的に引戻して仕舞ふ、それで今日では宗教であらうが、哲學者であらうが、世間を論ずる時には倫理によると云ふ傾向に成つて來ました、

是は今日の倫理で、唯今私が諸君に御紹介申すも世間の倫理である、諸君の如きは佛の道を談ずるに佛を立脚地とするが今それとは違ひますから其心持でも聞取を願ひます、今日でも「コ、ウ、云ふ倫理學が成立するや否や」と云ふ事は大なる問題で全く倫理學は哲學や宗教を假らんで、そこで世間の倫理で説けるか「ド、ウ、か、又是

非假らなければ出来ない」と云ふ者も御坐りませぬ、それは日本でもド、迄俗界の事が科學的に經驗を以て説明し得ると云ふ側は、福澤加藤や博士の如き、云ふ側である、井上博士になると倫理學を哲學を假らなければ説けぬと云ふ傾向を云ひ顯はして居る、是は現に其證據である、西洋の學者は倫理學を論ずるには哲學や宗教を入要だと説く者は少い様です、結極は先づ私が申上ぐるは成るだけ經驗と云ふ者の基礎に立つた所の而して出世間と云ふ者に關係なしに組立てられたる所の倫理學が有つたならば、それはドンな者であるかと云ふ事を御紹介致して見たいと思ひます、

コウ云ふ工合に變遷して倫理學は段々變つて來た、初は人の心は混然たる者でゴッシャリとして居る夫れが段々と分開して參り丁度一本の木であるか夫れから枝が幾つも分れて其枝に花が咲くと同じく之を英語で(differentiation)譯して分化と云ひます、斯様に變遷して來るのは是は人間自然の發達に契つて居る事實と考へます、今日只倫理學に付て變遷したる有様及び人間の心は自然に本いた者だと云ふ事を申して置きます、次は倫理學は如是二に經驗的非經驗的に分れて居てこの二大立脚地に於けるは經驗的倫理學と哲學的倫理學宗教的倫理學はドウ云ふ風に利害得失あるかを申し上げます。

第二章 倫理學の二大立脚地及其得失

前に倫理學は如何なる者で有るかと云ふ事を少しく簡短に御話し申しましたが、今日は倫理學が二に分れて居ると云ふ事を中升、倫理學の二大別と申すと經驗的の倫理學、哲學的宗教的の倫理學とになります、何故に此の宗教と、哲學を一に非經驗的即ち超經驗的と申すかと云ふと、哲學と宗教と申します者は、經驗の範圍に就て知るべからざる本體を信するに付ては一致して居るから有ります、御承知でも有りませうが、人間は兎に角經驗的の者で有て、其れが段々と超經驗的と云ふ傾向を持つて參るです、子供に就て見ても超經驗的の事を申しても分らん事は諸君も御承知であらう、即ち本體或は佛とか神とかと云ふ意味に對しては小兒は正しき觀念を得る事は出来ない、けれども段々人間が生長して來ますと、知識經驗と云者が付て參りまして、經驗的の者を超絶して殊に本體或は絶對と云ふ者に到達します、此經驗的の境界は相對的の者で有て經驗的の者を超絶した境界は絶對の境界である、諸君に向て絶對と申す様な事を彼此御話し申す必要はないが、即ち相對は彼と此と有る境界差別の見へる間即彼此善惡とか黑白とか云ふ様な者の見へる間は相對界です、其れを超絶してそれから絶對の境界に入るのである、何れにしても哲學宗教と云ふ者は相對界の者でなく其上に超絶した或一の者を知らうとし或は感じ様とする者でせう、今日に於ては倫理學は相對の境會に付て、社界に人が處してゆく所の道を論じ様とするのは倫理學であるが、中には前にも申す通り宗教と哲學とを假らなければ、人間社會に處する道をも説く事は出來ぬと説く人も有ります、其様に此二つの事柄が充分論定致されませぬと云ふと、倫理學を調て參るにしても大分に不都合で又困難で有ります、是は倫理學上に於て大なる争ひの點で昔は西洋に於ても御承知の通り「ブラト」と云ふ人が哲學或は宗教的と云ふ態度を取

て倫理學を組み立て即ち此人の立た最上の善最上の目的は、シートと名を付けて居る即ち絶対の善と云ふ事て諸君の方で云ふ或る意味の佛にも當りませう、之に反して「プラトニー」の後に「アリストテレス」は哲學の立脚地に於て絶対から人間の身行ひを説明したは大いに不都合なる事を唱へまして初めて倫理學と云ふ哲學の方に關係のない論理學を拵らへた、現にエーチックと申す所の語は、是は「アリストテレス」の拵へた名である、「アリストテレス」以後此倫理學の語は用ゐられて居る、昔に於ては「プラトニー」及び「アリストテレス」からして哲學的經驗的と云ふ二の倫理學の名が分れて居る、爾來希臘に以て「ストイック」や何やかやハハリ哲學的に倫理學を組立て中世紀凡そ千年の間宗教哲學的倫理學が流行りまして近世に成りましたは經驗的倫理學の勢が段々と能く成て参りましたです、西洋の學者は今日に於ては所謂倫理學に於て哲學宗教を假らんでも立てられると云ふ事は一致して居ると申しますが、日本に置き升しては、ソウは参りません、諸君の方の佛教の方からして、ドウ云ふ立派な學說が供給されるか解りませんが現に井上博士の様な説を説いて居る方もあるから是は未定の問題です、

兎に角二大學派が有て何れが勝れて居るか何れに眞理があるか當時に於ては殆んど不定であります、先づ此の二の倫理學が成立得るとしまして其効力は何れにあるかを考へて見ると、即ち人を感化して實益を得させる者は即ち哲學宗教の倫理の方が効が非常に多いです、是は争はれぬ事である、單に相對界に止つて此の相對の間に於て極人間の五官に觸れ易い人間の經驗的に於て有り得る所の事實を土臺として組立てた所の道德説で

あると、ドウも何だか俗めいて來て淺慕らしい誘りは免れません、例へば倫理を説くに、正直でなければならぬ事を説くに、神や佛を假りて説くとか或は絶対を假りて説くと云ふ事に成ると餘程さまざまの高尚の意味が伴ふが、何故に正直をなさねばならぬかと云ふと、今夫れを「カント」の云ふ絶対と云ふ事を假りて申すと、「カント」は夫れは云はゞ實踐理性即ち實踐の命令であると云ふ、夫故先天内容の聲であると了解してよ、ソウすると正直は何故にせなければならぬかと云ふに、先天内容の聲は即ち神又は佛の聲であるから正直をしなければ神又は佛に對して濟まぬ事になると云ふ、高尚な意味がある、所が經驗學派から云ふと經驗に基礎を置て正直にしなければならぬと云ふ事を説くに、經驗を土臺にして説くのですから何かと云ふと五官に觸るゝ所の者即ち味ふ事の出來聞く事の出來る所の者心の中で斯くと知り得る所の者を土臺にしなければならぬ故、譬ば苦樂などから説くこととなる、誰も彼も快樂苦痛と云ふ一の感じは誰も持て居る、即ち菓子と喰へば甘いとか人に打たれば痛いとか云ふ事は誰も知て居る即ち經驗的の者で有て種々世の中の事柄に付て我に斯くと感じた事の有る所を土臺にする、何故に正直をしなければならぬかと云ふに、結極は苦痛が減して快樂が多くなるからと云ふ風な説き方です、然らば果して快樂が多くなるか頗る是は實際に六ヶ敷の問題です、俗人が聞いて、ソウ云ふと本當に快樂が多くなるならばよいけれどもソウでないかと云ふと正直者は損をする、損をすれば快樂が少い、即ち正直は苦痛の多い者であると云ふ風にも俗人は解釋をしないとも限らない、是は正直をしなければならぬと云ふ事を行はするに付ては、疑を招き易い所の者で非常に効力が強いと

云ふ事の出来ない教へになる、此効力問題から云ふと科學經驗の方に根底を置きたる倫理學説は、先づ一般から云ふと其効力が薄いと云事が云へる様に成ります、勿論倫理説は快樂説ばかりで解釋するのではない、經驗學派から云ても却々深い根底があるのもある、其根底に立て人間が世の中に處してゆく道は親切で正直である云種々の教へが立つとしても、哲學の方から果して此世の中即ち差別界は空な者である意味にない者であると云ふ證據の立て来た時には、正直も親切も或は夫婦の關係朋友の關係君臣の關係を付けて置くのは迷ひであるか知れない、時間も空間も云はれ前にフ、ラ、サ、ガ、ツ、テ、居る様に考へるが、是又無い者とすれば經驗學派の時間があり空間があると云ふ教は破壊して仕舞ふ、即ち時間も空間も無い以上は時間空間があると作り上げた倫理學説は倒れて仕舞はなければならぬ理であります、夫故科學的倫理學の下で効益を爲す上に置きましては自然と範圍が狭い薄いと云ふて宜敷い、夫れは哲學の方では是は餘程強い、正しく深い所に感化を及ぼす事は誤りではない、例せば私が申す經驗的倫理學を、哲學を研究する諸君に向て申上たならば諸君は直に、ソ、ン、な空な事を云て此の浮世を立てると云事を云のは、それは空である故信するに足らぬと云て退けても止むを得ないので、或はソ、ウ、かも知れないのです、夫故出来る事なれば倫理學と云ふ者を、ドウ、か宗教或は哲學の根底を以て居る者にしなければならぬと云事は誰が見ても疑ない事です、然らば如何なる哲學如何なる宗教を根底にして倫理學を組立得るか、此問題に成ると窮して來るです、如何なる宗教がよいか、禪宗の方ならば禪宗がよいと云ふ又其禪宗の中にも曹洞宗もある臨濟宗もある其他眞言天

台眞宗日蓮宗と云様に有るが何れの宗教にした者であるか、哲學で云へは諸君の方の宗教は、ヤ、ハ、リ、哲學でせうが私は能知らぬが兎に角西洋で云と哲學者と云者は「ターレス」から「ウント」「ハントマン」に至るまで何萬人と云ふ哲學者が出來て居るが是等の哲學者が各自名々に勝手な自家製造の哲學宗教と云ふ者を以て倫理學を組立た日には、幾千何萬の倫理學が出来るかも知れん、果して其れでよいか、ソ、コ、テ、困る哲學者と云ふ者は、高尚な學理を云ふても其高尚な學理を貫く事にはゆかない、何せなればと云ふに、甲の哲學者の云所は乙が之を破壊する、乙のは丙が破壊する、甲論乙駁互に破壊して仕舞ひ後には何にもない事になる、即ち「ターレス」「ヘラクリタス」「プラトーン」と云様な哲學者は、偉らゝ事を云のべすから其哲學者に付て大眞理を得たいと思ふて、耳を澄まして聞て見るとツマリ對消されて仕舞ふ、コ、ウ、イ、云ふ工合で、其次には哲學者の言一向聞くべからず信す可らずと云ふ時代が來るです、哲學史を見ますと懷疑派と云者が盛に成れた時がありますそれが遂にはゼ、ロ、に歸して仕舞ひます、ソ、コ、テ、宗教と云者も、コ、ン、ナ、工合に行きます故、俗人が眞理を得様としても、何れをも目的とする事が出來ない、互に其教へる所の者を片端から破壊してゆく傾きがある、即ち耶蘇が教へた所の者を佛教が破壊し、佛教が教へる所の者を耶蘇教が破壊すると云様に、又其同じ佛教の中にも宗派がある如く耶蘇にもある、それで他宗と自宗とは違ふ點も有て、色々混雜して居る、ソ、コ、テ、俗人が實地効力の上からは宗教的哲學的の倫理學が結構な様に考へるが其様な倫理を得たいと思ふて聞く所の者は五里霧中に彷徨しなければならぬ事に成る、

けれども其間の利害得失を公平に考へて見ると、苟くも宗教的哲學的倫理學と云者には、特に其社會が繁昌する、其社會は亡びずして、益々盛になる所に行はれた哲學宗教の中には、如何に疑ふても疑はれぬ要素がある、絶對とか、神とか、佛とか、云ふ説明に於ては、様々の解釋の有るにも拘らず、一ツ茲に疑ふ事の出來ぬ一致して居る點がある、それは何にかと云ふ、其の各が倫理的であると云ふ事です、大體に於て完全なる宗教哲學は道德に反對しない、例せば虚言は吐きたい程吐けと云ふ宗教はない、不親切でも不正直でもよいと云ふ様な事は更でない、又君に不忠でもよいと説く宗教もない、尤も或場合には有るかも知れぬが先づ親切や正直や或は正義や義勇と云様な者に向ては敵對する宗教はない、ソコデ最も井上博士が云所の論になる、宗教と云者には外の部分が含まれて居るが宗教に尤も必要で誰にも無ければならぬ所の者は外ではない、宗教の倫理的要素である、倫理的宗教でなければならぬと云言葉は即ちソコより出て來る、是は西洋にも有る事で宗教の中の重要な要素は、道德で有る、宗教は道德を行はせる所の方便である、即ち道德を行はせる所的手段として地獄極樂或は如來とか絶對とか云様な者を方便に使ふのであると云ふものもある、夫れは方便と云ふは宗教を悪く見る様に成るかも知れぬが先づソコです、之を例せば優頭で云と皮は宗教とか哲學とか云ふ様な者で甘い所は倫理で有ると云解釋です、夫故井上博士などは是に反對して哲學雜誌に非常に怒つて書いてある、夫れでは宗教が倫理に成て仕舞、決して宗教はソコナ者ではない、宗教は宗教として固有の意味を持つて居る却々是は面白い論で眞理があると思ひます、ソコ云風な譯でソコデア云折衷論が始ま

る即ち井上博士は倫理はエニール宗教と云事を云ふ、それも有らふ即ち宗教の本質は倫理であると云解釋もあるが、然しソコでなく圓丁博士の様に倫理以外に宗教は判然已有なる區域を保て居ると云人もあるが西洋に於きましてもソコ云事を常に云て居る (Ethics before religion) 即ち宗教の前に倫理と云事である、斯様な議論をやつて居るが、然し其れは事實の上に照して考へて、結構倫理には倫理の區域があり宗教には宗教の區域があると認めてよいです、兎に角我々が初め學ぶ所の順序次第がある、其順序次第としては、宗教の前に倫理を是非心得へなければならぬ、ソコデ近頃は宗教の前に倫理をと云事は西洋では盛です、是は米國の「サルター」と云人から始まりて居る、先づソコ云工合で有て井上博士の様な考へを持た者は英米獨佛等にも澤山有ります、兎に角ソコ云事は極公平に見た所でも云へるだらうと思ふ、私共も倫理の中に宗教を入れて仕舞事が出來ると云は不穩當な話して、ソコ、各々適當な領分が有るので有るけれども、然しながら夫れを研究する順序方法の上から云として、此倫理學と宗教とを離して研究するがよからふと思ふ、全く離して研究する事が出來る事で有て是は争はれぬ事實だらうと思ひます、今迄ては混して有た者を分つと云のは、夫れは「ヴント」(心理や哲學に有名な人) が云て居るが倫理學は經驗的事實の上に基いて組立て、居るべき者である、ソコ、哲學が倫理學に打立てられたる所の者を哲學の領分に破壊してはならぬと云考へを持つて居る者もある、それは先づ破壊の議論は第二段として於て兎に角倫理學は倫理として組立得る者で、其上で宗教哲學を打立つる事はならぬ者でないと思ひます、孔子の教に於ても孔子は性と命と天

道とは云はずと云ふ是は何であるか、何にを土臺にする道德の標準即ち道を定めるかと云と、子思が中庸の初めに云つ通り性を土臺として天命之を性と云ひ性に率ふ之を道と謂ふで、此性を土臺にする、ソコア性は何であるかを研究して道が定ります、道に従て行をすれば即ち道德である、孔子はそれで天と云ひ命と云ひ生死と云様な者を假らんでもよい様な事を云て居る、即ち未だ生を知らず焉ぞ死を知らんと云ふて嫌はれてあるが、然し性を土臺にして道を研究するとは信じて居たと思はれる、それと同じ工合に今説いて行く所は多くは人間の経験した事實を土臺として、此世に處する道を研究するのである、此研究が積んだ上て哲學の本体はドウかどか絶對或は神、はドウ云者かを研究し而して之を信ずるは方法上よいと思ひます、丁度孔子が平生は性や命や天道生死と云様なとを避けて居たけれども、孔子の心の奥底を尋ねて見れば、それは天と云様な者が頭を支配して居たと云とは明らかな話です、易の中に太極兩儀を生じ四象八卦を生ずると云とが有るが即ち此の易の太極から陰陽四象と分るゝと云様なとは哲學です、夫故孔子の心を尋ねて見ると、神や佛や絶對と云ふ様な哲學的思想も有たに相違ない、夫れが即ち孔子の頭の根底に成て居た、偕て夫れから人間交際の道を談ずるに當ては、それを嚮向に振りかざさない、イッでも道德とか云ふ様な者で正直をなさいとか勉強をなさいとか教へて居た、天之を命ず汝之を爲すべしと云ふ様なとは云はれない、丁度倫理學研究の方法は昔に還へる様な者です孔子は昔の「コンモンセンス」即ち普通常識で分る所のもの即ち十目の見る所十手の指す所其嚴なる哉と云ふ様な工合に十目十手の分る所の事柄を土臺として道德の學問を組立てた

が、其れから哲學的に進むと云とは遂に分業に爲て来るので、悪い事ではないとは考へられる、私共でも倫理的哲學を否定するのではない、哲學や宗教も私に信しられる様に説いて下されば是非信して見たいと熱望して居るのです、今が今納得の出来る様に御話があれば自分等も大に満足である頭から宗教は方便であるとか哲學は迷ひであるとか云ふ者は全くの俗人である、宗教哲學に本領の區域が有るから、實地効力上宗教哲學は多いと云ひ高尚な事を談ずるからと云て倫理學は夫れ自身に固有なる區域を以て其研究を許るとを許さぬも亦偏頗と思ふ、デスから分業上の便利として今日の倫理學は、科學的研究に成た事と思へばよいと思ひます、今日では學問は分業分業と云ふ事がよいと云とに成て居る、昔は學問が一ツであるが、今日は枝が咲いて來ました、倫理學の中にしても、幾科にも分れて或は軌範的倫理學記載的倫理學或は社會的倫理學教育的倫理學と云ふ様にある、浮田君が社會的に就てはドウ云ふ工合に解釋されたか知らんが、是にも非常に種々枝が咲いて居て何が社會學だか解らん様に倫理學よりもモット其敷い、社會學は心理學にも同じ様に説き、或は人類學を土臺にして見たり或は文明史と同じ様に考ふ者もあり、倫理學も同じとですが實は私も倫理が判然分業した以上には是々の學問であると斷定を下して置きたいが、今日の所では種々入り亂れて、尤で亂軍の有様である、それから一ツ注意すべきは分業の弊もあると云ふことです、折角昔から今日迄、澤山の人が手分けして集めて來た寶があるのであるが、今日の所では、夫れを一の頭の中へ入れて一に大成して組織すると云ふ頭がないのであるふ只多くの材料が集りて來て居るだけで丁度尻が大きく尾大振はずと云ふ有様である、宗教や哲學も同じ事て有て、凡へての力凡へての感情を綜合して出来る者です、分折的に重箱の隅をホル様に

やつたては出来る者ではない、成程それは緻密にも穿鑿しなければならぬが、穿鑿した上には、材料も集るか
ら、ソッ、成た以上には之をある道に向て使はなければならぬのです、即ち総合と云ふ事が必要になります、夫
故或哲學者と云者は昔に於て生きた哲學者生きた宗教家と云者は、是は各科の材料を己の頭に集めて綜合し
した者を云のです、釋迦の如き皆何でも知て居る全智全能のお方に違いない、それは道德的天才である、誰
しもやつて出来る譯ではない、それから見れば佛であると云のは常人の企及すべからざる點であると思ふか、
それ迄に行かなくとも兎に角纏める事をやらなければならぬ、然しながら今日は高い所に登りて見下す所の
総合的の頭の者が無いから、ソマリ、宗教が幾ツにも分れ其他倫理學哲學總べて所有學問が一處に纏まる事の
出来ない弊害が澤山ある、分業から来る綜合結合の出来ない弊害は又恐るべきものです、偕て斯の如く論じ
て見ますと茲で大概宗哲的倫理學と科學的倫理學の状態が獨立して居るのは略明了に成たと思ひます、即ち
分けると云ことは方便上の事柄である、分けると云のは研究の上にて精密の事を知るに利益がある、然も是
を稍こもすれば、是に泥んで仕舞ふて綜合を缺く事がある故、此點を考へなければならぬ、其等の事を心得な
ければならぬ、夫故倫理學は孔子の意味で云と性を土臺にする事、西洋の倫理學で云と經驗を土臺にして組立
てる所の倫理學があると假定して其方の研究に移るです、倫理學の二大別及其得失論は其れだけです、

第三章 倫理研究の方法

偕て倫理學の二大別は濟みますした故、今度倫理學を研究する方法はドウ云者であるかをお話致升、道はドウ
すれば見付る者であるかと云事です、此方法は道と云者は大いに人間の性質に關係を有して居る者で、此善惡
の標準の立方に依り升ては、大邊研究の變る者である、先此道はドウにある者であるか、若し果して山にて
もある者とすれば私共は是より山に向て進まねばならぬ、又海にてもあれば着物を脱いで探すと云用意をし
なければならぬ、即ち道を研究する方針が初めから變つて来る、マツカ此倫理の道は山や海にある者でもあ
るまい、然し道がある以上には空間か時間の中にあるに定まつて居る、例せば茲にコッブがある、有ると云
以上には私の前を去ると何尺盆の上に空間的に規定されて居る、茲に中島と云男が生きて居る以上は明治三
十四年七月廿七日の何時頃即ち八時十五分に生きて居ると云はなければならぬ（此時時間が八時十五分なり
し）それは何故ですか例せば幽靈があると云がドウにあるかと云に、ドウとなしに有ると云ふ然らば、イツ幽靈
が出て來ると云へばイツとなしに出て來ると云ふ、それは無い幽靈と同じ事である、それで道があるからに
は、ドウにあるかと云ふ事を定めねばならぬ、

そこで之を研究して見升すると、二に分れる意見がある、或人は心の中に奥深く隠れて居ると云ふが是も問題
に成て居ります、外からは影も形もない心と云ふ者はドウにあるか六ヶ敷いですが、然し諸君は有る者とお許
るしになるでせう、皆持て居るツ、モリですから、皆持て居ると思ふ、心の中に有るので心の外にはない事にな
るとモウ、研究の方法が違ふて來る、即ち心の中に有て外にはない事になれば、私共は心の中に有るツ、モリで

外にはないから、目を閉ぢても道は見付けなければならぬ筈である、目がある故外物に刺撃されてしもふ、それで道の發見が出来なくなる、耳があるから車の轟々たる音も聞ゆる(此時門外より人力車来る)耳目を塞いで外物の者をスツカリと外から閉さなければならぬ、外物の總べての者は心の穿鑿を害する故に外から這入る道を閉さして無念無想とでもなつて、其れに向て道を見付なければならぬ、心の中の方でもソウです、即ち心の中に目がある之を内官と云ふ、痛いとか怪いとか心の中に起て来るソウ云ふ考へもスツカリ拂て仕舞はなければならぬ、拂ひのけて来ると、ソコテ始めて眞如の月がさして来る即ち見まい聞くまい言ふまいと、心の中の妄想の雲を拂へば眞如の月は顯はれて来る、是を名けて先天法直覺法と云ふ、心の中に作り付けて道が出来て居る、出来て居るので有るが五官が外物に對して邪魔をされ痛いとか怪いとか飲たいとか喰いたいとか、色々の妄想の雲を拂て仕舞へば、道が直に顯はれると云のですから、人間は、チヤンと心に善惡の標準を持って居る事になる、所て是は至て宜敷い説であるが、斯様に申すと彼の有名なる「カント」などもソウです、東洋の倫理なども、ソウ云側です、殊に東洋でも、王陽明などは甚敷しく直接にコウ云と云て居ますが、それでも非難が出来て来る、成程それは心の中に道があると云ふ事を假定して出て来るので有る、が、其の他心の外に有ると考へて居るものもある、例せば茲に何にもない、テ、ラ、ラ、ラ、ラサである茲へ持つて来て道が有るのは是は外からはり付けた物である云、即ち「ベーコン」「スペンサー」「ミル」と云様な人は誰でもソウ云學説を稱へる事が少くない、斯様に若し外から道が這入て来るならば只目を閉ぢて外物に觸れないとするのは

いけない、成だけ目をバツチリ開いて打かれたら痛いと感じる様に外物に注意するのである、ソウ云工合になるとスツカリ方法が變て来る即ち見るなれば所有物を見なければならぬ、茲に木がある家がある海がある、又海があれば其中には何にかあるか水の分子は何にかと云様に、ありと所有る者を凡べて見たり聞いたりしなければならぬ、種々の者を明かにして而して此宇宙の中には「ヘラクリタス」が云た様に何にか此宇宙には微妙の聲が聞える、彼の天空に光て居る星と星が話をして居るのも聞かねばならぬ、又蟻は蟻雀は雀と話をすることでも天地間の物皆悉く能く見たり聞たりせねばならぬ、即ち研究の方法が丸で前と變て居る、外に向て眞如を見るのは究極がない、之を名けて後天法經驗法と云ふ、是は丁度朱子と王陽明の争ひが茲に本いて居る、王陽明は必らずしも本を澤山讀む必要はない、今云ふ通り心の中にある眞如を發見する側です、心の方で云と工夫に工夫を凝らして行きます、けれども朱子は何でも知れと云事を云て居る殊に昔の聖賢君子が書いて居る書物を研究するとは必要である、即ち其書物にかいてある所の種々の話其他草木禽獸の事又は宗教に關する事等凡べての事を知るのが必要であると教へて居る、夫故何も斯も學問をせねば道を知る事は出来ぬ、それで此朱子陽明の相違は諸君も御承知で有らうが格物致知に付ても議論がある、

事物——道德的事實
社會現象

格別致知

それで道德の標準を知る様に付て、王陽明の方は格物致知と云事は、物を格たすと云と成る、事に當て事々に付て自然に工夫をして眞の知に至ると云ふ事でせう、それから朱子の方では何も斯も色々の事を研究して知に至ると云とです、是は大分昔から議論のあるとは其歴史を讀まれた方は御承知であらう、私も此事は或雜誌に書いた事がある、中々面白い研究問題である、それで朱子は本を讀で始めて知ると云方であるし、王陽明は慥かに心の中に曇りのあるのを取り除くと云事は傳習錄の中に書いて居る即ち王陽明は先天法であるし、朱子は後天法を取る工合に成て居る、それで少しく西洋の方に付て云て見ると、「プラトーン」は先天法であるし、「アリストテレス」は後天法である、そこで「プラトーン」は「ドク」云風にやるかど云に或絶對の善と云者から、それを心の奥底に立て、其心の中に立つ者を土臺にして人間は世の中に斯くすべき者であると云教を立てた或一の言葉を即ち眞理を顯すべき者を土臺として道を説いた、「アリストテレス」は「ソ」てなく後天法であるから、成程それは草木禽獸迄も微細に調べよとは云はぬが、然しながら人間が實地に考へて居る事を多くの人の道德上の考を聞いて、道德の眞理に至らなければ、本當の道を發見する事は出來ないと述べて居る、只獨斷的に或一の教へを立て、其教へから、急に割出して凡べての事を律し去る事は、間違て居ると云て居るです、それから「モーツァルト」は「カント」は先天法に取ては今日では極よい代表者である「カント」に對して今日では、英國に行はれる倫理的研究方法が後天法經驗法に成て居る、ソレ、デ「カント」は丁度王陽明が朱子を攻撃した工合に多少の相違はあるが「カント」は同時に英國に行はれる方法を評して居た、種々の道德上の倫理が

學問に依て出來なければ學者でなければ德行は出來ない筈であるが、けれども實際に於ては學問なくして德行は出來る、夫故經驗上種々の事を知てそれから後に德行が出來るのでなく道は心の内面から公平無私である以上は、直に良心の聲として顯はれて來なければならぬと云様に云て居る、即ち王陽明が朱子に向て小言を云て居ると同じである、所で英國派の者になると經驗を土臺とする故、それは成程良心に依て心の内面に聞いて見れば、善悪は分らぬこともなからう、けれども善悪はソウ、短簡に定める譯にはいかない、それで心の中に一寸聞いてみれば、心の中には淨玻璃鏡の様な者があるとして、それに向て聞いて見れば直に分ると云事は、それは甚だ危険千萬である、例せば或る政治的暗殺者が良心に向て刺すべきや否やと聞いて見る時に良心が刺すべしと云へば、それは劊呑でたまらん、直に或る政治家が殺される、先づ直覺派ではソウです、是は經驗派の非難する所である、即ち「カント」は感情とか感覺とか種々ソウ云者に就て、心を淨めると云ふことは王陽明の心を澄まして雲のない様にして置くことと同じで、夫故王陽明の學派は威勢のよい者が澤山出て居る、諸君禪宗の方でも此直覺法と云ふ方に近い方と思ふ、然しそれはよい事もあるが餘り「テッキ、バッキ」にやると危ない、之を英國の經驗學派からば間違てあると云ふ、何にでも能く事實の真相を取調べ、又古の聖賢が云はれた事即ち釋迦耶蘇孔子並に倫理學者の言を聞いて、それで今日の境遇に對して如何に行ふべき心を「トツクリ」と二十日も三十日も考へて、夫から後に殺すがよいと云事に成る、ソウ成ると不利益な事もあるが、慥かな事を考へる事が出來る、經驗派では經驗的倫理法に限るものとして種々の事を調べる即ち法

律も野蠻の風俗も研究し、又人情も歴史も研究し又文明史も社會學も研究して、夫から後に道德の道の何たるかを知らんとするのが、經驗學派の本領です、それで始めて道と云者は斯様なる者であると云事が知れる、併て此二の得失は、*ド、*かと云に自ら一朝一夕に論定する考への者もあるが、左りながら之を細かに論定する事は中々出来ないうす、然しながら常識で見た所で淨玻璃鏡に向て直覺的にやるのは危いのです、そこで諸君がそれに依て、善惡の標準を定めるのもよくない、又英國の經驗學派でもそれでも蟻虻は、*ド、*であるとか蚤や蚊は、*ド、*云習慣があるか凡べての事を知らなければ道德が行はれないと云、容易に判断は下されないと云是も奇怪な話です、一の善行を仕様と云に極樂を何邊も通り越した後でなければ出来ない事になる、それですからは又頸を傾げざるを得ぬのです、*シ、*見ると其何れを取るべきか先天法後天法何れを取ると云へば、即ち或程度迄は、*ド、*チ、*ラ、*も取りたいと云事に成る、即ち先天法がよいと云ても或程度迄は後天法を用ゐなければならぬと云事を考へる、然らば此二を、*ド、*だけの配劑にした者で有ふか之を定めるのは七分三分にした者か、之を定めるとは中々六ヶ敷い事は、*ソ、*ナ、數理的に醫者の藥を調合する様な譯にはゆかない、即ち一概に研究するのでなく一方を取らず兩方共に合せて取ると云事が必要です、即ち經驗の細い所は倫理學の補助學科として取る、けれども倫理の本論には澤山なくても方が付きます、是を倫理學の研究方法の中で先天後天并用法、直覺經驗兼用法と御話して置きます、

倫理學研究の方法に就きて前に申しましたが、今少し申さなければ充分でないと思ひます、孟子が「博學而

詳説之將以反説約也」と云てありますが是れは、*ど、*云譯かと云へば即ち初めは種々なる材料を集めて其中から或る主義を發見するといふ事であり、此の方法は頗る善いので、成るべく世の中の事柄に就いて、其理由を問ふて見、亦能く道德の現象を廣く見て、其中に含みて居る處の精神(理由)を發見すると云ふに就て、例せば盜を爲すは惡い事であるとは誰れでも云ふけれども、西洋のスバルタ國の如きは盜は善としてある、それ故盜をするにも善き場合と惡き場合とある、平常吾人は盜は惡い様に云ふが、亦場合に依ては惡いとも限りません、それから人殺しもしも同じ事で惡いとは云ひますが、場合に依ては善い事もある、現に法律に於ても正當防禦の場合には人を殺しても罪にはならない、*ソ、*デ、*ス、*吾人が實物に就て考へて見ても分る、何故或る場合には人を殺しても善いか、何故或る場合には盜をして善いか、と云ふ事も考へて見ると、或る理由が見付かるでしやう、然らば其理由を何處に發見し得るかと云ふに、其理由を誰れに問ふても分らない、又別段書物に書いてある譯でもない、が、さて其理由を認めるには、自分の頭で考へるより外ないです、即ち其理由を認むるは所謂一種の工夫悟りである、故になるべく、殺す盜むと云ふのみでなく、人に慈善をすると云ふ事も亦布施をするに云ふのも善い事であるが、亦惡い場合もある、腕力の強い書生に向て、猥りに物を施すのは善くない、又乞食に錢を施すに就いても、無暗に施すのは惡ひです、左様云ふ事を一一有らん限りの事實を尋ねて、何故に布施するのは善いか亦惡いか、何故に善いと惡いと違ふか、何故に殺人は惡いか善いかを、實際に就て理由を發見する、然すれば是れは道德の標準になります、確かに研究が出来ます、

ソウ云ふと譯のない様なれども、ソレは即ち單に一ツとして二様の事柄を研究して理由を見付くるも善くない、又單に手製だけの理由ではいかん、所謂悟りなるものは、ソウ六ヶ敷き物では無い、悪く云へば、スマスと云ふ様なもので、浮世は斯くの如きものだなど、スマシて居れば善い、たゞ善にも惡にも關せず一人りで偉い氣取りで唯我獨尊を氣取る事も出来る、けれどもソウ云ふ風であると、山に住む老爺も皆偉い悟りがある、宇宙間の眞理も學者も丸呑みにして居る様な風である、尤も諸君の如き學者の前では、ツマラヌ様な考であるが老爺や老嫗と雖も自分丈けでは、悟りて居る、蟬の鳴くのはかうだとか、太陽は斯様な物だとか、或は月蝕がどうだとか、流行病は斯様だとか、皆知つて居る、皆悟つて居からして、ソウ云ふ人は一種の安心立命を得て居る、倫理も其の通り善惡の理由を考へるに就て、狭まき經驗を以て、即ち節穴的眼孔を以て僅かの事實を土臺として、其れより悟る處の一種の悟りがある、處がそれは、何處からくるかと云ふに、材料が外にある、内面から、それに向て一種の工夫、悟が出て来る、是は先天許りても後天許りでも亦經驗のみでも、いかない、直覺も必要である、併し其の直覺は誠に狭ひ、此の直覺は下等の悟りである、餘り早く悟るのも困る即人殺しは惡しき事であるから、其理由に就て餘り粗末な悟り方では悪い、それ故今日では此の悟りてやるにしては成るべく多分の事實を見てやらなければならぬ事になりて、其上自分が獨り悟つたならば、尙其悟つたものを、世界の現象に照らして、己れの悟りて、果して世の中の事が判断し得るや否やを觀察して、彌々間違が無ければ、是れを所謂最後に正當の悟りと云ふてよい、ソレが一番上等の

悟りて即ち道德の標準になるのです、道德主義もソレですから、内面の工夫が無い以上は、イクラ書物を讀でも出てこない、書物を讀めば學者になると云ふが、ソウでない、必らず内面の工夫を待たねばならぬ、然らば内面許りでよいか云ふに決してソウでない、經驗的材料を入れねばならぬ、先づ先天と後天とは斯様な譯で、今日に於ては、歸納法とか演繹法とか種々々々（ヤカヤカ）云ふもの、實は論孟にある孔孟がヤツタ方法も別に變りはない、たゞそれを細かく云のみで、ツマリ多くの事を廣く學びて、約に反る即一に歸するのである、約は即ち一であるから扇ならば要めに歸するのである、孔子も一以て之を貫くと謂つて居るが、先づ初めに種々雑多の事を研究して、終に一に歸すると云ふ研究の仕方は、是れも一種の研究法を云ひ顯はしてあると見てよい、ソレカラ孔子の云はれた語にも「學而不思則罔、思而不學則殆」と云ふ事があるが、即學ぶ事は雑多の事を學ぶが、たゞ學ぶのみで一貫の主義理由を求めない場合になると、即ち罔と云ふ事になる、種々なる事は知つて居るも、事理に通ぜぬ事になる、諺に萬能足りて一心足らずと云ふ事があるが、たゞ澤山頭の中へ入れても、一貫の主義が通じて居りません、是れは常節にも能くある事です、ソレカラ「思而不學則殆」是れはたゞ一貫の道理を考へて居るのみで、其の一と云ふのは、節穴から天を見る様なもので、其の小さき眼孔から得たる悟りを以て、凡ての事を割り出すと云ふので、已に土臺に色がついて居て頭に成心と云ふものが出來て居るのである、例せば世の中に處するには金一方であると考へる、欲深き爺は、義理にも人情にもせはず、何でも金に限ると云ふ思想が土臺にある、然様な人間は一度金を握つたら放さないと云ふ、

凡て其主義を以て割り出すのである、道德主義になりても、粗末な主義は極端なる利己主義となる、揚子の所謂「一毛を抜いても天下を利する事は爲さざるなり」と云ふ様な譯で、人の爲めにする事は毛一本も抜く事はイヤだと云ふ、然様に道德主義を悟つたものは利己主義に限ると思ふて居る、ソウして他の孔子の云ふ事も孟子の云ふ事もきかないで、其の結果危しと云ふ事になる、

故に今日でも倫理學者「スペンサー」の本を讀んで見ても、氏が道德を論ずるは、生物學も社會學も心理學も皆研究して、其の結果倫理學を著はしたものである、又獨逸の「ヴェント」氏の倫理學を讀んで見ても、是れは英譯も出來て居るが、初め第一卷に於ては、道德的事實と云ふものになりて居る、それ等を研究して、漸く主義を發見すると云ふ事に基くものです、是れ丈は一寸前の講義を補つて置きます、

次に倫理本論と云ふ事は單に主義を論ずればよいのであります、即ち最高の悟りは斯様なものである、善惡を區別するのは斯様なものであると云ふ事を論ずればよいのですが、其前に種々なる事を研究する事が必要であるから、即ち補助學の必要ある事は前回大略申した筈である、それに次で今日は第四番目に倫理學の職分と云ふ事に就て述べませう、

第四章 倫理學の職分範圍

倫理學は如何なる職分を有するかと云ふ其の範圍を述べますが、先づ前にも云ふ通り、一の方法に依つ

て倫理と云ふもの、主義、道德の標準と云ふもの、智識を得て、ソレ、カラ此の道德の標準と云ふもの、主義を知るのが倫理學の職分である、即ち道と云ふものを知るのが先づ倫理學の職分である、

然るに其の智識なるものが、例へば道德の上に就て、昔は「長人安民」今日では「公安(公利)」にありと云ふと云ふが、先づ斯様な處に到着したとして、即公利とか公安とか云ふ處に到達するも、此の智の性質は活きて居る智識、即ち活智なりと云ふもよし、是れに依つて直に人の行ひを活かさせるのである、此の智識の性質は行的性質を以て居る、王陽明が知行合一を唱へしは倫理上の智識は物理上の智識と異り、行的性質を有す、即ち物理上の智識は「ニュートン」の重力法の如きものである、即ち大なるものと小なる物と二つあれば互に引き合ふ作用あり又石を空中に投ずれば、一度は上に上るも遂に地に引き付けると云ふ智識は唯だ吾人が其有りの儘を知るだけである、倫理上の智識はソレと異り、吾人に向て直に斯くせよと命令する力あるものなり、例へば汝は長人安民的に行へよと云ふ風に吾人に對して命令する、又人の所作を見ても、あれでは公安にならぬとか公利を害するとか自分の智識に依て自己の行爲を支配し又世の中に對して人の善惡是非を批評するものである、故に倫理上の悟りを得て居るものは(吾人は大概倫理上の悟りを得て居る)其の悟りに依て己れの身を處し又世の中を批評して行くのである、故に世の中の人には口矢釜敷きものであつて、其悟りに粗細の區別こそあれ、兎に角一種の悟りを有して居る故、皆一種の倫理學者である、故に其主義に依て皆己れの身を律して行くに相違ない、即活きた智識に依て全體を支配して居るのである、即ち諸君は一の活智を

有して居る、随つて其智識が諸君の體を動かすのみならず人を批評して善いとか悪いとか判断するものである。例へば金主義を悟るものは、世の中を見ると、釋迦や孔子の如き人は馬鹿に見へる、ソレは人へのみ親切にして自分は生涯貧乏して居るので、世の中へ貧乏しに生れた様なものだと思ふ、ソレと同じく道徳上にも利己主義を取る人即ちマンデハルの如き又楊子の如き人の考から見ると、それと同じく世の中の義理人情の如きは可笑しく見える、然し孔子や釋迦の目から見ると外のものには皆憐れな情けないにも思はる、斯様に皆各自の活智を以て世の中を見批評して居る、先づ世の中は斯く成つて居るのであると思ふ故に道徳の主義に就て或る程度の悟りを得れば其の智識の作用は行的の活智なる故、此の體を動かし世間を動かす性質を有す、大學に於て、「在明明徳、在新民」の意味で必然に新民と云ふ必要起る、而して始めて世の中を改良せんとする傾向を生ずるのである、即ち倫理上の理由を悟る以上は、其悟りは活智なる故己れが世の中を改良せんとする傾きを持つて居る、故に倫理の主たる要義は、所謂道徳の標準を得るのであるが、然し其の標準を得たならば、之を己れに應用して世の中に應用する處までになる、之を倫理學の職分として批評的或は惡い意味で破壊的に、今までの世を破壊して更らに完全なる社會も造らうと云ふ傾きを持つて居る即ち破壊的革新的の性質を持つて居る様にも申します、兎に角倫理道徳に就て意見がある人は世の中に好まれぬ側になります、即ち釋迦も孔子も必ず其時代に於て評判の善きものではない、今日こそ渴仰されて居るも其當時は婆羅門のみでなく他の人々にも餘り人望ありしとは思はれない、孔子も亦物の道理を知らぬ馬鹿と思はれたかも知れぬ、又甚だしきになるとソクラテスの如く毒でも呉れられるかも知れぬ、亦耶蘇の如きも此の類である是れ皆倫理的の智識は活智て人を規正し革新らし様と云ふ職分ある所から起つてくる、而して此の活智は別に吾人の體を離れて生きて居るのではない即ち生きて居る人間の頭の中にある行的のものである故に其の活智換言すれば此の道徳上の主義と云ふ一種の悟りが漸々と生ける人間が赤子が青年、青年から壯年となる様に矢張り順序を経て、其の悟りが漸々と改良されて出来たので、即ち人間の頭に歴史を持つて来た所の智識なる故倫理學の研究は發達の方面に渡りて考へねばならぬと成つて来る、是れからが範圍の問題になります、倫理學は前に云ふ通り活智である、凡て活けるものは變化がある、活きた智識が頭にある爲めに、其生物の生長發達する法則をも考へねばならぬ、ソレが倫理學の根本なる問題としては實に範圍を云ふと、道徳の標準なるものは、何物なるかを知らんとすると同時に其標準は如何にして、吾人の頭の中へ生じて来るかと云ふ問題をも研究せねばならぬと成る、是れは頗る重要な問題で、昔しは直覺論で云ふ如く、人間の道徳心なるものは、性來鏡の如く造られてあるものと信じて居るものは、此の發達論を疎略にして置くが、今日はソレでない、悟りは人の心に段々と生長發達するものであるを知る様になりました、ソレで道の本質論及び發達論は極めて必要になりました、此れを道の起原論と云ふてもよい、道は如何なる萌芽から来たのか、例せば此處に松がある此の松は歴史を有して居る、即ち始めには松の實から生じ、段々雨露水土の力を得て、永年の間に、今日の有様を爲す如く、彼の大聖人釋迦孔子の如き人の悟りも必ず起原を持つて居る、即ち松の

第四卷 倫理學の職分範圍

木の成長發達に順序ある如く次第に眞正なる悟りが開けて來たのであると云ふ風に研究するが必要になつて參ります、故に私の方の研究の仕方は、直覺的に、グット覺るとは出來ない、漸々に工夫研究して悟るとになつて居る、而して其悟るに就ては法則があるので、滅茶に悟るのではない、即ち經驗的に一歩一歩進んで行くのである、恰も佛教に云ふ聲聞緣覺と云ふ如く階段があるので、是非之を進まねばならぬ、此は教育の上にも必要である、兒童を教育するに就ても無茶にやる譯にはゆかない、必ず心理學的社會學的に考へることが必要に成て居る、道の發達論と本質論、此れは倫理學に於ける二つの根本問題であるから、此の問題が解れば後の事は何でもないが、此の活きた標準の種々なる方面に亘つての概念は、様々に分れて居るから其概念を研究するとが入用です、即ち徳とか義務とか云善とか云ふもの、總べての概念を論ずるのである次に標準の應用を論じます、是れは倫理學の範圍を區別すると斯様に種々に分れて來ます、即ち應用は道の本質を當てはめて實際に就て之を用ふるのである、即ち己れに對しては如何に行ひ人に對しては如何に行ふべきか、尙ほ世界に對し人類に對しては如何にすべきかと云ふが如きは實際の道德の方になる、此は宗教ならば即ち説教である、今大要だけを御話しすれば、倫理學の職分は道の智識を得て、其發達を究め、世に應用し世の中に向て批評的改革的態度を取る點になる、

第五章 道の發達論

道は何處にあるのか、道は何處にも見へないが、有るには違ひない、今それを論ずるのであるが、倫理學に於ては、自然にあるとを假定せねばならぬ、若し道が世の中に少しもないとすれば、倫理學が初めて之を造るとは出來ない、故に自然にある道を材料としてそれに倫理學が研究を加へて、即ち多少修繕を施すより外はない、故に道なるものは必ず自然性のものであるに相違ない、例へば自然性の鳥は、所謂家畜となつて居る、又自然性の鶏は矢張り家畜となつて居るが如きものである、而して倫理は此の自然性の道に、比較的考察を加へて、所謂倫理學上の道德の主義を發見するのである、故に自然性のもは道の本である、其自然性のもは何處にあるか、即ち社會の凡てにある、然らば如何なるものが道の初めてあるかと云ふと、道の初めは人の習慣です、意志の最も初めに活動したのは、クセである、勿論人間には意志ありて、自然と天性に依て活動する、例せば赤子の如き、教えぬ先きに乳を吸ひ、手を伸したりする、是等は皆天性にやるので別段親が教えた譯ではない、是れと同様に極めて野蠻なる昔の人間にも道があつたかと云ふに、矢張り是れは赤子の如きものである、其昔しの特でも一種のクセがあつたに違ひない、即ち此のクセは態々作らふと思はないでも自然に出來るのである、是の習慣は即ち善惡を判斷する處の根本である、是れは最も注意すべき處と思ふ、而して今日に至るまで細かに進で來たと云ふのである、故に古語にも「不知不識從帝則」と云ふとがあるが、能く此の自然性の道理を云ひ顯はしてある、亦支那で昔から此の道の事を常と云ふてありますが、此の「常」と云ふとは人間が殊更に天然に逆つて作つたものではなく、人間の天性自然に隨つて出來た當然の道と云ふ